越知町埋蔵文化財発掘調査報告書第１集

女　川　遺　跡

1997・3

高知県越知町教育委員会

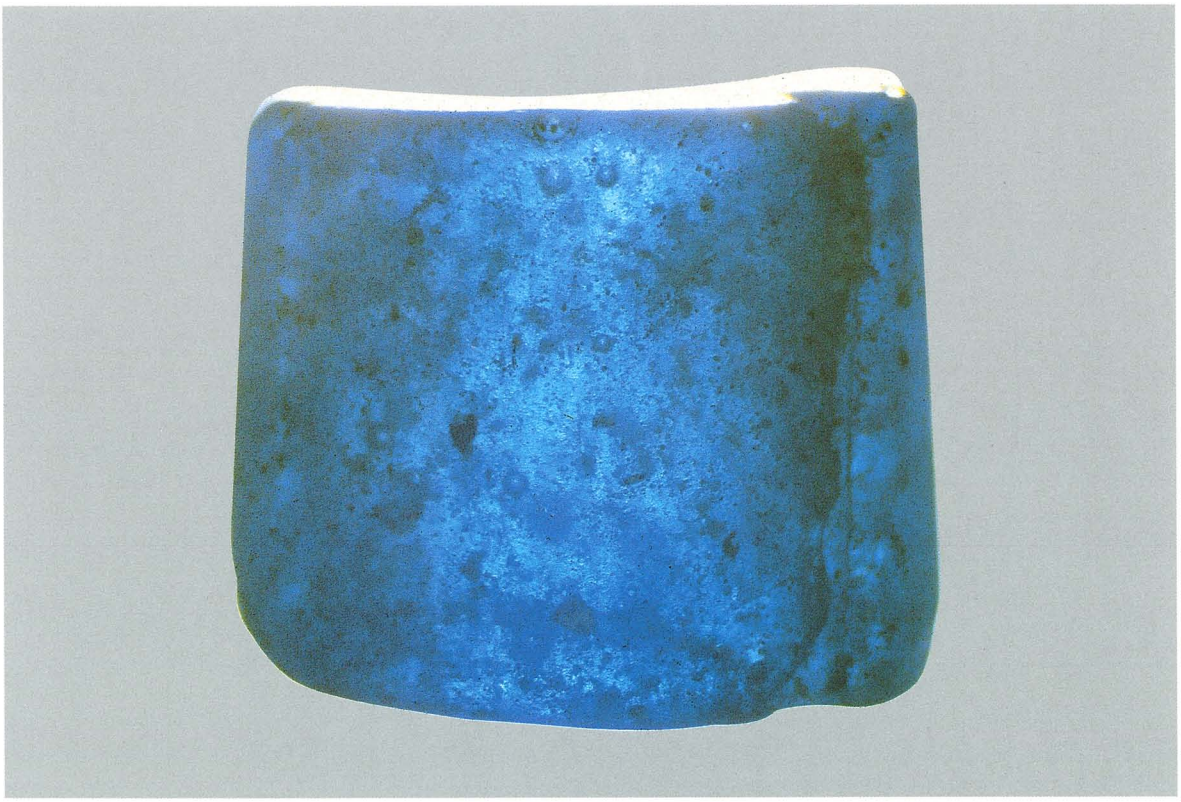
女　川　遺　跡

1997・3

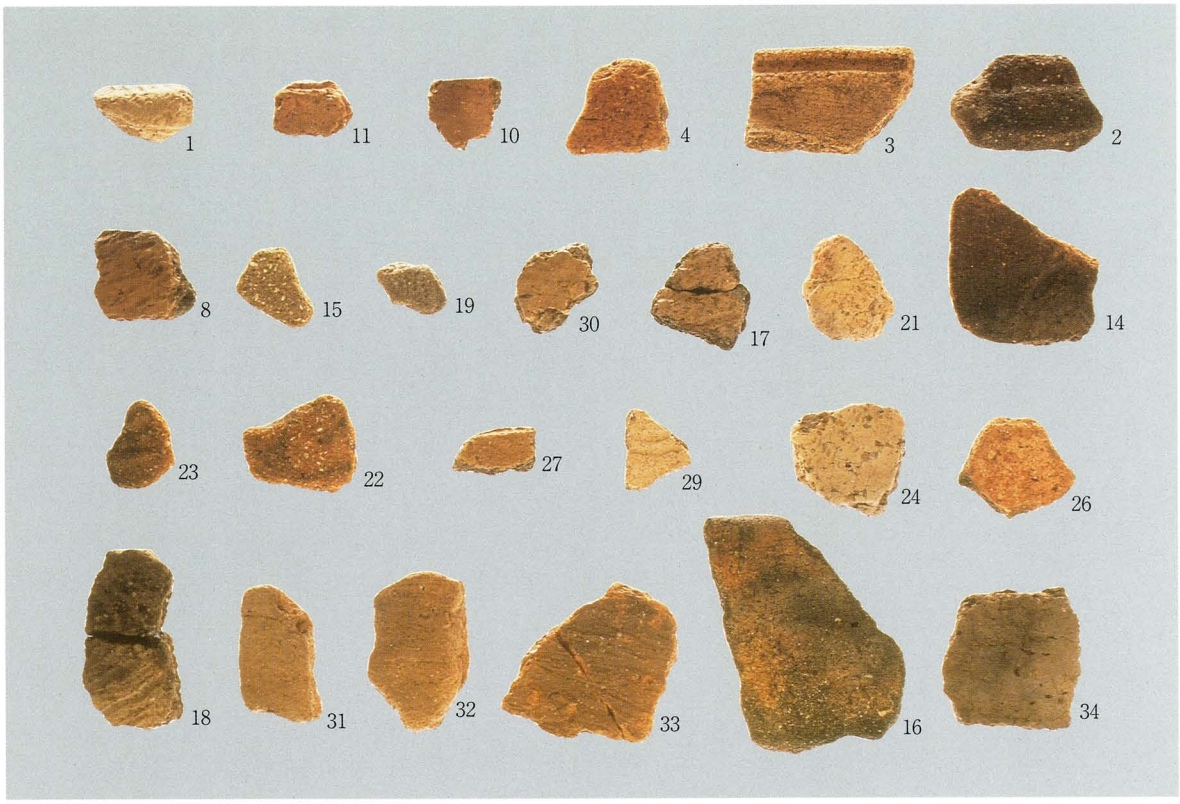
高知県越知町教育委員会

第１次調査ＴＰ10 出土半円筒状ガラス製品（外面・両端面）

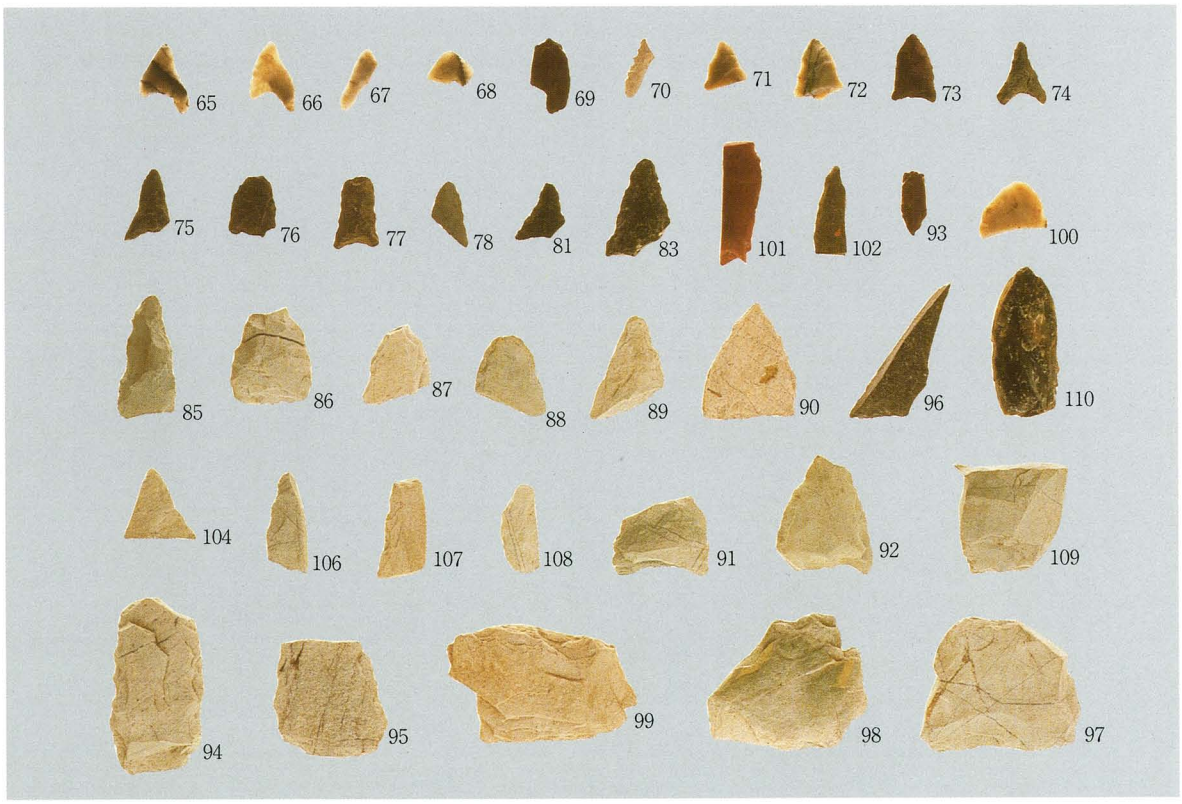
第１次調査ＴＰ10 出土半円筒状ガラス製品（内面）



同上（外面，透過光）



第１次調査出土遺物（縄文土器）



同上（石器）

序

越知町は、高知県の中部、高知市から西方32キロメートルの山間地にあり、南北に細長い長方形をしています。周囲は八町村に隣接しており、標高300から1,000メートルの石鎚山系の支脈に囲まれ、西方に横倉山県立自然公園を仰ぎ、その間を仁淀川が流れ緑と清らかな水に恵まれた自然豊かな町です。

越知町教育委員会では、町の開発事業等に伴い女川遺跡の発掘調査を３次に渡り実施いたしましたところ縄文時代から近世の遺構・遺物が数多く発見されました。

本書は、その発掘調査の成果をまとめたものです。本年度の成果により、今後の調査に一層の期待が寄せられます。

最後に、調査にあたってご指導を頂きました奈良国立文化財研究所遺物処理研究室長肥塚隆保氏、㈶高知県埋蔵文化財センター曽我貴行氏並びに調査に深いご理解、ご協力を頂きました地権者の皆様方、関係者の方々に厚くお礼を申し上げます。

平成９年３月

越知町教育長　西　森　英　彦

例　　言

1．本書は遺跡確認調査（第１次調査），個人住宅建設（第２次調査）及び町道建設（第３次調査）に伴う，女川遺跡の発掘調査報告書である。

2．女川遺跡の所在地は，高知県高岡郡越知町女川北屋敷ほかである。

3．調査期間ならびに発掘調査面積は次のとおりである。

	（調査期間）	（発掘調査面積）
第１次調査	平成７年12月５日～12月21日	４６㎡
第２次調査	平成８年２月16日～２月29日	１７５㎡
第３次調査	平成８年３月４日～３月16日	２０７㎡

4．発掘調査及び整理作業は，財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターの指導を得て，越知町　教育委員会が実施した。調査体制は以下のとおりである。

調 査 員　　曽我貴行（財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター・調査員）
調査事務　　岡　義雄（越知町教育委員会・教育次長）
同　　戸田千秋（越知町教育委員会・社会教育係長）
同　　千頭由香（越知町教育委員会・主幹）
同　　織田幸治（越知町教育委員会・主事補）

5．本書の執筆・編集は曽我がおこなった。

6．遺構等の名称については，それぞれＴＰ（試掘坑），ＳＫ（土坑），ＳＸ（不明遺構），Ｐ（ピット状遺構），Ｋ（撹乱坑），ＴＲ（トレンチ，試掘溝）等の略号で適宜表記した。それぞれの番号は各次調査及び各調査区における通し番号である。

7．遺物実測図の縮尺は土器が１／３，石器類が１／１，１／２及び１／３である。挿図及び写真図版中の番号は実測図の番号と一致している。

8．出土遺物の色調については，『新版標準土色帖1996年版』の名称を使用した。

9．Fig.１は国土地理院１：25,000地形図「大崎」,「越知」を使用した。

10．遺構測量は任意座標でおこない，挿図中の北は磁北である。また挿図中のレベル高は海抜高を示す。

11．発掘調査に際しては，当該土地所有者である西森正起氏・大原光鶴氏・大原喜久子氏・藤原牧子氏・貞岡登志子氏・小田幸三郎氏・山本孝宣氏の全面的な御理解と御協力を賜り，調査を円滑に遂行することができた。記して衷心より謝意を表す。

12．出土したガラス製品の蛍光Ｘ線分析に関しては，肥塚隆保氏（奈良国立文化財研究所遺物処理研究室長）を煩わせ，数々の御教示，ならびに玉稿を賜った。記して衷心より謝意を表す。

13.発掘調査及び報告書作成に際しては，高知県立歴史民俗資料館，高知県教育委員会，財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターの諸氏から御助言・御協力を賜り，また次の方々から貴重

な御助言・御教示を賜った。御芳名を記して衷心より謝意を表す。

岡本健児（高知県文化財保護審議会会長）・藤田　等（静岡大学名誉教授）・河瀬正利（広島大学）・藤野次史（広島大学）・川越俊一（奈良国立文化財研究所）・佐川正敏（奈良国立文化財研究所）・深澤芳樹（奈良国立文化財研究所）・嶋田光一（飯塚市歴史資料館）・藤田三郎（田原本町教育委員会）

14. 発掘作業においては，大原組，社団法人佐川・越知・日高広域シルバー人材センターならびに，近隣にお住まいの方々の御協力を得た。記して衷心より謝意を表す。

15. 整理作業に際しては，次の方々に御尽力いただいた。御芳名を記して衷心より謝意を表す。

川井由香　　池本　恵

16. 遺跡の略号はそれぞれ「95－26ＯＧ」「95－36ＯＧⅡ」「95－37ＯＧⅢ」とし，出土遺物の注記等にはこれを使用した。

17. 出土遺物等は越知町教育委員会で保管している。

本文目次

第Ⅰ章　調査に至る経過 …… 1

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 2

第Ⅲ章　第１次調査 …… 4

第Ⅳ章　第２次調査 …… 25

第Ⅴ章　第３次調査 …… 32

第Ⅵ章　総括 …… 48

付編　　女川遺跡出土半円筒（勾玉）ガラスの分析 ―――――――――――――― 肥塚隆保

挿図目次

Fig. 1　女川遺跡と周辺の遺跡（S：1/25,000）……3
Fig. 2　第１次～第３次調査調査区配置図（S：1/500）……5
Fig. 3　第１次調査調査区配置図（S：1/500）……6
Fig. 4　ＴＰ１～ＴＰ３平面図・土層断面図（S：1/40）……7
Fig. 5　ＴＰ４～６平面図・土層断面図（S：1/40）……8
Fig. 6　ＴＰ７～９平面図・土層断面図（S：1/40）……10
Fig. 7　ＴＰ10・11平面図・土層断面図（S：1/40）……11
Fig. 8　第１次調査検出遺構（S：1/20）……12
Fig. 9　ＴＰ10遺物出土状態平面図・同鉛直分布図（S：1/20）……14
Fig.10　第１次調査出土遺物１（縄文土器）……15
Fig.11　第１次調査出土遺物２（土器・陶磁器・土製品）……16
Fig.12　第１次調査出土遺物３（石器）……17
Fig.13　第１次調査出土遺物４（石器）……18
Fig.14　第１次調査出土遺物５（石器）……19
Fig.15　第１次調査出土遺物６（石器）……20
Fig.16　第１次調査出土遺物７（石器）……21
Fig.17　第１次調査出土遺物８（石器）……22
Fig.18　第１次調査出土遺物９（石器）……23
Fig.19　第１次調査出土遺物10（石器・ガラス製品・金属製品）……24
Fig.20　第２次調査グリッド割り図（S：1/200）……25
Fig.21　第２次調査遺構全体図（S：1/100）……26
Fig.22　第２次調査北壁土層断面図（S：1/40）……27
Fig.23　第２次調査撹乱状況図（S：1/40）……27
Fig.24　第２次調査検出遺構（S：1/40）……28
Fig.25　第２次調査出土遺物１（土器・陶磁器・土製品）……30
Fig.26　第２次調査出土遺物２（石器）……31
Fig.27　第３次調査調査区配置図（S：1/500）……32
Fig.28　第３次調査遺構全体図（S：1/100）……33～34
Fig.29　第３次調査Ⅰ区北壁土層断面図（S：1/40）……35
Fig.30　第３次調査Ⅱ・Ⅲ区土層断面模式図（S：1/40）……36
Fig.31　第３次調査Ⅱ区撹乱状況図・石列平面図（S：1/100）……37
Fig.32　第３次調査Ⅱ区石列平面図（S：1/40）……38
Fig.33　第３次調査検出遺構１（S：1/40）……39
Fig.34　第３次調査検出遺構２（S：1/20）……39

Fig.35　第３次調査出土遺物１（土器・陶磁器・土製品）……40
Fig.36　第３次調査出土遺物２（石器・金属製品）……41
Fig.37　第３次調査出土遺物３（石器）……42
Fig.38　第３次調査出土遺物４（石器）……43
Fig.39　第３次調査出土遺物５（石器）……44
Fig.40　第３次調査出土遺物６（石器）……45
Fig.41　第３次調査出土遺物７（石器）……46
Fig.42　第３次調査出土遺物８（石器・石製品）……47

表目次

表１　女川遺跡と周辺の遺跡一覧……２
表２　第１次調査ピット状遺構計測表……13
表３　第２次調査ピット状遺構群計測表……29
表４　第３次調査ピット状遺構群計測表……41
表５　土器・陶磁器観察表１……50
表６　土器・陶磁器観察表２……51
表７　土器・陶磁器観察表３……52
表８　土錘観察表……52
表９　石器・石製品・ガラス製品・金属製品観察表１……53
表10　石器・石製品・ガラス製品・金属製品観察表２……54

写真図版目次

巻頭図版１　第１次調査ＴＰ10出土半円筒状ガラス製品
巻頭図版２　第１次調査ＴＰ10出土半円筒状ガラス製品
巻頭図版３　第１次調査出土遺物
ＰＬ．１　女川遺跡遠景
ＰＬ．２　第１次調査ＴＰ１～ＴＰ４
ＰＬ．３　第１次調査ＴＰ４～ＴＰ８
ＰＬ．４　第１次調査ＴＰ８～ＴＰ11
ＰＬ．５　第２次調査調査前状況
ＰＬ．６　第２次調査遺構検出状況
ＰＬ．７　第２次調査遺構完掘状況
ＰＬ．８　第２次調査調査状況，検出遺構
ＰＬ．９　第３次調査Ⅰ区調査前状況
ＰＬ．10　第３次調査Ⅲ区調査前状況，同Ⅰ区遺構完掘状況
ＰＬ．11　第３次調査Ⅱ区遺構完掘状況，同Ⅲ区遺構完掘状況
ＰＬ．12　第３次調査調査状況，検出遺構
ＰＬ．13　出土遺物（土器・陶磁器），同（石器）
ＰＬ．14　出土遺物（石器），同（土器・陶磁器）
ＰＬ．15　出土遺物（石製品・ガラス製品・金属製品），同（石器・石製品）
ＰＬ．16　出土遺物（石器）

第Ⅰ章　調査に至る経過

女川遺跡は高知県高岡郡越知町女川北屋敷ほかに所在する。昭和51年刊行の『全国遺跡地図高知県』の時点で登載されている遺跡であり，縄文時代後期を中心とする石鏃・石槍・石斧・石核・剥片・土器，及び土師器・須恵器などが採集されていた。平成４～５年度実施の高知県遺跡詳細分布調査―高岡ブロック―に伴う現地踏査の際には，新たに陶磁器など中世の遺物も採集されたことから，「北屋敷」等の地名にみられるような屋敷跡の存在も考えられることとなり，遺跡の年代，性格，範囲等，遺跡台帳の情報が整備されるに至った。

平成７年，女川遺跡の範囲内において，複数の開発事業の予定されていることが判明した。上記のとおり女川遺跡はかねてから知られている遺跡であったが，こと発掘調査は未実施のため，地中の状況については根拠となる資料をもちえなかった。そこで，来るべき開発行為に対処できるよう，遺跡の基礎データを収集するための発掘調査を高知県教育委員会と協議のうえ準備した。これは越知町教育委員会が主体となって実施する，初の埋蔵文化財発掘調査であった。調査に際しては，高知県教育委員会ならびに財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターの指導を受け，平成７年12月５日～12月21日の期間で実施した。発掘調査面積は４６㎡であった。この調査が女川遺跡の第１次の発掘調査であり，以下，本文中では「第１次調査」と表記する。

明けて平成８年１月，遺跡の範囲内における個人住宅の建設計画に直面した。越知町教育委員会は，第１次調査の結果をふまえた上で高知県教育委員会と協議し，当該計画地には縄文時代及び中世の遺跡の存在が濃厚であり，計画の実施に際しては記録保存を目的とした発掘調査が必要であると判断された。これらの経過を関係者に説明し，十分に理解していただき，全面的な協力を得ることができたことから，緊急に発掘調査（以下，「第２次調査」と表記）を実施することとなった。発掘調査は越知町教育委員会が主体となり，財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターの指導を受けた。調査期間は平成８年２月16日～２月29日，発掘調査面積は１７５㎡であった。

一方これと同じ頃，越知町建設課による，町道女川東屋敷線の建設計画が進められていた。この路線は，女川遺跡の中枢部をＬ字形に通過するものであり，事業計画地近辺に関する第１次調査の結果によれば，縄文時代及び中世の遺跡の存在が明らかであった。越知町教育委員会は高知県教育委員会と協議し，事業の実施に際しては事前の発掘調査によって記録保存を果たすことが必要との結論に至った。これに基づき，町建設課の全面的な協力を得て，平成８年３月４日～３月16日の期間，財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターの指導のもと，越知町教育委員会が発掘調査（以下，「第３次調査」と表記）を実施した。発掘調査面積は２０７㎡であった。

また，平成８年３月25日には，平成７年度の３次の調査の総括として，報道機関に調査成果の発表をおこなった。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

女川遺跡は高知県高岡郡越知町女川北屋敷ほかに所在し，仁淀川右岸の河岸段丘（中位段丘）上に立地する。[1]女川遺跡の所在する越知町は，東西に長い高知県の中西部に位置している。町域のほぼ中央を県下第２の河川である仁淀川が大きく蛇行しながら貫流しており，その流域及び支流域を中心に現集落が形成されている。河岸段丘の形成は，仁淀川と支流・桐見川の合流する越知周辺において最も顕著であり，中でも人口の集中する平野部は，町内最大の面積を有する中位段丘となっている。[2]

越知町における遺跡の分布は，仁淀川本・支流域の河岸段丘の存在に密接な関係をもっており，城郭跡を除くほとんどの遺跡は中位段丘上に立地している。分布の特徴としては，①越知周辺への各時代の遺跡の集中，②片岡周辺における中世城郭の偏在，という２点を挙げることができる。女川遺跡は，越知周辺に集まる遺跡群の一角に位置している。

越知町内において女川遺跡に関連する遺跡としては，下渡遺跡，文徳遺跡，遊行寺遺跡などを挙げることができる。下渡遺跡は女川遺跡の西方，小谷を挟んだ段丘上に位置する縄文時代遺跡で，縄文時代早期の押型文土器や石器等の資料が表面採集されている。文徳遺跡は越知町文徳に所在する縄文時代・中世の遺跡で，下渡遺跡と同様に縄文時代早期の土器・石器等が採集されている。遊行寺遺跡は越知町遊行寺に所在する縄文時代遺跡で，石器剥片等が採集されている。

また，視点を町外に転ずると，町内で合流する柳瀬川を遡れば城ノ台洞穴遺跡（高岡郡佐川町丙，縄文時代早期），国史跡・不動ケ岩屋洞窟遺跡（高岡郡佐川町西山，縄文時代草創期・早期）へと通じ，これに至るまでの流域には大田川遺跡，坂東遺跡などの縄文時代遺跡が数珠つなぎに分布する。このように越知・佐川両町周辺には，仁淀川中流域における縄文時代遺跡の１集中地帯が形成されている。

註

(1)　越知町史編纂委員会『越知町史』高知県高岡郡越知町　1984年

(2)　同註[1]

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
★	女川遺跡	縄文・弥生・中世・近世	7	文徳古墓	中世	15	西ノ芝遺跡	中・近世
1	清水遺跡	縄文・弥生・中世	8	文徳遺跡	縄文～古墳・近世	16	中町遺跡	縄文
						17	馬ヶ崎城跡	中世
			9	遊行寺遺跡	縄文・近世	18	城戸遺跡	縄文
2	本村遺跡	弥生・中世	10	柴尾遺跡	古墳・中世	19	清水城跡	中世
3	西岡遺跡	縄文・近世	11	天忠寺跡	中世	20	下渡遺跡	縄文・中世
4	ヤケ坂遺跡	弥生	12	柴尾城跡	中世	21	東光寺跡	中世
5	後山城跡	中世	13	木倉通遺跡	古墳			
6	文徳城跡	中世	14	越知遺跡	弥生			

表１　女川遺跡と周辺の遺跡一覧

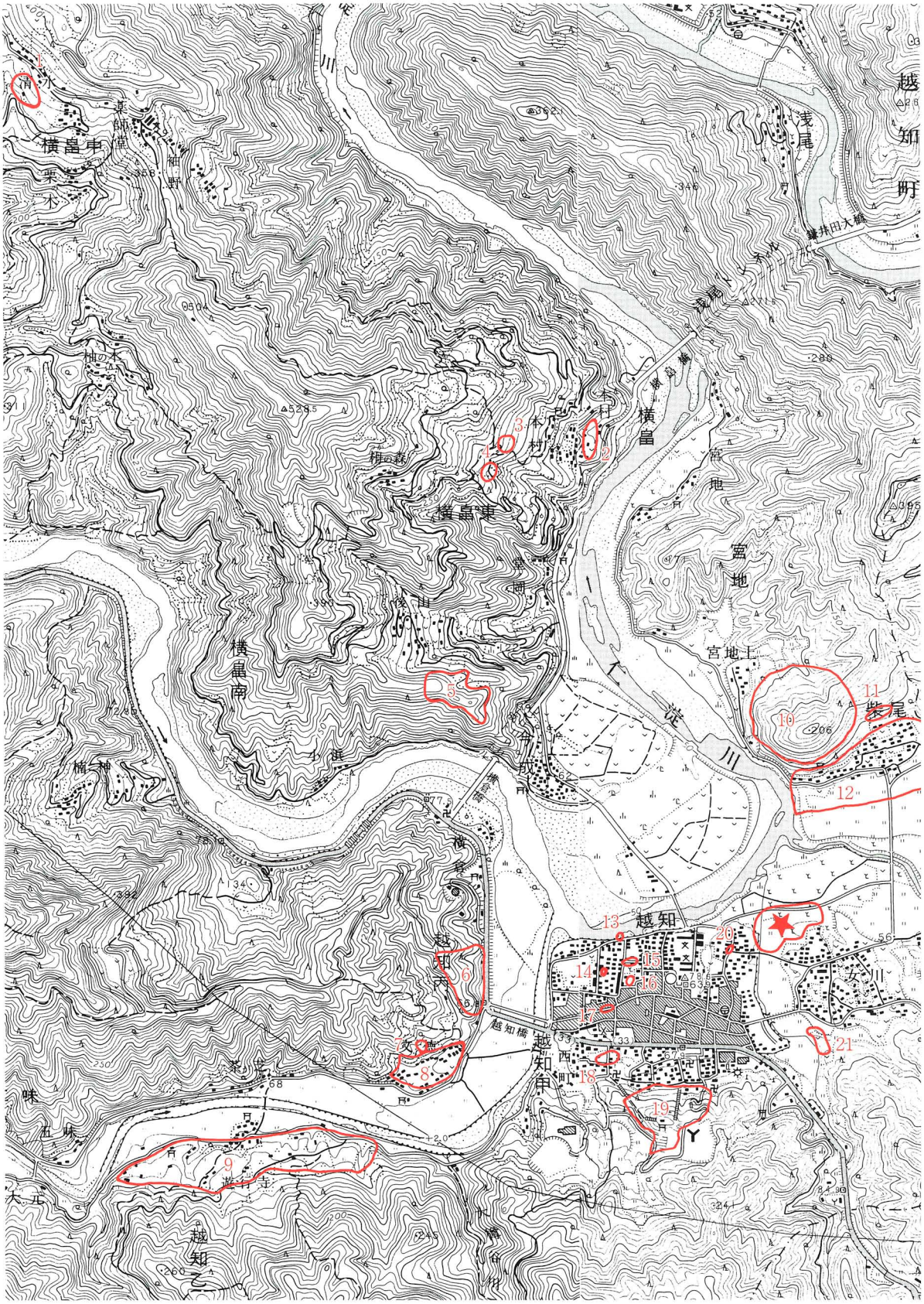


Fig. 1　女川遺跡と周辺の遺跡（S：1/25,000）

第Ⅲ章　確認調査（第１次調査）

(1)　調査の概要

従来より多くの縄文時代遺物が採集されていた女川遺跡について，遺跡の範囲・時代・性格及び遺存状態等を把握し，将来の遺跡保護に活用し得る基礎的資料を収集することを目的として，本次調査を実施した。調査期間は平成７年12月５日～12月21日，発掘調査面積は46㎡である。

(2)　調査の方法

２×２ｍの大きさを基本とする調査区（試掘坑＝ＴＰ）を11箇所配置して，調査を実施した。表土層及び無遺物層の掘り下げは主に重機（バックホー）を使用しておこない，遺物包含層・遺構の掘り下げは人力でおこなった。表土層及び遺物を含むと考えられた層の土壌（遺構埋土を含む）は一部を除いて５㎜のフルイによって選別し，微細な遺物の採集に努めた。完掘後は，遺構平面図・堆積土層断面図を作成し，あわせて写真撮影によって記録をおこなった。

なお，女川遺跡の発掘調査についてはこれが嚆矢であり，その様相は全く不明であったため，撹乱坑をも遺構然として完掘し，さらに後々の基礎資料とするべく，遺構然として図化・記録をおこなっている。第２次調査以降の面的な発掘調査の進展に伴い，第１次調査で遺構としたものの性格が順次判明することとなったが，調査時点での遺構名は変えずに使用した。第１次調査を踏まえて，第２次調査以降は撹乱坑の扱いを適宜変えていった。

(3)　調査の成果

１．各調査区の概要

ＴＰ１（Fig.４）

地山とみられる粘礫土層までの確認をおこなった。遺構は，第Ⅳ層上面でピット状遺構２基を検出した。(Fig.８・表２）遺構の年代は不明。遺物は，第Ⅰ・Ⅱ層から土師質土器，瓦器，陶磁器，瓦片，石器砕片等が出土した。

ＴＰ２（Fig.４）

ＴＰ１・第Ⅳ層に相当するとみられる粘礫土層までの確認をおこなった。遺構は，第Ⅳ層上面でピット状遺構２基（Fig.８・表２），壁面でピット状遺構２基を検出した。第Ⅳ層上面の遺構の年代は不明。壁面で確認したピット状遺構は，表土中から掘り込まれた可能性があり，撹乱坑と考えられる。遺物は，第Ⅰ層から土師質土器，青磁，陶磁器，土錘，石鏃，叩石，石器砕片等が出土し，青磁１点，土錘１点，石鏃１点，叩石１点を図示した。

ＴＰ３（Fig.４）

地山とみられる粘礫土層までの確認をおこなった。遺構は，第Ⅳ層上面でピット状遺構１基を検出した。(Fig.８・表２）遺物は，第Ⅰ層～第Ⅲ層から弥生土器，土師質土器，瓦器，備前焼，陶磁器，土錘，瓦片，不明石製品，石器砕片等，第Ⅴ層から弥生土器，土師質土器，石器砕片等

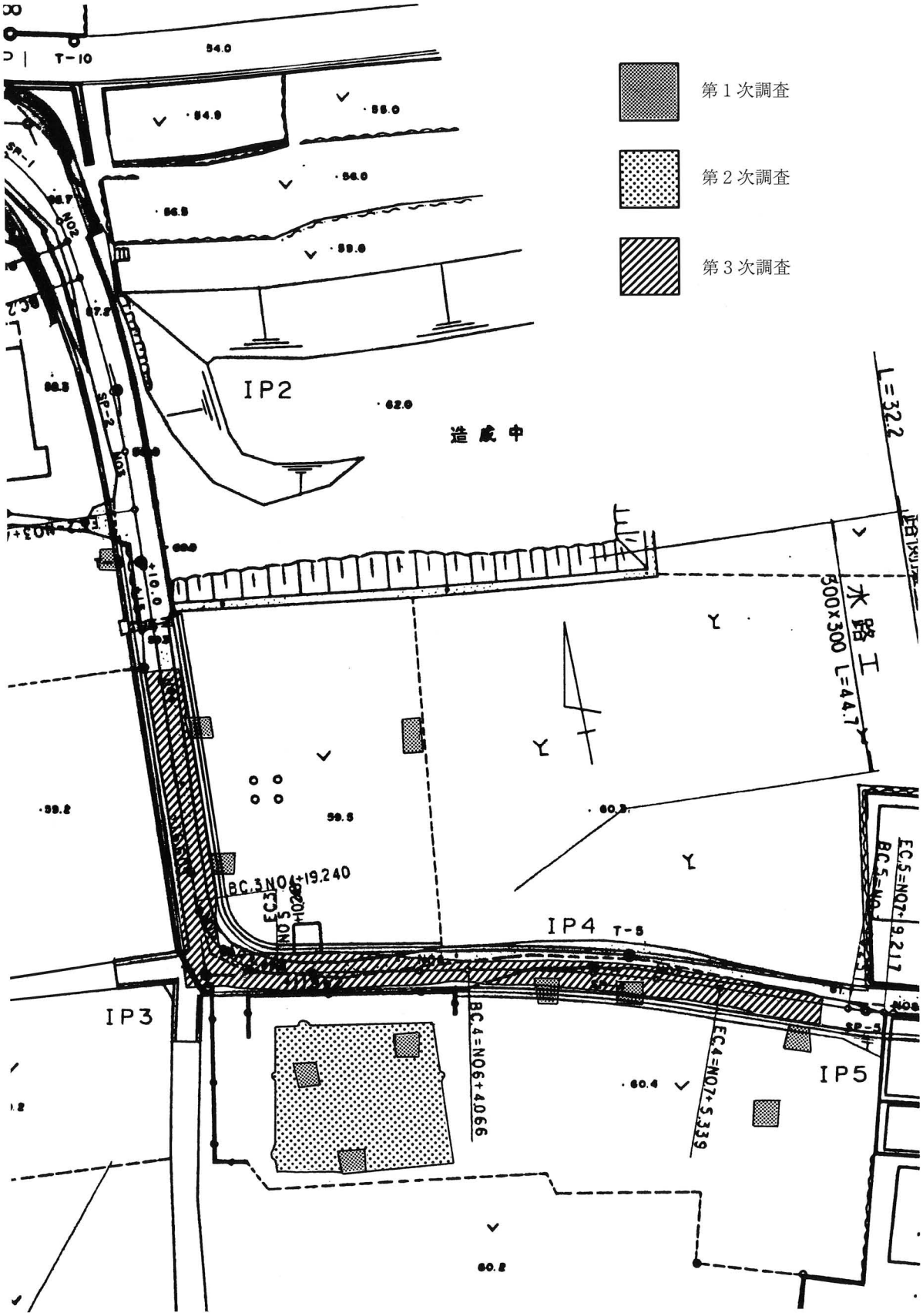


Fig. 2　第１次～第３次調査調査区配置図（S：1/500）

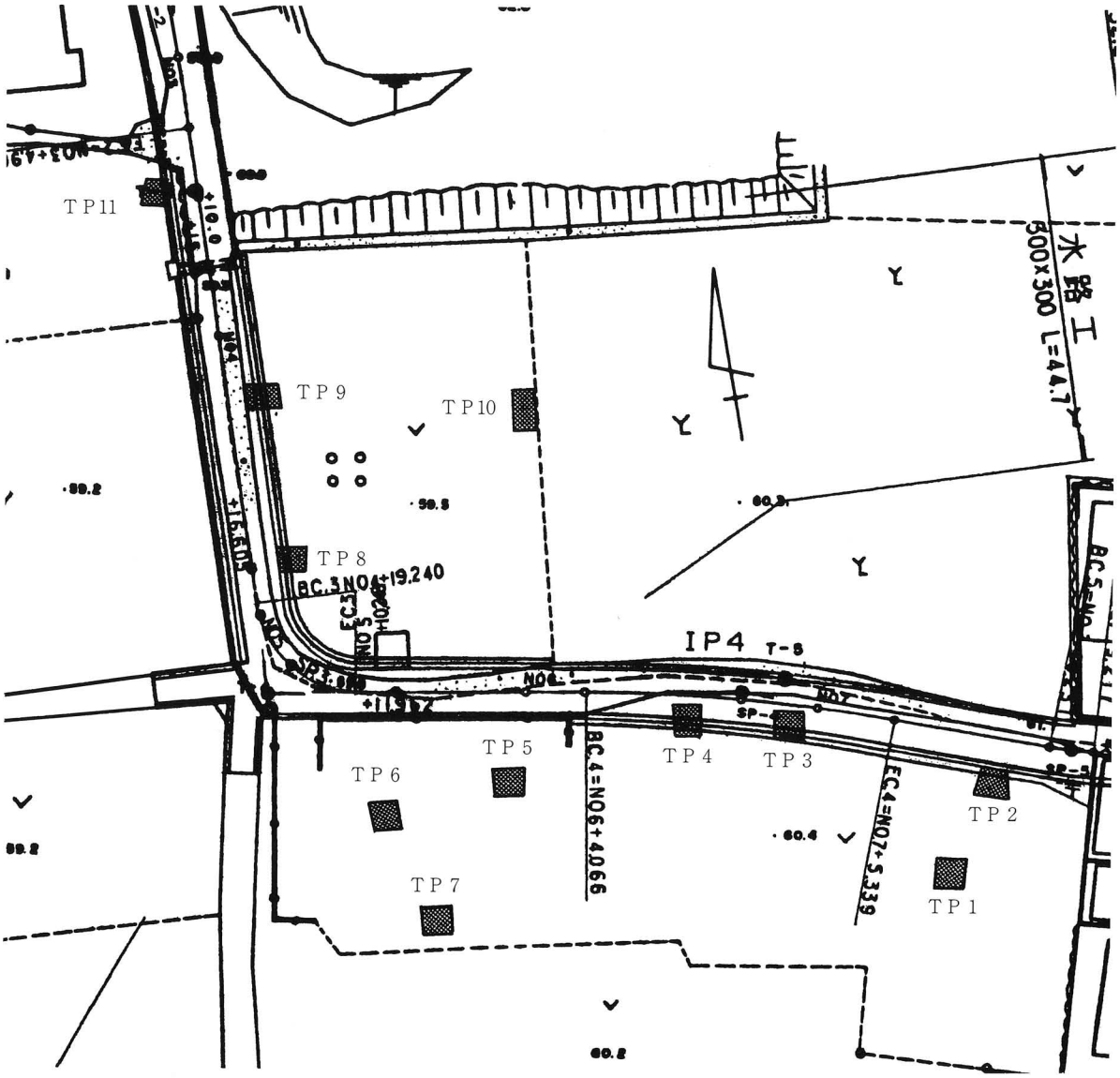


Fig. 3　第１次調査調査区配置図（Ｓ：1/500）

が出土し，土師質土器１点，陶器１点，土錘１点，不明石製品１点を図示した。第Ⅳ層上面は中世以降の遺構検出面，第Ⅴ層は中世までの遺物包含層である。

ＴＰ４（Fig. 5）

地山とみられる粘礫土層までの確認をおこなった。遺構は，第Ⅳ層上面でピット状遺構１基を検出した。(Fig. 8・表２）遺物は，第Ⅰ層・第Ⅲ層から弥生土器，土師質土器，瓦器，備前焼，陶磁器，瓦片，石鏃，剥片，砕片等が出土し，陶器１点，石鏃２点，剥片１点を図示した。ＴＰ３同様，第Ⅳ層上面は中世以降の遺構検出面である。

ＴＰ５（Fig. 5）

ＴＰ３・ＴＰ４の遺構検出面に相当するとみられる黄褐色土層上面までの確認をおこなった。ＴＰ５以降，ＴＰ４以西に位置する試掘坑は，すべて第Ⅱ層まで耕作等に伴う撹乱が及んでいる。遺構は，第Ⅲ層上面で土坑状遺構１基（ＳＫ１）を検出した。ＳＫ１は，床面に多数の小穴が穿

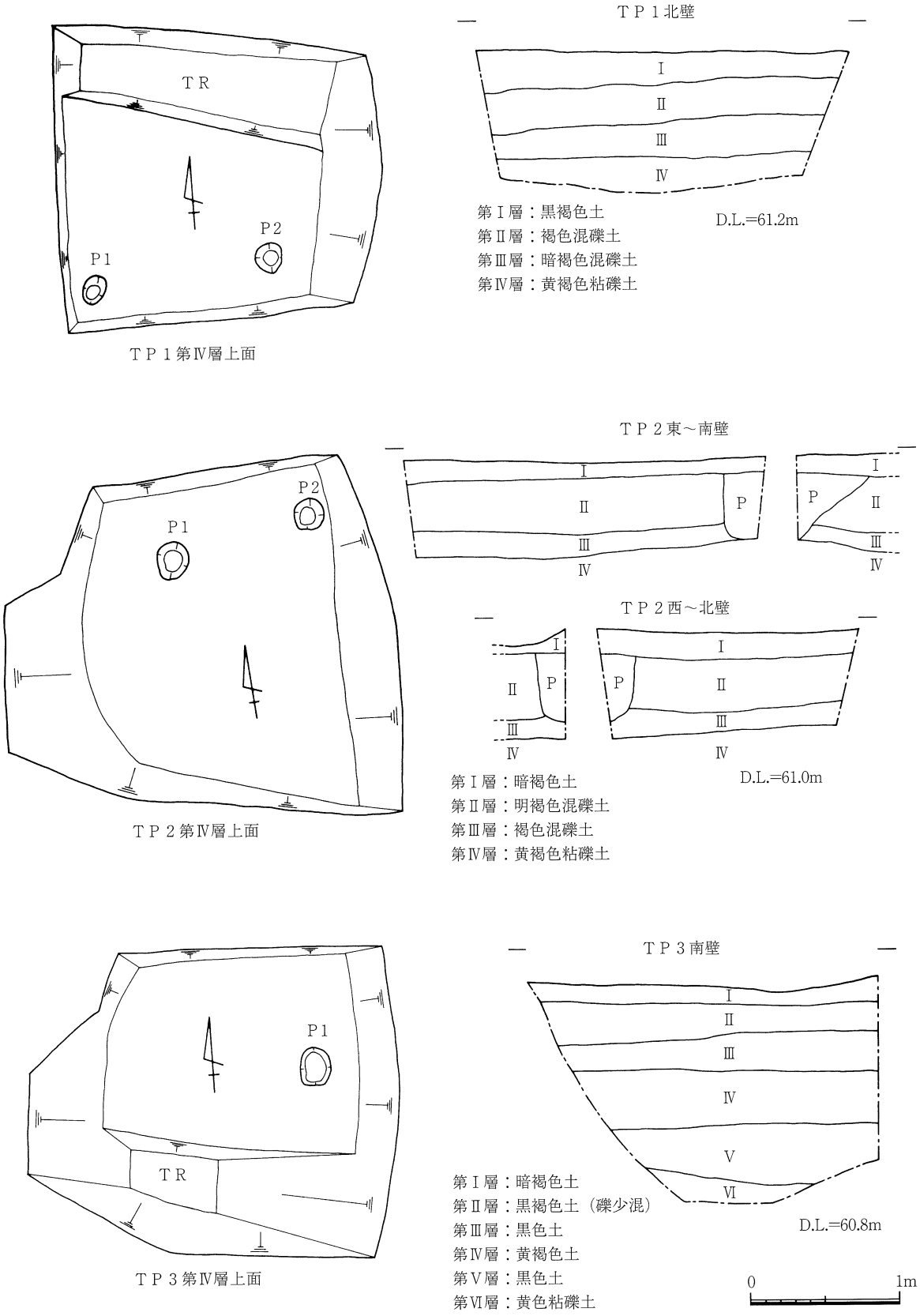


Fig. 4　ＴＰ１～ＴＰ３平面図・土層断面図（Ｓ：1/40）

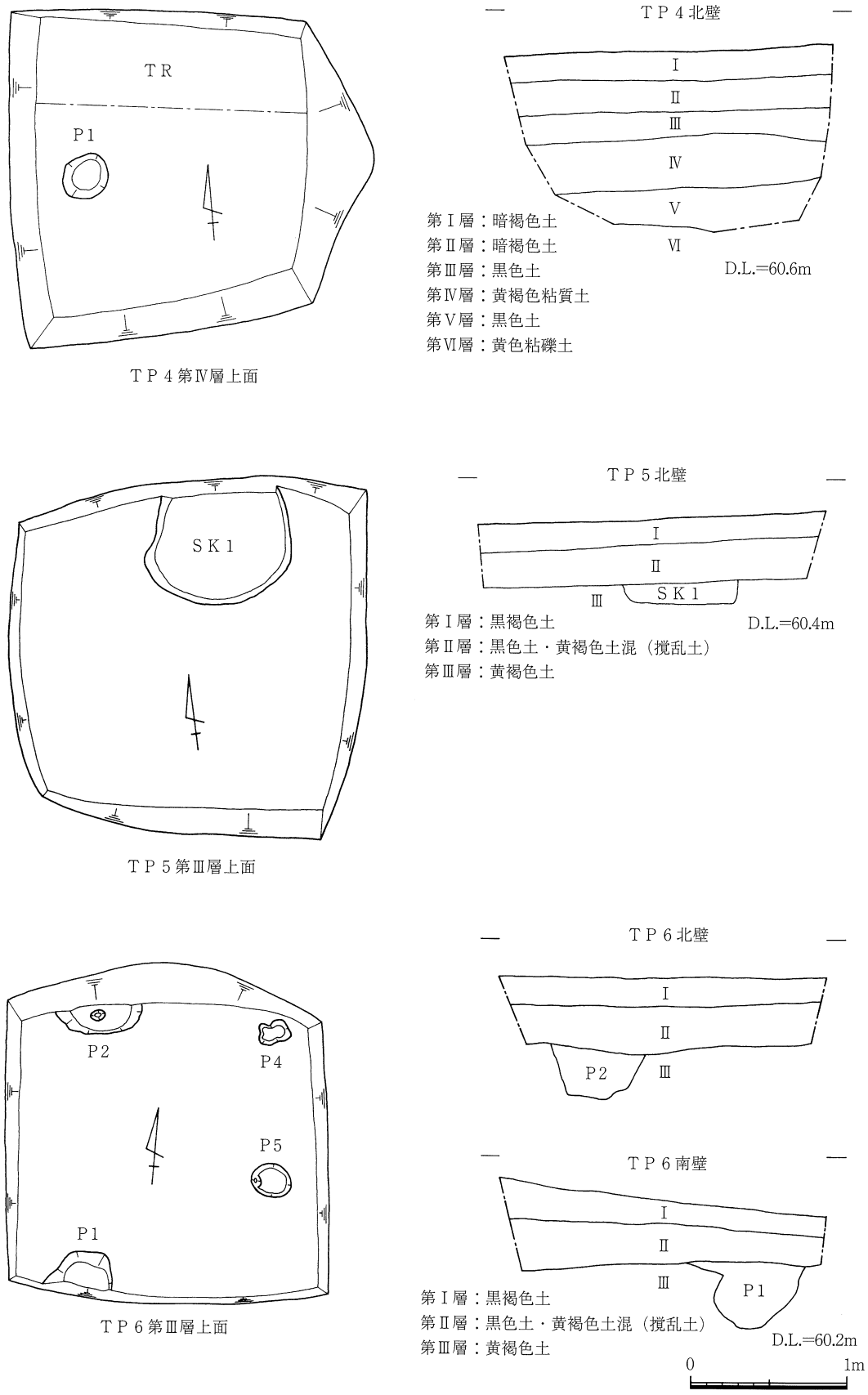


Fig. 5　TP 4～6平面図・土層断面図（S：1/40）

たれており，植物の根による撹乱坑と考えられる。遺物は，第Ⅰ層・第Ⅱ層から縄文土器，弥生土器，土師質土器，瓦器，備前焼，陶磁器，瓦片，銭貨，石器剥片，砕片等，ＳＫ１から縄文土器，弥生土器，土師質土器，石器砕片等が出土し，縄文土器１点，土師質土器１点，銭貨１点を図示した。

ＴＰ６（Fig. 5）

ＴＰ３～ＴＰ５の遺構検出面に相当するとみられる黄褐色土層上面までの確認をおこなった。第Ⅱ層まで耕作等に伴う撹乱が及んでいる。遺構は，第Ⅲ層上面でピット状遺構４基を検出し，２基を図示した。(Fig. 8・表２）Ｐ１・Ｐ４・Ｐ５の年代は不明。Ｐ２は近世以降の所産である。遺物は，第Ⅰ層・第Ⅱ層から土師質土器，瓦器，陶磁器，瓦片，石鏃，剥片，砕片等が出土し，磁器１点，石鏃１点を図示した。

ＴＰ７（Fig. 6）

ＴＰ３～ＴＰ６の遺構検出面に相当するとみられる黄褐色土層上面までの確認をおこなった。第Ⅱ層まで耕作等に伴う撹乱が及んでいる。遺構は，第Ⅲ層上面でピット状遺構４基を検出した。(Fig. 8・表２）遺構は中世以降の所産である。第Ⅲ層上面には溝状の撹乱坑が穿たれている。遺物は，第Ⅰ層・第Ⅱ層から土師質土器，瓦器，陶磁器，土錘，瓦片，石鏃，剥片，砕片等が出土し，磁器２点，土錘１点，石鏃１点を図示した。

ＴＰ８（Fig. 6）

ＴＰ３～ＴＰ７の遺構検出面に相当するとみられる黄褐色土層上面までの確認をおこなった。第Ⅱ層まで耕作等に伴う撹乱が及んでいる。遺構は，第Ⅲ層上面で溝状遺構３条を検出した。これは後の調査によって，この周囲一帯に穿たれた筋状の撹乱坑と判明した。遺物は，第Ⅰ層から弥生土器，土師質土器，瓦器，青磁，陶磁器，土錘，瓦片，２次加工ある剥片，砕片等が出土し，土師質土器１点，青磁１点，２次加工ある剥片１点を図示した。

ＴＰ９（Fig. 6）

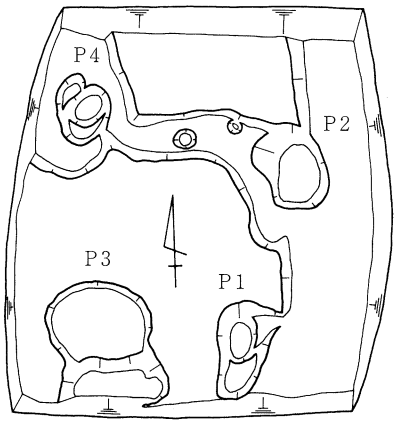
ＴＰ３～ＴＰ８の遺構検出面に相当するとみられる黄褐色土層上面までの確認をおこなった。第Ⅱ層まで耕作等に伴う撹乱が及んでいる。遺構は，第Ⅲ層上面でピット状遺構４基を検出し，１基を図示した。(Fig. 8・表２）遺物は，第Ⅰ層・第Ⅱ層から弥生土器，土師質土器，瓦器，備前焼，陶磁器，瓦片，石器剥片，砕片等が出土した。ピット状遺構４基の中で，Ｐ２のみは埋土が異なり，中世以前（縄文時代？）の所産の可能性がある。他の３基は中世以降の所産と考えられる。

ＴＰ10（Fig. 7）

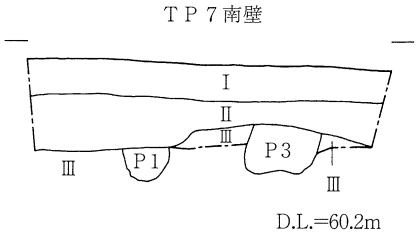
ＴＰ３～ＴＰ９の遺構検出面に相当するとみられる黄褐色土層上面までの確認をおこなった。第Ⅱ層まで耕作等に伴う撹乱が及んでいる。

遺構は，第Ⅲ層上面で土坑状遺構１基（ＳＫ１）を検出した。(Fig. 9）

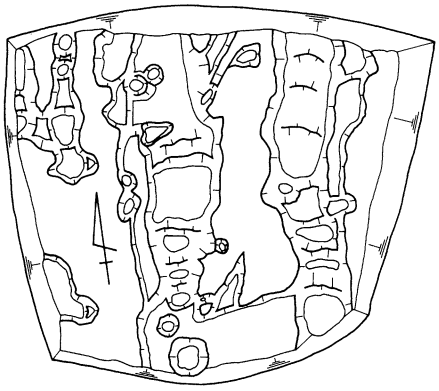
遺物は，第Ⅰ層・第Ⅱ層から縄文土器，弥生土器，須恵器，瓦器，備前焼，青磁，陶磁器，瓦片，石鏃，石錐，尖頭器？，スクレーパ，２次加工ある剥片，石錘？，台石，砕片，鉛玉？等，



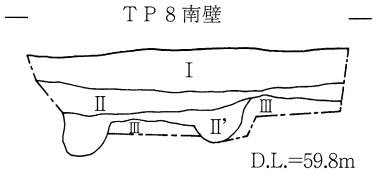
ＴＰ７第Ⅲ層上面



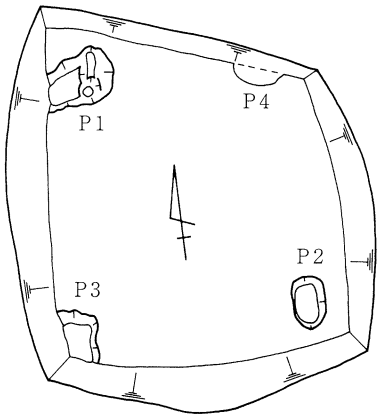
第Ⅰ層：黒褐色土
第Ⅱ層：暗褐色土・黄褐色土混（撹乱土）
第Ⅲ層：黄褐色土



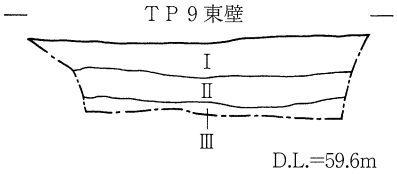
ＴＰ８第Ⅲ層上面



第Ⅰ層：黒褐色土
第Ⅱ層：暗褐色土・黄褐色土混（撹乱土）
第Ⅱ'層：暗褐色土・黄褐色土混（撹乱土）
第Ⅲ層：黄褐色土



ＴＰ９第Ⅲ層上面



第Ⅰ層：黒褐色土
第Ⅱ層：暗褐色土・黄褐色土混（撹乱土）
第Ⅲ層：黄褐色土

Fig. 6　ＴＰ７～９平面図・土層断面図（Ｓ：1/40）

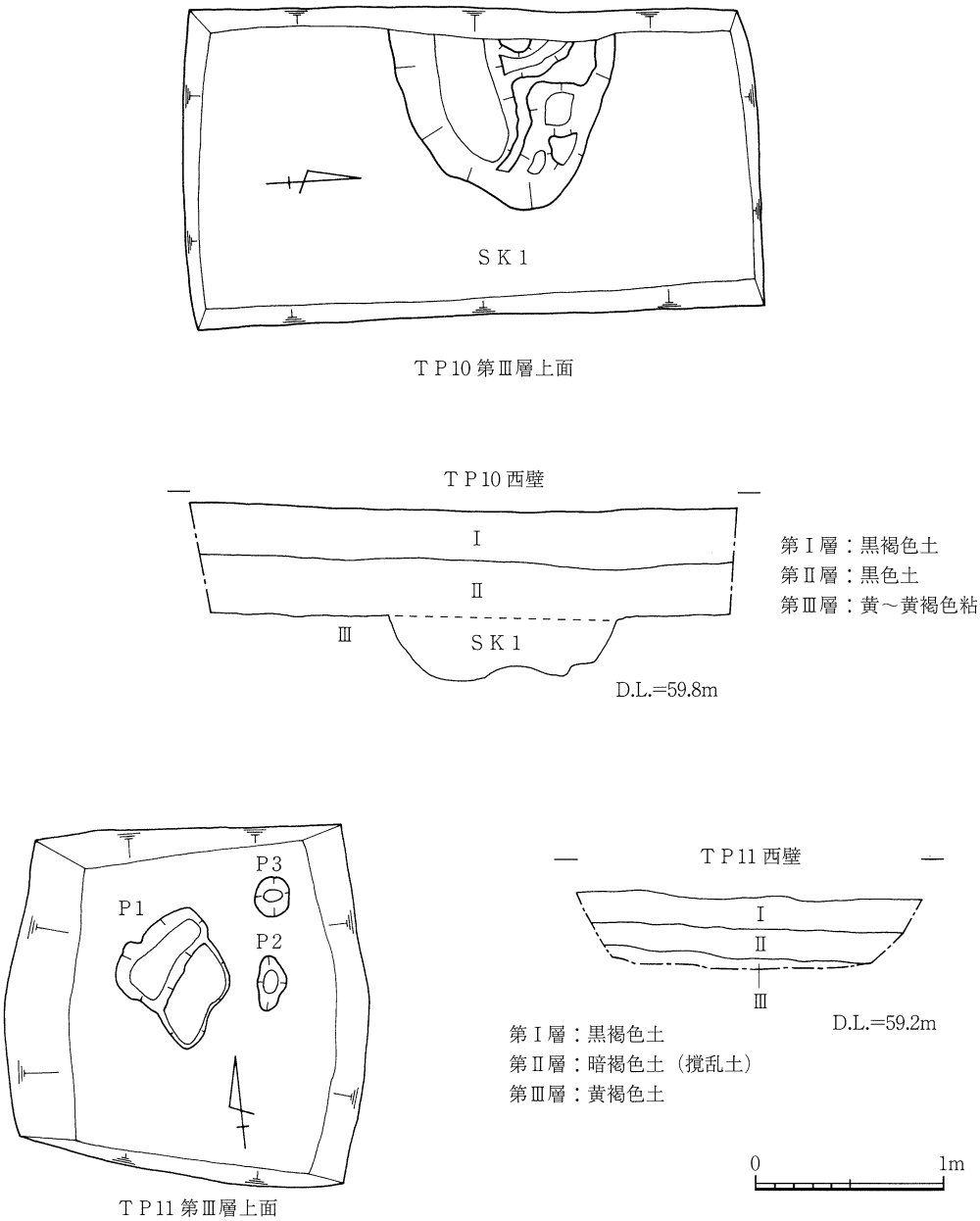


Fig. 7　ＴＰ10・11平面図・土層断面図（Ｓ：1/40）

ＳＫ１から縄文土器，弥生土器，石鏃，尖頭器？，スクレーパ，２次加工ある剥片，石核，石錘，叩石，ガラス製品，が出土し，縄文土器24点，弥生土器３点，瓦器１点，石鏃17点，尖頭器？１点，石錐１点，スクレーパ３点，２次加工ある剥片３点，石錘？１点，凹石１点，鉛玉？１点を図示した。

第Ⅰ層・第Ⅱ層にはきわめて多くの縄文時代・弥生時代遺物が含まれるが，一方で瓦片等も混じっており，ＴＰ３～ＴＰ９と同様に撹乱を免れていない。しかし，縄文時代・弥生時代遺物の出土点数は，他の試掘坑に比べて圧倒的に多いことから，この周囲に両時代の遺跡の分布することが推察される。

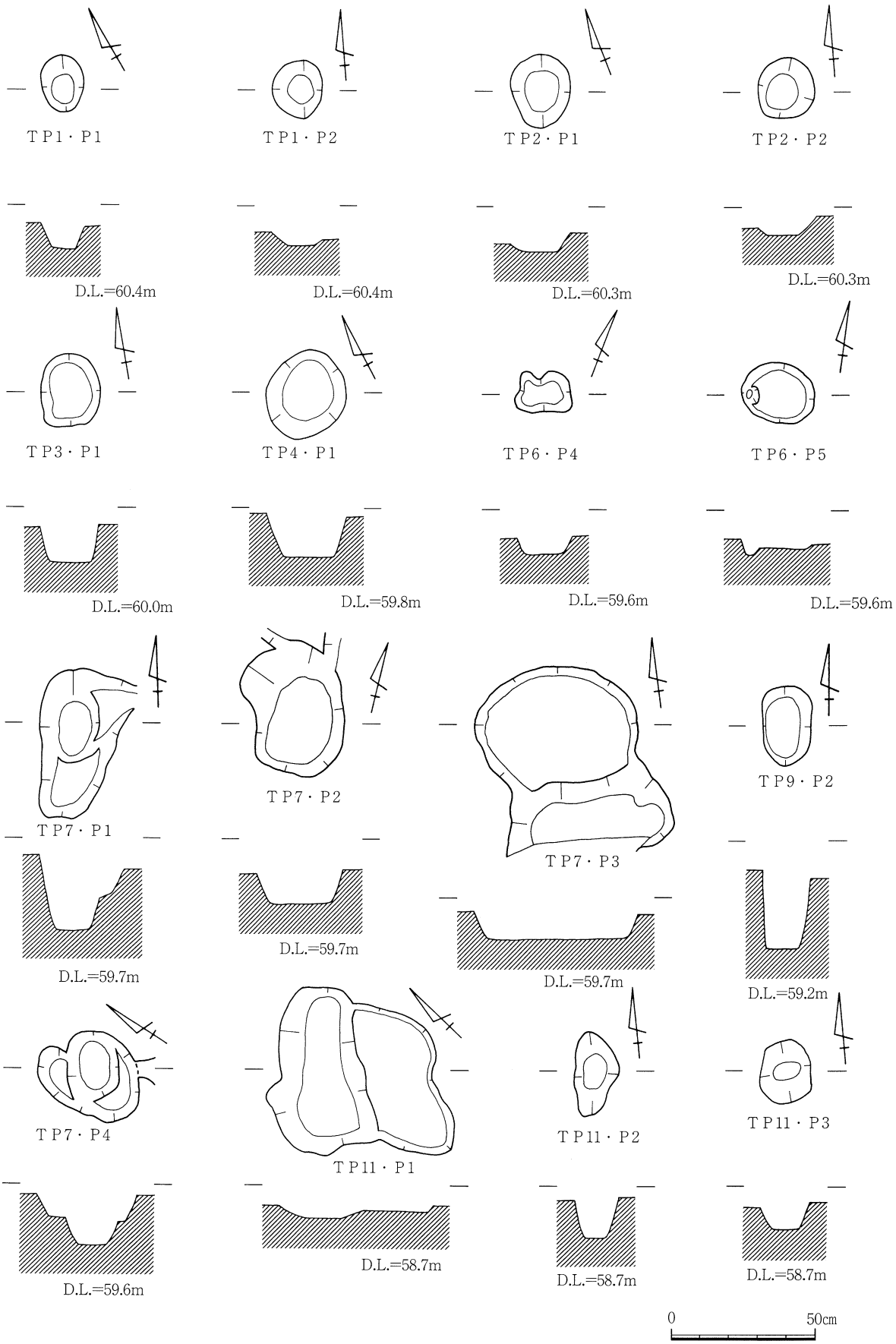


Fig. 8　第１次調査検出遺構（S：1/20）

遺構名	平面形	長径×短径(m)	深さ(m)	出土遺物	年代
ＴＰ１－Ｐ１	楕円形	0.19 × 0.15	0.095	—	—
ＴＰ１－Ｐ２	不整円形	0.20 × 0.17	0.067	—	—
ＴＰ２－Ｐ１	不整円形	0.26 × 0.21	0.066	—	—
ＴＰ２－Ｐ２	不整円形	0.21 × 0.20	0.061	—	—
ＴＰ３－Ｐ１	不整楕円形	0.25 × 0.20	0.130	土師質土器	中世～
ＴＰ４－Ｐ１	楕円形	0.31 × 0.28	0.157	土師質土器	中世～？
ＴＰ６－Ｐ４	不整形	0.20 × 0.14	0.063	—	—
ＴＰ６－Ｐ５	楕円形	0.25 × 0.21	0.028	—	—
ＴＰ７－Ｐ１	楕円形	0.51 × 0.28	0.263	土師質土器，瓦器，砕片	中世～
ＴＰ７－Ｐ２	不整楕円形	0.48 × 0.31	0.290	土師質土器，砕片	中世～
ＴＰ７－Ｐ３	不整形	不明 × 0.57	0.183	土師質土器	中世～
ＴＰ７－Ｐ４	不整形	0.34 × 0.32	0.170	土師質土器，砕片	中世～
ＴＰ９－Ｐ２	不整楕円形	0.28 × 0.16	0.278	土器細片	？
ＴＰ11－Ｐ１	不整形	0.64 × 0.58	0.046	土師質土器	中世～
ＴＰ11－Ｐ２	不整楕円形	0.29 × 0.16	0.149	土師質土器	中世～
ＴＰ11－Ｐ３	不整楕円形	0.22 × 0.17	0.102	—	—

表２　第１次調査ピット状遺構計測表

ＴＰ11（Fig. 7）

ＴＰ３～ＴＰ10の遺構検出面に相当するとみられる黄褐色土層上面までの確認をおこなった。ＴＰ３～ＴＰ10とはやや異なった様相を呈するが，第Ⅱ層まで耕作等に伴う撹乱が及んでいる。黄褐色土層上面までの深度はひときわ浅く，遺構検出面の削平は著しい。遺構は，第Ⅲ層上面でピット状遺構３基を検出した。(Fig. 8・表２）遺構は中世以降の所産である。遺物は，第Ⅰ層・第Ⅱ層から土師質土器，瓦器，陶磁器，瓦片，２次加工ある剥片，叩石？，砕片等が出土し，２次加工ある剥片１点，剥片？１点，叩石？１点を図示した。

２．遺構

検出遺構のうち，ピット状遺構（Ｐ）16基，土坑状遺構（ＳＫ）１基を図示した。

(1)　ピット状遺構（Fig. 8・表２）

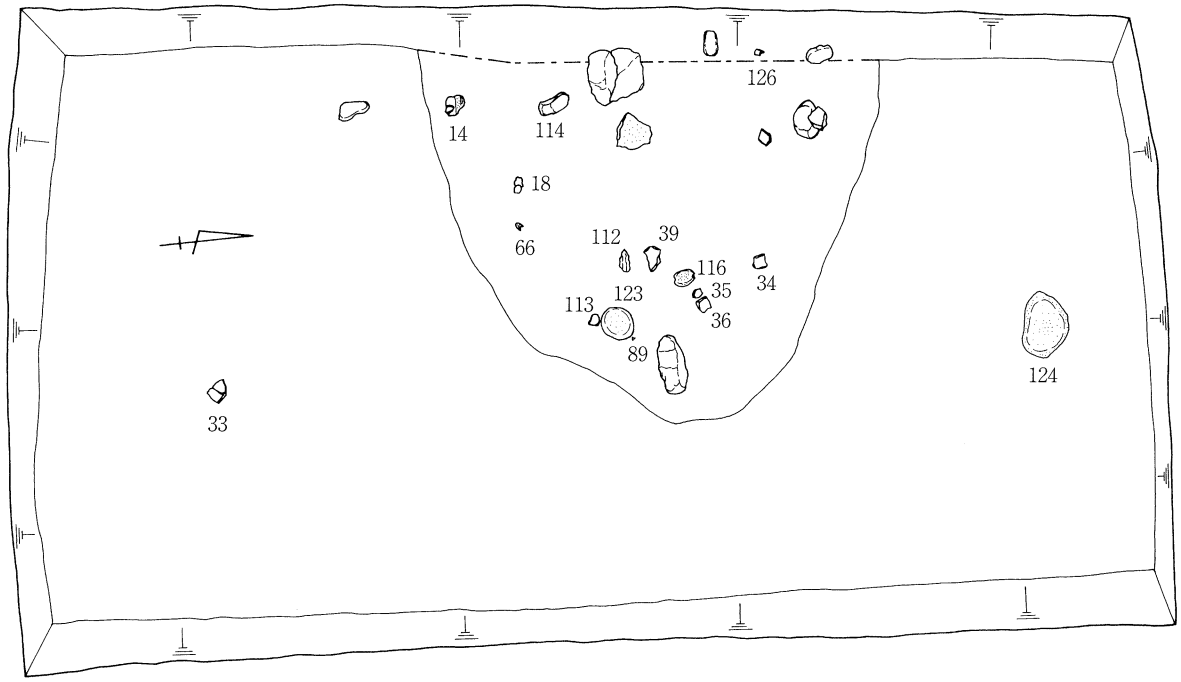
ピット状遺構16基の計測値，出土遺物等については，表２にまとめた。

(2)　土坑状遺構

ＴＰ10―ＳＫ１（Fig. 7・9）

ＴＰ10の西壁際で，全体の約２分の１を検出した。平面形は楕円形？で，長径不明，短径1.23m，検出面からの深さは35cmである。埋土は暗褐色土である。

遺物は，縄文土器，弥生土器，石鏃，尖頭器？，スクレーパ，２次加工ある剥片，砕片，石核，石錘，叩石，半円筒状ガラス製品が出土しており，縄文土器９点，弥生土器５点，石鏃６点，尖



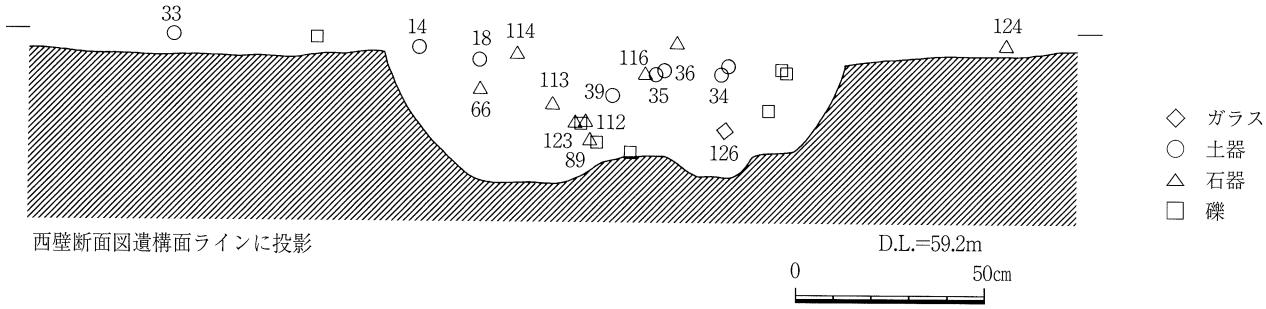


Fig. 9　ＴＰ10遺物出土状態平面図・同鉛直分布図（Ｓ：1/20）

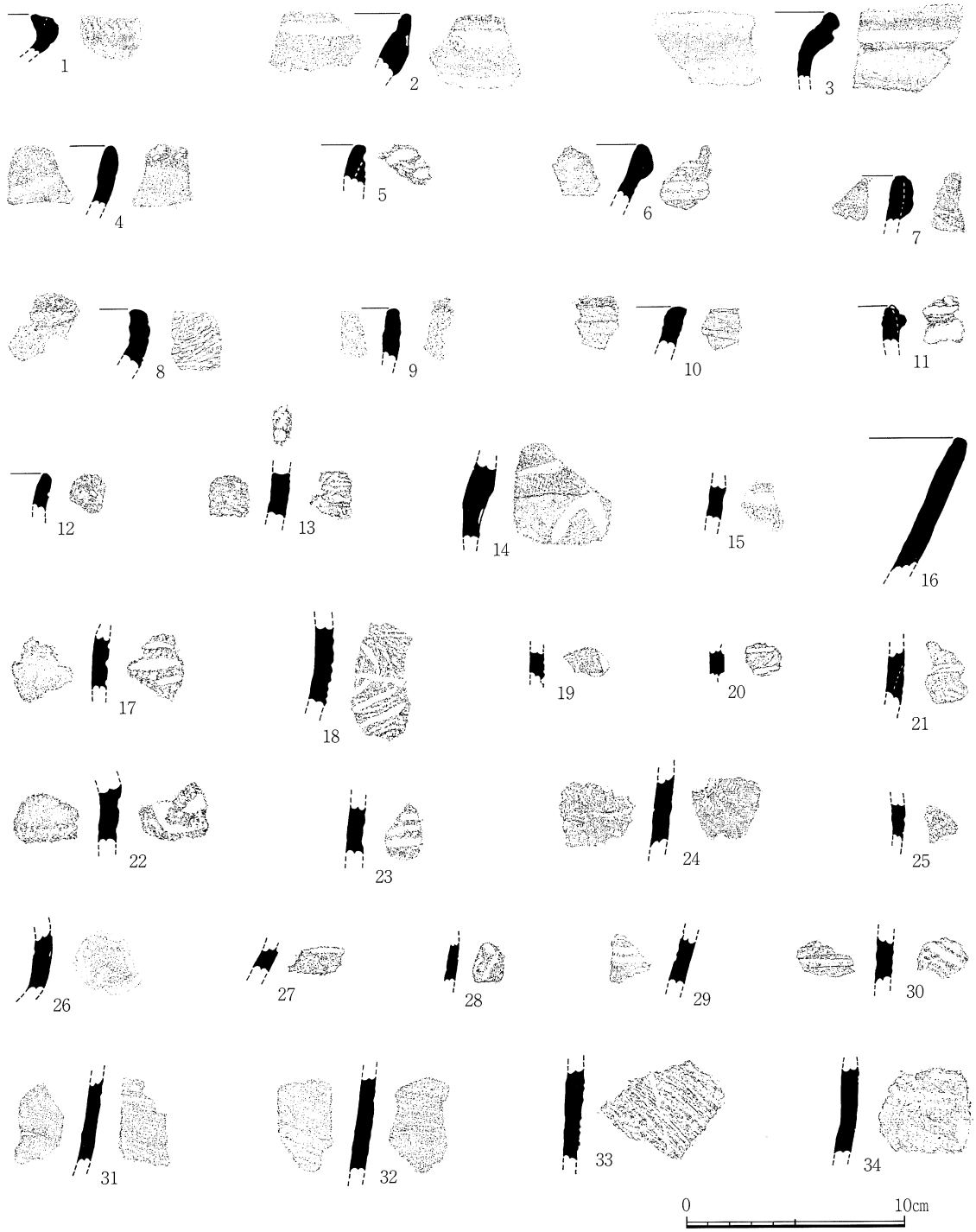


Fig.10　第１次調査出土遺物１（縄文土器）

頭器？１点，スクレーパ１点，２次加工ある剥片５点，石核３点，石錘２点，叩石１点，半円筒状ガラス製品１点を図示した。

出土土器から，ＴＰ10―ＳＫ１は弥生時代前期末の所産と考えられる。遺構からは縄文後期土器も出土しているが，これは遺構の年代を示すものではなく，弥生前期の旧地表面付近にあったものが，遺構の埋没の際に流入したものと考えられる。したがって，両時代の旧地表面はきわめ

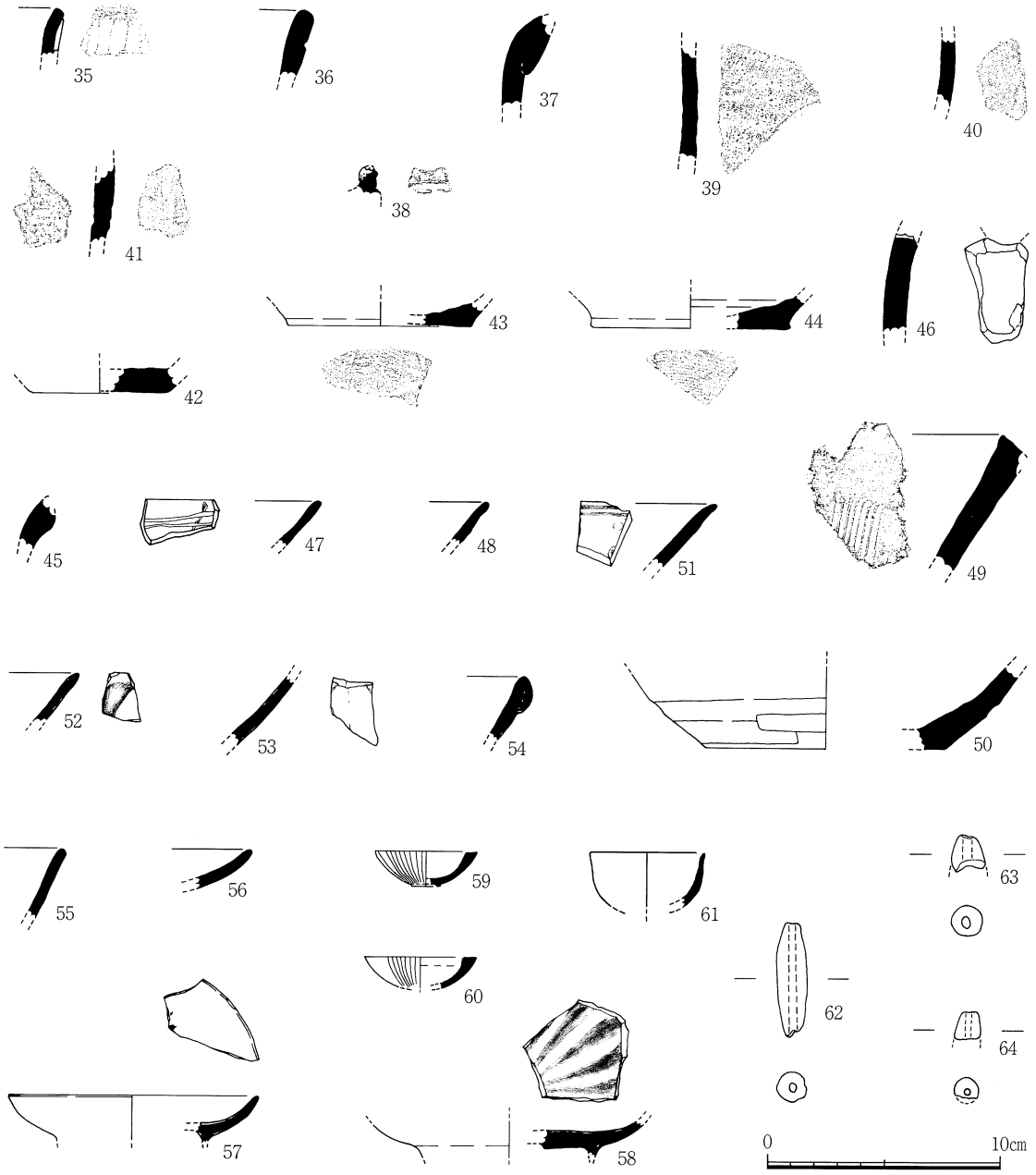


Fig.11　第１次調査出土遺物２（土器・陶磁器・土製品）

て近接した位置関係にあったものと理解される。また，同遺構からは多数の剥片石器とその未製品，ならびに素材となった剥片・石核類と多量の微細な砕片が出土しており，同遺構は石器製作に関わる遺構と考えられる。剥片石器の石材はチャート，サヌカイト，凝灰質頁岩（酸性凝灰岩）?等であり，このうち剥片・石核類から製品までのセット関係が明瞭で，量的にも支配的なのは凝灰質頁岩（酸性凝灰岩）で，赤色のチャートがこれに次いでいる。凝灰質頁岩（酸性凝灰岩）を素材として，主に製作されたものは大型の石鏃であり，これは弥生前期土器に伴う蓋然性が高い。赤色チャートも同様である。赤色以外のチャートとサヌカイトは，縄文後期・弥生前期の２時期に共通の石器石材とみられ，土器と同様の経過で混入したものも含まれると考えられる。

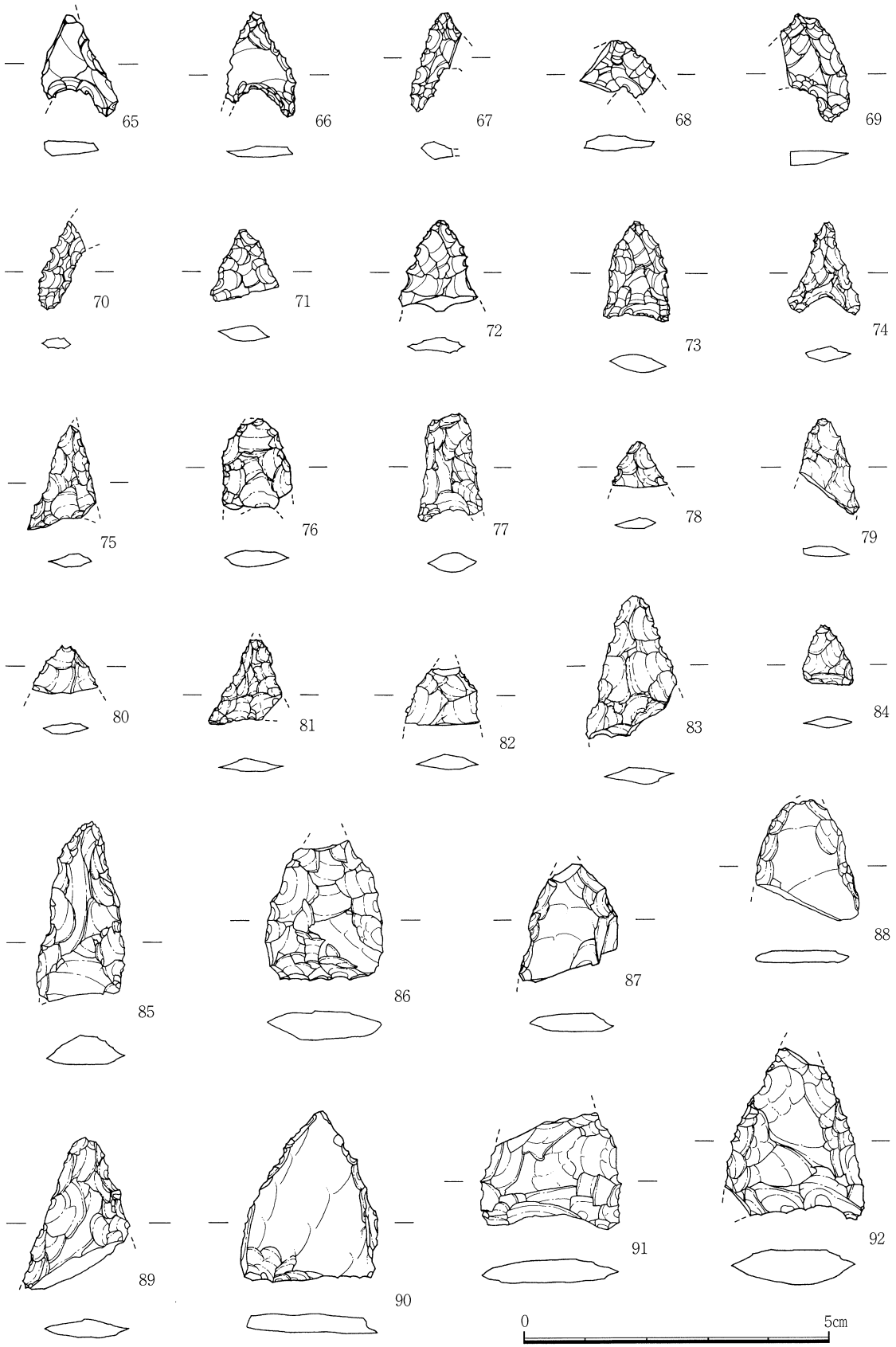


Fig.12　第１次調査出土遺物３（石器）

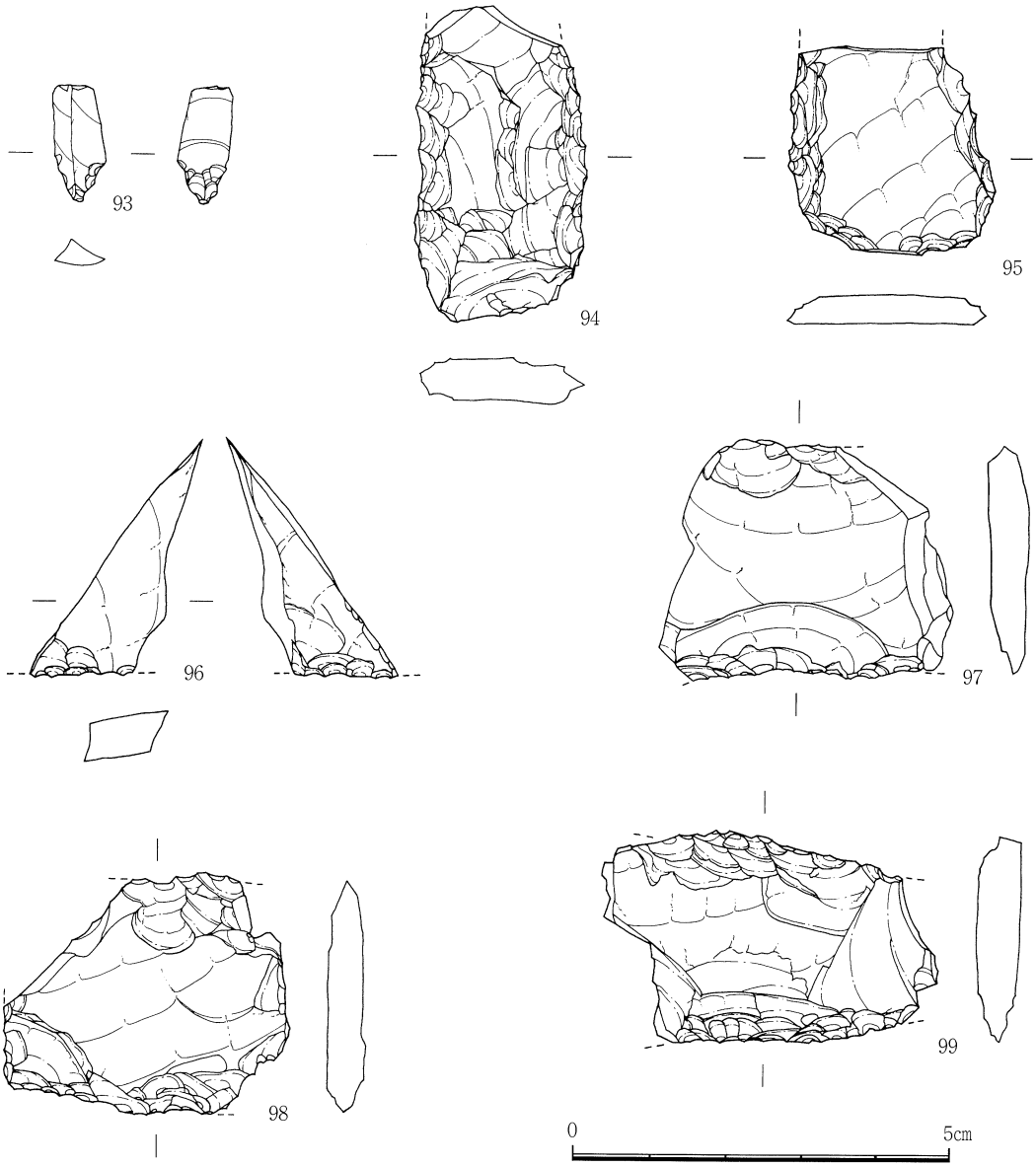


Fig.13　第１次調査出土遺物４（石器）

３．遺物

(1)　土器・陶磁器・土製品（Fig. 10・11）

縄文土器，弥生土器，土師質土器，瓦器，備前焼，青磁，白磁，陶器，磁器，土錘，合計64点を図示した。

１～34は縄文土器で，１～16が口縁部片，17～34が胴部片である。１は硬質の原体による縄文が施文されており，船元式土器か。２～５・14・15・22は平城式土器である。30は弥生土器の可能性がある。

35～42は弥生土器である。41以外は弥生前期のものと考えられる。41は弥生中期以降の可能性があり，唯一ＴＰ10―ＳＫ１に混入したものとみられる。43～46は土師質土器である。45は鍋？，

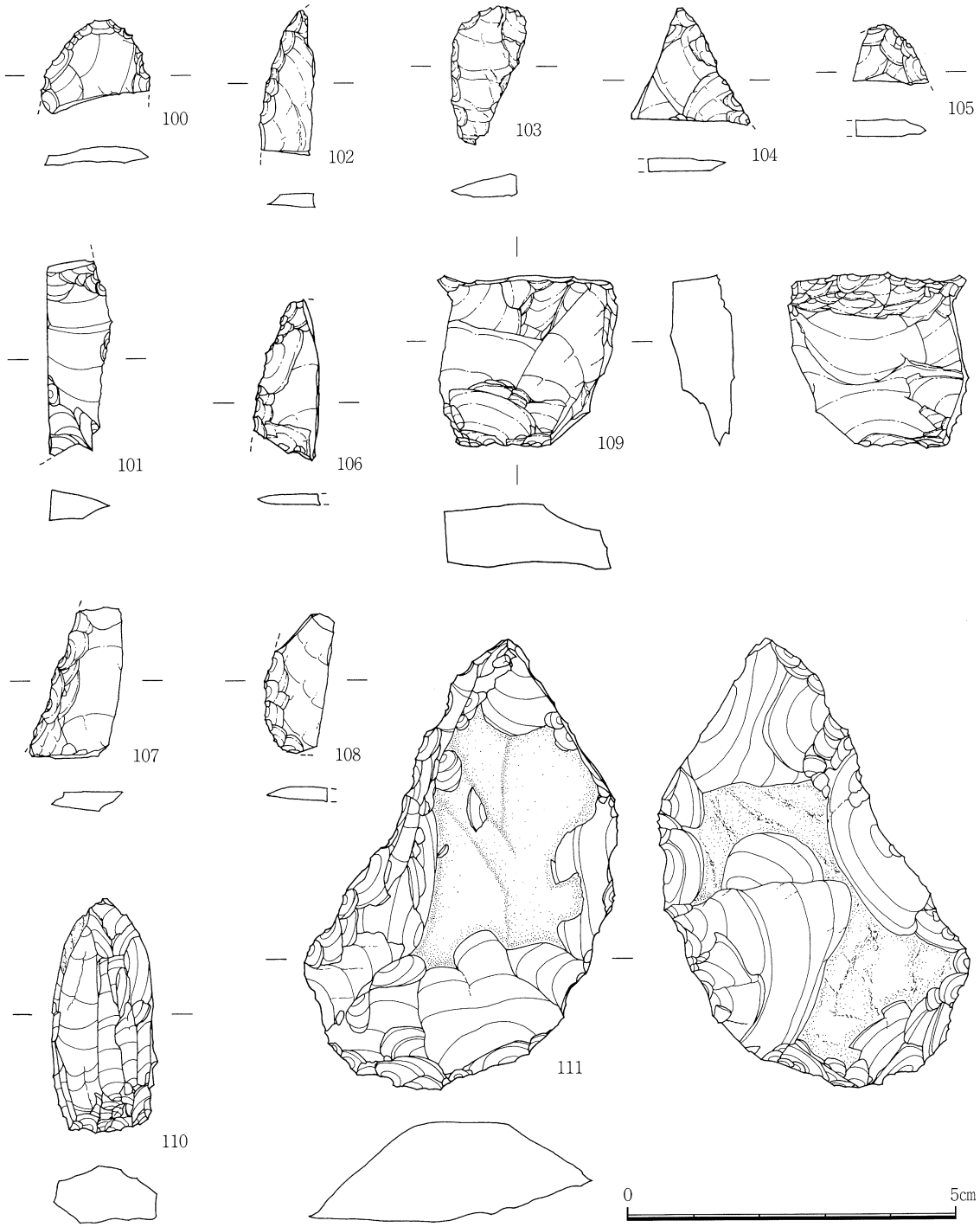


Fig.14　第１次調査出土遺物５（石器）

46は火鉢で，ともに近世の所産と考えられる。47・48は和泉型の瓦器・椀で，13世紀前半頃のものと考えられる。(2)49・50は備前焼で，50は須恵器の可能性がある。51～53は青磁・碗で，51は龍泉窯系Ⅰ類―２もしくは４，52・53は龍泉窯系Ⅰ類―５に分類される。(3)54は白磁・碗で，玉縁状の口縁部を有し白磁Ⅳ類に分類される。(4)55・56は陶器である。57～61は磁器で，59・60は肥前の紅皿である。(5)62～64は土錘である。

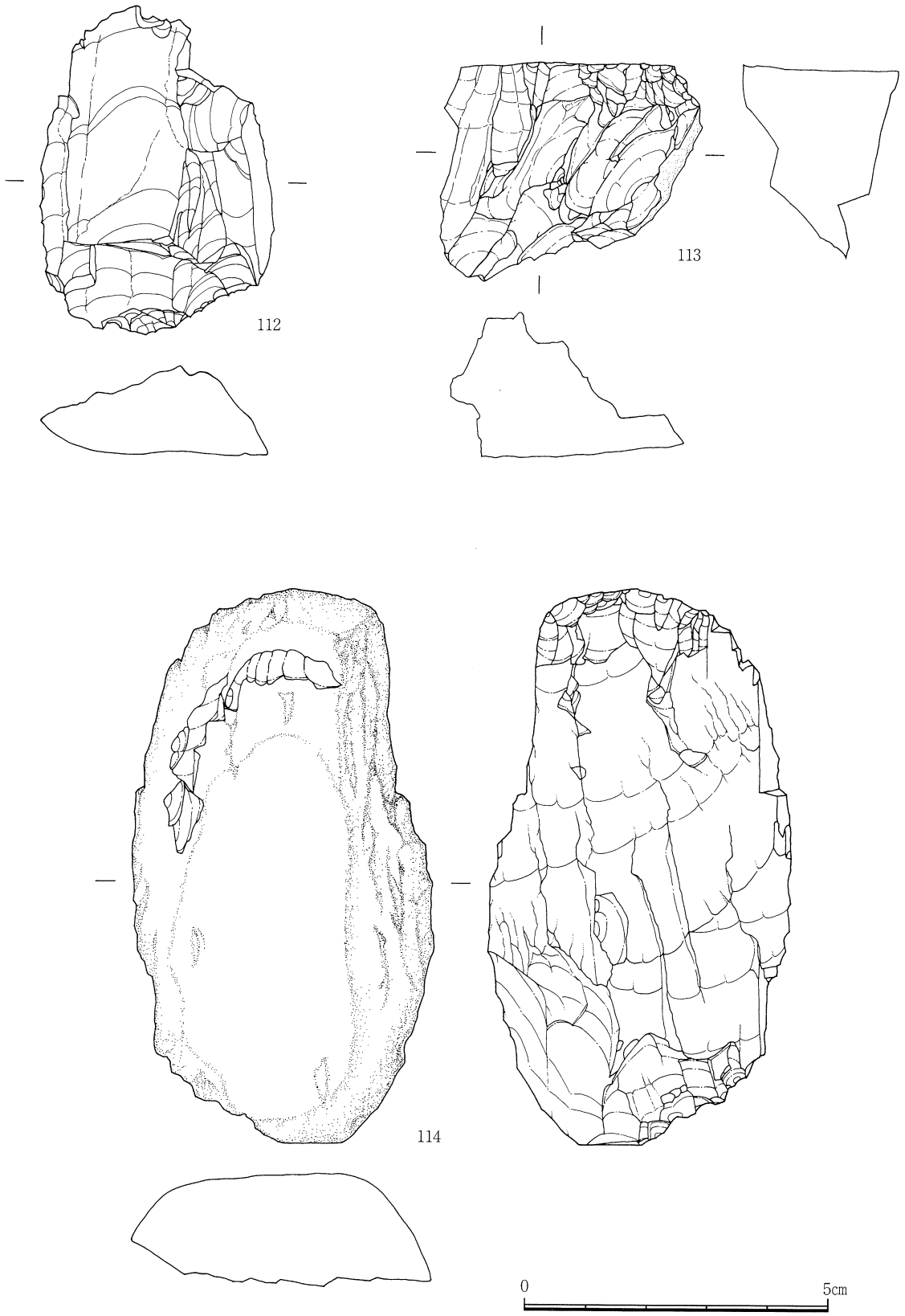


Fig.15　第１次調査出土遺物６（石器）

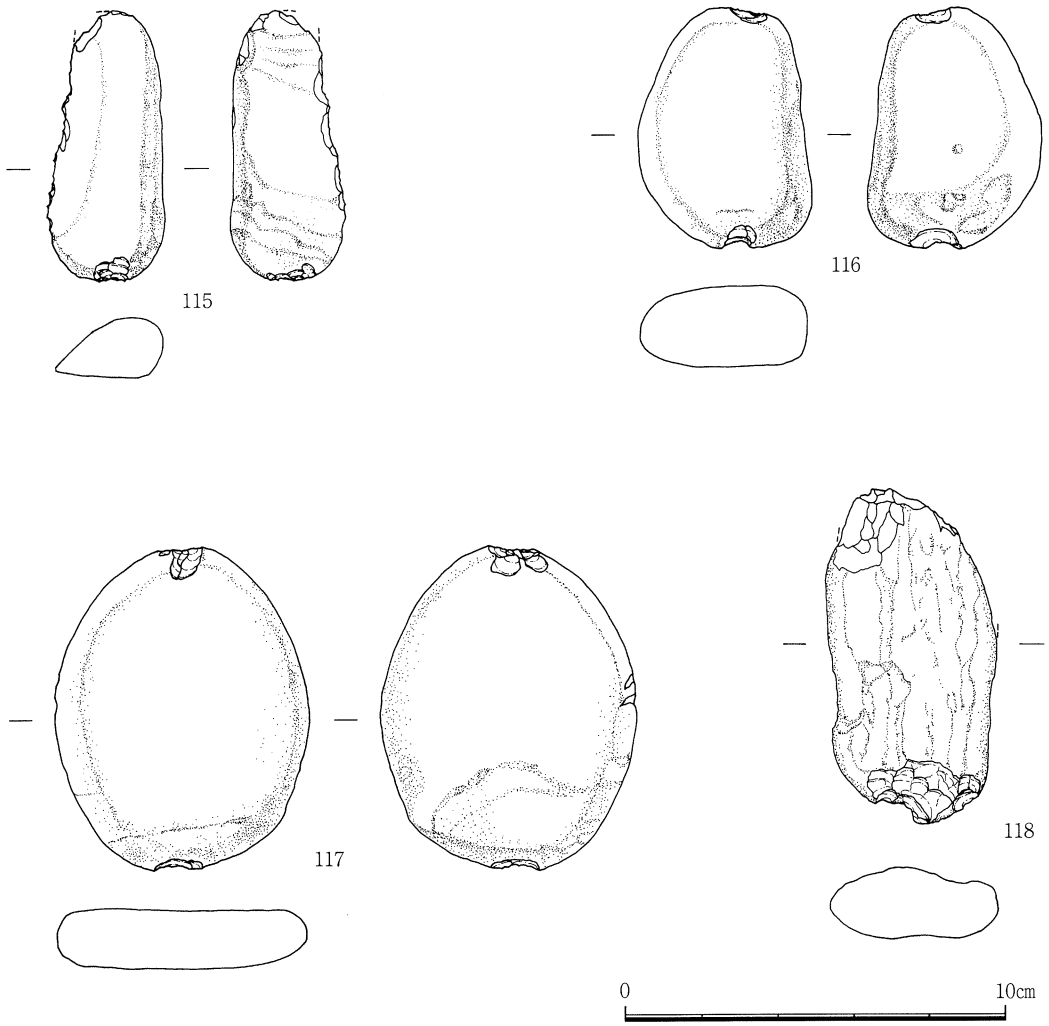


Fig.16　第１次調査出土遺物７（石器）

(2)　石器・石製品（Fig. 12～19）

石鏃，石錐，尖頭器？，スクレーパ，２次加工ある剥片，剥片，石核，石錘，叩石，磨石，台石，不明石製品，合計61点を図示した。

65～92は石鏃である。65は未製品である。65～69・71～73はチャート製，70は珪質頁岩？製，74～83はサヌカイト製，84～92は凝灰質頁岩（酸性凝灰岩）製である。

93は石錐で，赤色チャート製である。94・95は尖頭器？で，凝灰質頁岩（酸性凝灰岩）製である。96～99はスクレーパである。96はサヌカイト製で，石庖丁片か。97～99は凝灰質頁岩（酸性凝灰岩）製で，99は尖頭器の可能性がある。

100～109は２次加工ある剥片である。100・101はチャート製，102・103はサヌカイト製，104～109は凝灰質頁岩（酸性凝灰岩）製である。100・102・106・108は石鏃未製品とみられる。104・105・107は石鏃片か。109は石核の可能性がある。110はチャート製の剥片で，未製品の可能性がある。111はチャート製の剥片もしくは石核である。112～114は石核で，いずれも礫皮面を有す。112は赤色チャート製，113・114は凝灰質頁岩（酸性凝灰岩）製である。

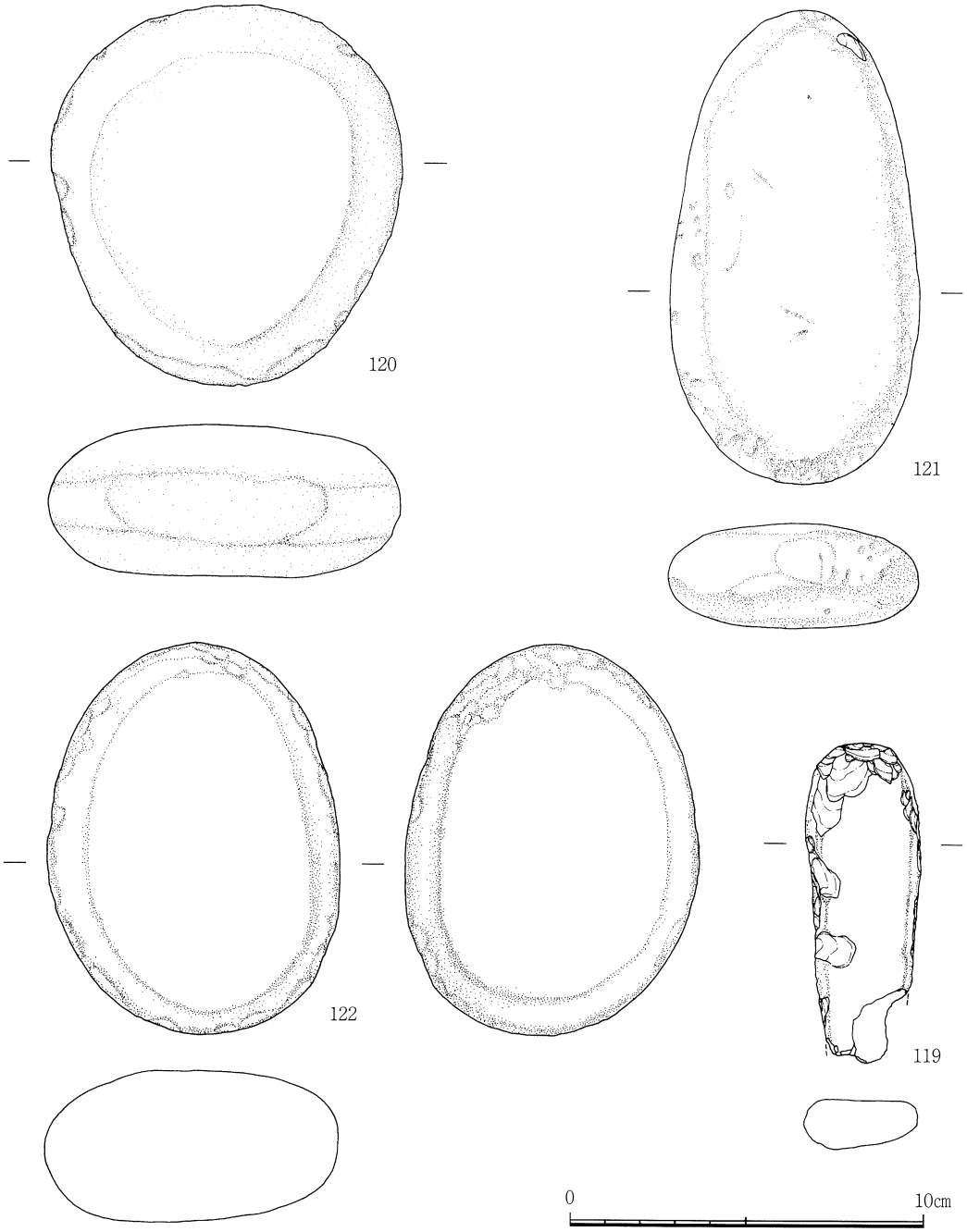
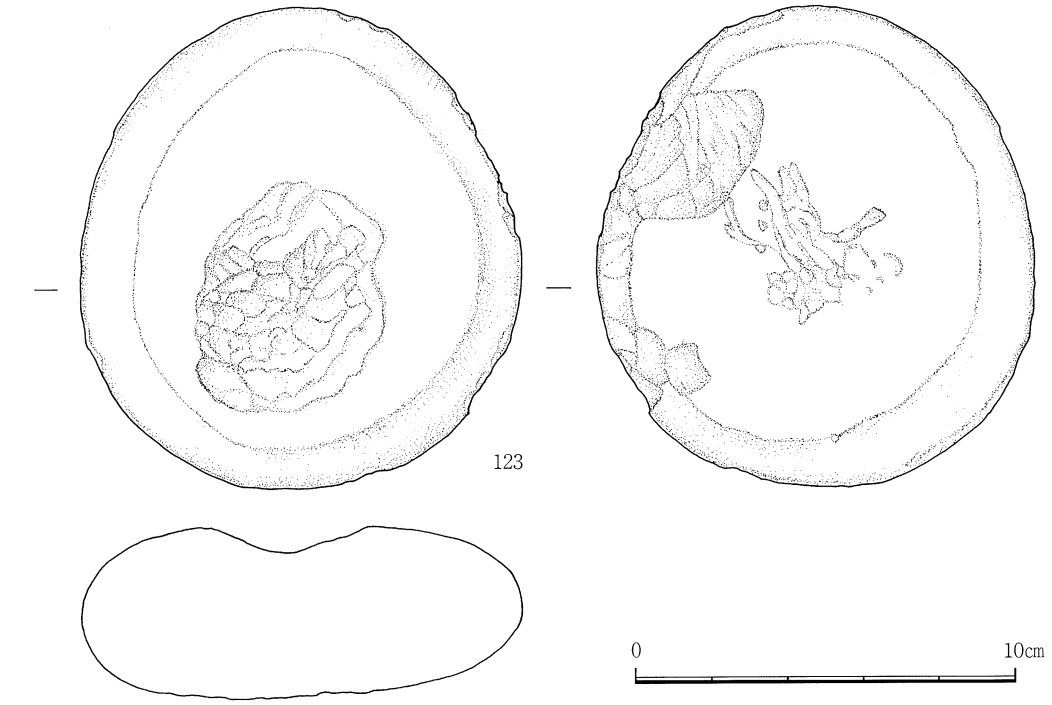


Fig.17　第１次調査出土遺物８（石器）

115～117は石錘で，いずれも長軸両端部を打ち欠く。115は泥岩製，116・117は砂岩製である。118は結晶片岩製で，石錘か。119は結晶片岩製の性格不明の石器で，叩石か。120は花崗岩製の磨石で，表面は赤変している。121～123は砂岩製の叩石である。124は砂岩製の台石である。125は滑石製？の不明石製品である。円柱状を呈し，縦位に溝状の凹み１条がある。

(3)　ガラス製品（Fig. 19）

126は半円筒状のガラス製品である。半截した管玉状を呈するが，そうするときわめて孔の大き



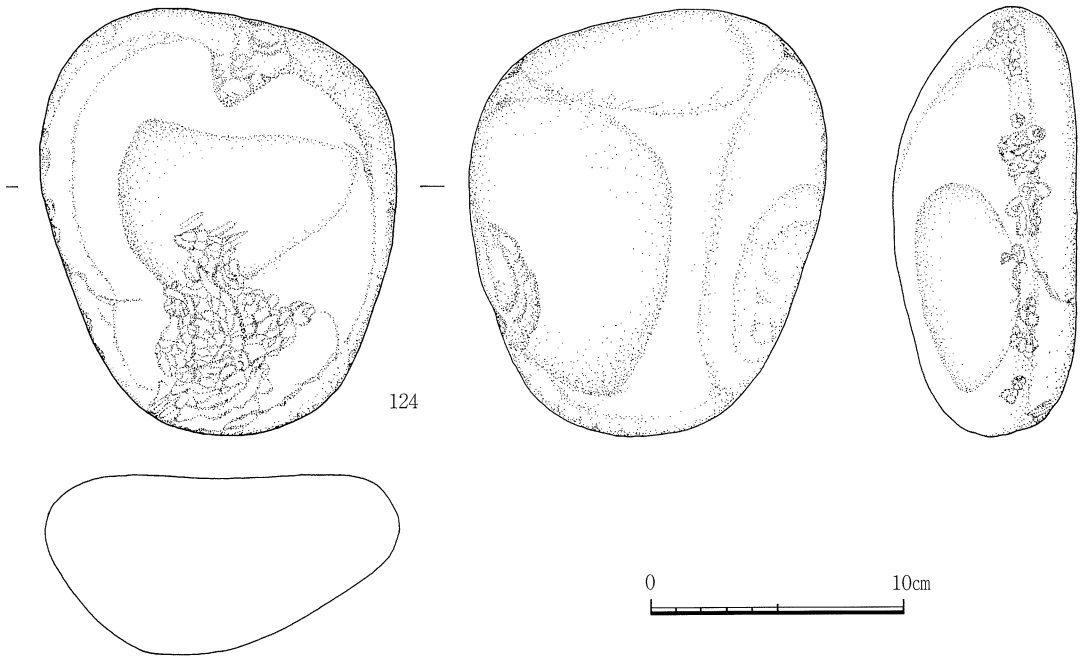


Fig.18　第１次調査出土遺物９（石器）

い管玉ということになる。表面は全面が滑面をなしており，半截した裁断面を研磨したものか，あるいは本来このような形状であるのか，判然としない。上端面と下端面は平行ではなく，下端面が縦軸方向に対して斜交する。したがって，上端面は本来の形状を留めているということが，可能性として考えられ，一方，下端面は折損後に研磨されたということが，可能性として考えら

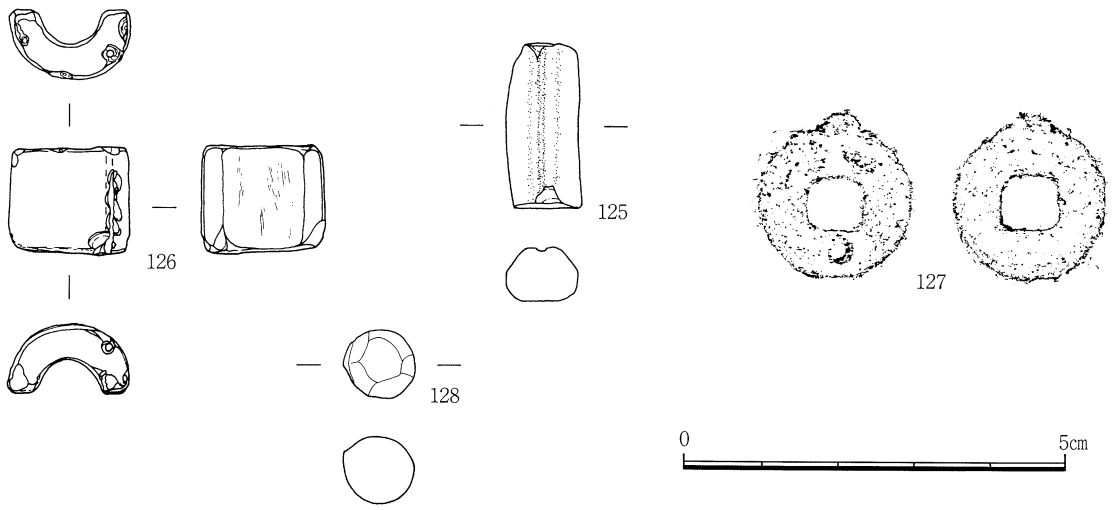


Fig.19　第１次調査出土遺物10（石器・ガラス製品・金属製品）

れる。すなわち，本来の形状を留める完形品であるのか，あるいは何らかの破損に伴う再生・再加工品であるのか，外見からだけでは判断できない。また，外面からみて右端部側には縦位に径１㎜の小孔があり，その外面側は下端側から大きく破損し，開口している。この小孔の存在と，その破損とにより，現形状で垂飾品として使用されたと考えられる。

(4)　金属製品（Fig. 19）

127は鉄銭で，両面とも無銘。上端部にバリ跡？が付く。128は鉛玉？である。

註

(1)　凝灰質頁岩（酸性凝灰岩）については，安井敏夫氏（越知町企画課横倉山自然交流センター準備室）に御教示いただいた。

(2)　尾上実・森島康雄・近江俊秀「Ⅲ土器・陶磁器　６．瓦器椀」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社　1995年

(3)　横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』４集　九州歴史資料館　1978年（『大宰府陶磁器研究―森田勉氏遺稿集追悼論文集―』森田勉氏遺稿集追悼集刊行会　1995年　所収）

(4)　同註(3)

(5)　有田町史編纂委員会『有田町史　古窯編』佐賀県西松浦郡有田町　1988年

第Ⅳ章　第２次調査

(1)　調査の概要

女川遺跡の範囲内で実施される個人住宅の建築に伴って，その影響を受ける埋蔵文化財の記録保存を目的として本次調査を実施した。調査期間は平成８年２月16日～２月29日，発掘調査面積は175m²である。(Fig. 2)

(2)　調査の方法

表土層，無遺物層の掘削は，主として重機（バックホー）を使用しておこない，遺物の含まれる層の掘り下げ，及び遺構の検出・掘り下げは人力によっておこなった。遺物を含むと考えられた層の土壌（遺構埋土を含む）は５㎜のフルイによって選別し，微細な遺物の採集に努めた。

遺構調査に際しては，調査区の形状にあわせた任意座標を設定し，これに基づく一辺４ｍの方眼区画（グリッド）により調査区を分割した。(Fig. 20) 個々のグリッドの名称は，まず北→南方向をＡ行～Ｄ行，西→東方向を１列～５列とし，「(アルファベット）＋（数字)」でグリッド名を表記することとした。遺物の取上げ，及び遺構の命名は，このグリッドに基づいておこなった。

遺構の検出状態・完掘状態の写真撮影を随時おこない，完掘後は，遺構平面図・堆積土層断面図等を作成した。

なお遺構名は，遺構検出時点でピット状遺構を「Ｐ」，撹乱坑を「Ｋ」と命名した。中にはその完掘後に「Ｋ」から「Ｐ」へ転じたものもあるが，当初の遺構名のままで改称はしていない。

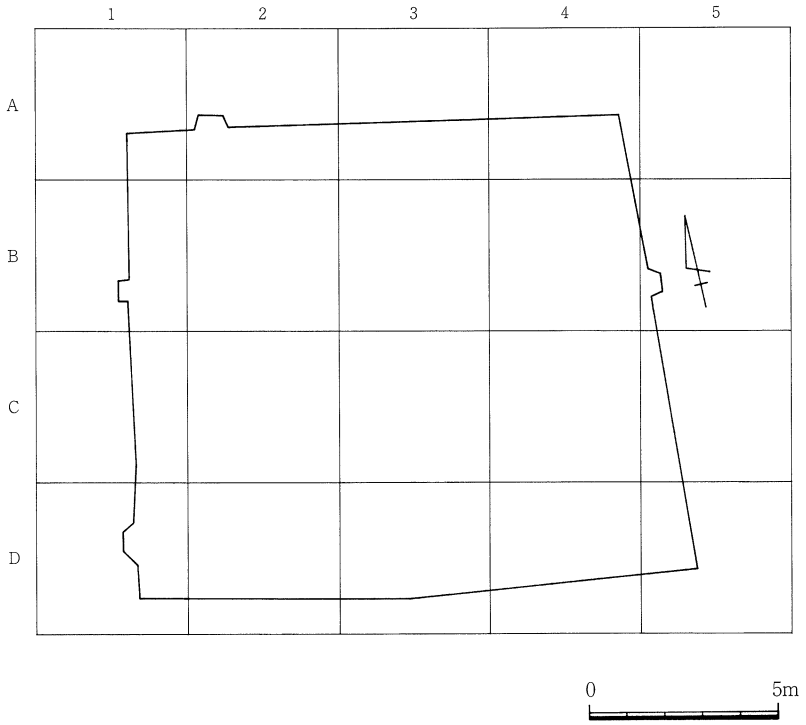


Fig.20　第２次調査グリッド割り図（Ｓ：1/200）

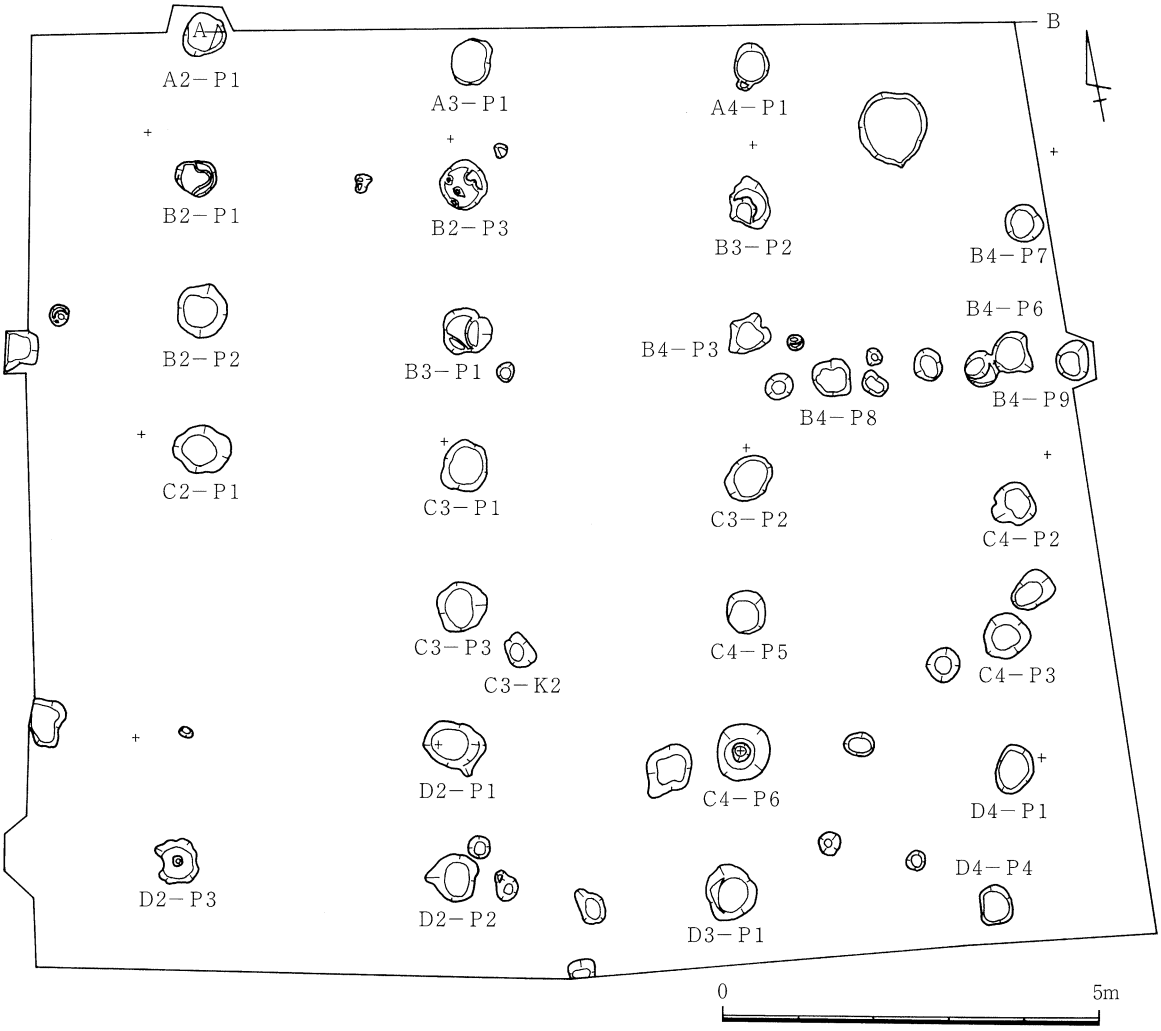


Fig. 21　第２次調査遺構全体図（Ｓ：1/100）

(3)　調査の成果

１．層序（Fig. 22）

本次の調査において確認された層序は，第Ⅰ層：黒褐色土，第Ⅱ層：黒褐色土，第Ⅲ層：黄褐色粘質土である。

第Ⅰ層は表土層で，第Ⅱ層は表土層と分離される撹乱層である。第Ⅲ層の上面は本次の遺構検出面で，第Ⅱ層関連の撹乱坑が顕著に認められる。撹乱坑は概して浅いが（Fig. 23・24），平面形状がバックホーの爪形を呈すものが多い。調査区はかつて桑畑であったとのことであり，その改変に伴って重機で抜根した際に，これらの撹乱坑が刻まれたものと推察される。

２．遺構（Fig. 21）

第Ⅲ層上面において，ピット状遺構51基を検出し，出土遺物を示したもの10基を図示した。

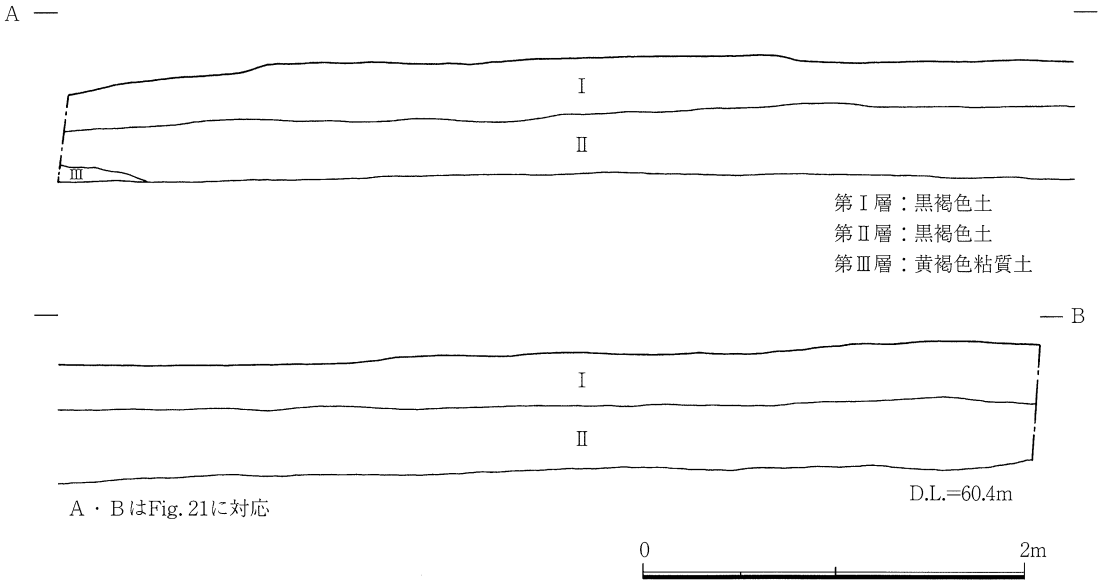


Fig. 22　第 2 次調査北壁土層断面図（S：1/40）

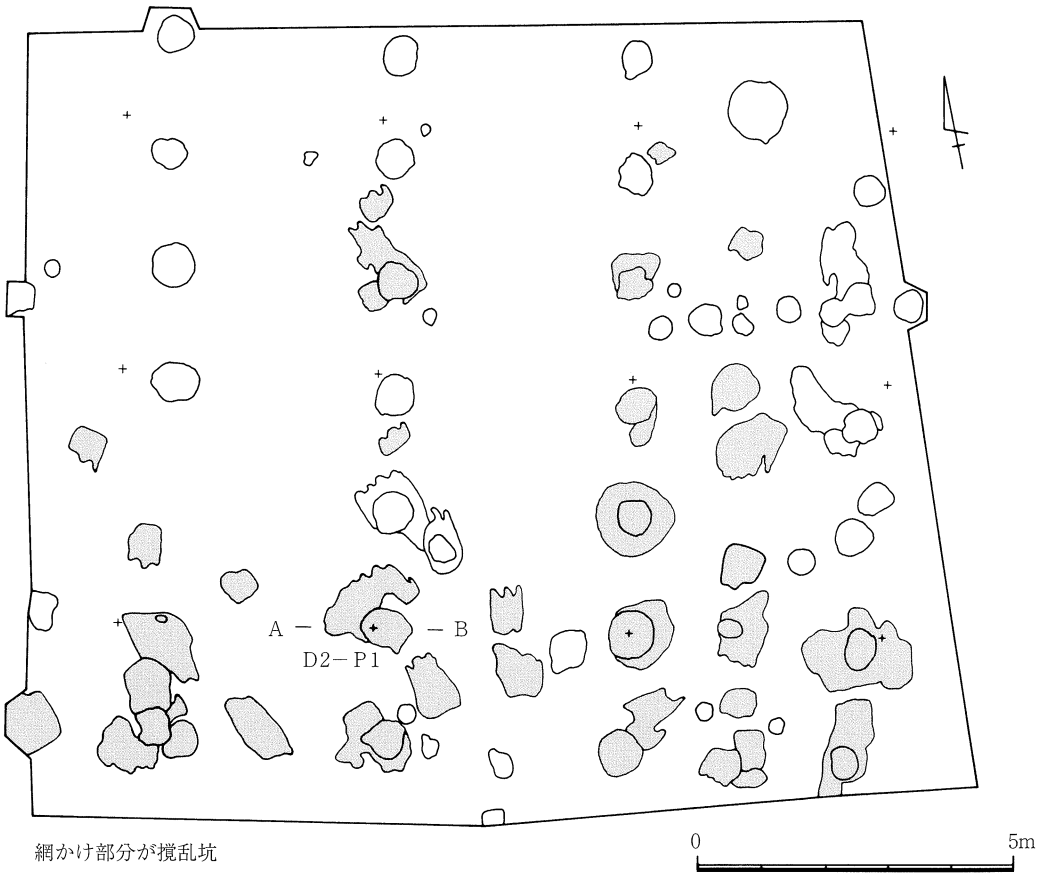


Fig. 23　第 2 次調査撹乱状況図（S：1/120）

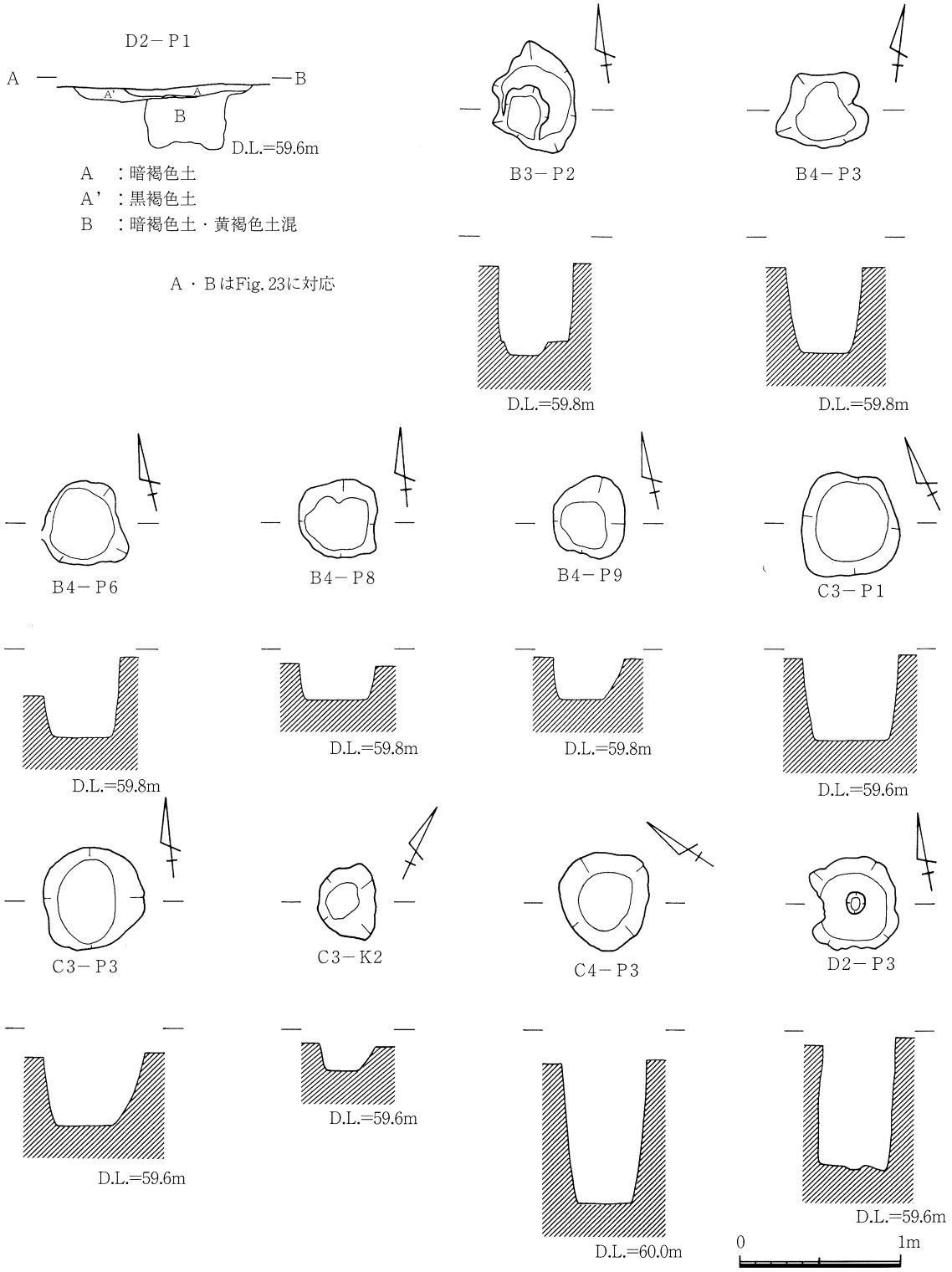


Fig. 24　第２次調査検出遺構（Ｓ：1/40）

(1)　ピット状遺構

Ｂ４－Ｐ８（Fig. 24）

平面形は隅丸四角形で，長径48cm，短径48cm，検出面からの深さは23.7cmである。埋土は黒褐色

遺構名	平面形	長径×短径(m)	検出面高(m)	底面高(m)	深さ(m)	出土遺物	年代
A 2 − P 1	不整円形	0.59 × 0.53	59.483	59.033	0.450	陶器，磁器，瓦	近世～
A 3 − P 1	楕円形	0.61 × 0.51	59.518	58.994	0.524	土師質土器，瓦	近世～
A 4 − P 1	不整楕円形	0.52 × 0.46	59.598	59.151	0.447	土師質土器	中世～
B 2 − P 1	不整楕円形	0.55 × 0.48	59.473	58.914	0.559	須恵器，瓦器	中世～
B 2 − P 2	不整円形	0.71 × 0.65	59.453	58.944	0.509	瓦	近世～
B 2 − P 3	円形	0.61 × 0.57	59.536	59.028	0.508	土師質土器，瓦	近世～
B 3 − P 1	不整形	0.59 × 0.57	59.566	58.991	0.575	陶器，磁器，金属部品	近世～
B 3 − P 2	不整形	0.72 × 0.52	59.628	59.050	0.578	瓦器，瓦，剥片，砕片	近世～
B 4 − P 3	不整形	0.57 × 0.46	59.663	59.069	0.594	土師質土器，陶器，剥片，砕片	近世～
B 4 − P 6	不整形	0.58 × 0.56	59.764	59.245	0.519	—	—
B 4 − P 7	不整円形	0.50 × 0.48	59.715	59.290	0.425	磁器	近世～
C 2 − P 1	不整楕円形	0.74 × 0.64	59.467	58.977	0.490	—	—
C 3 − P 1	不整楕円形	0.62 × 0.59	59.556	59.020	0.536	縄文土器，陶器，磁器	近世～
C 3 − P 2	楕円形	0.67 × 0.54	59.677	59.128	0.549	土師質土器	中世～？
C 3 − P 3	不整円形	0.64 × 0.63	59.541	58.988	0.553	瓦器，陶器，磁器，瓦	近世～
C 4 − P 2	不整形	0.58 × 0.56	59.779	59.218	0.561	土師質土器，陶器，磁器，砕片	近世～
C 4 − P 3	不整円形	0.62 × 0.56	59.807	58.912	0.895	土師質土器，陶器，磁器	近世～
C 4 − P 5	楕円形	0.56 × 0.51	59.595	58.950	0.645	瓦器？，陶器，磁器	近世～
C 4 − P 6	円形	0.75 × 0.69	59.645	58.929	0.716	弥生土器，陶器，瓦，砕片	近世～
D 2 − P 1	不整楕円形	0.71 × 0.61	59.536	58.845	0.691	瓦	近世～
D 2 − P 2	不整形	0.70 × 0.62	59.563	58.855	0.708	磁器	近世～
D 2 − P 3	不整形	0.63 × 0.62	59.509	58.728	0.781	土師質土器，瓦器，陶器，瓦，砕片	近世～
D 3 − P 1	不整円形	0.72 × 0.66	59.684	58.986	0.698	土師質土器，陶器，磁器	近世～
D 4 − P 1	楕円形	0.62 × 0.47	59.668	59.030	0.638	土師質土器，瓦器，陶器，砕片	近世～
D 4 − P 4	楕円形	0.53 × 0.42	59.696	59.110	0.586	—	—

表 3　第 2 次調査ピット状遺構群計測表

土である。遺物は土師質土器，青磁？片が出土しており，土師質土器 1 点を図示した。遺構は中世以降の所産と考えられる。

B 4 − P 9（Fig. 24）

平面形は不整形で，長径50cm，短径46cm，検出面からの深さは27.6cmである。埋土は黒褐色土である。遺物は土師質土器等が出土しており，土師質土器 3 点を図示した。遺構は中世の所産と考えられる。

C 3 − K 2（Fig. 24）

平面形は不整形で，長径46cm，短径36cm，検出面からの深さは18.7cmである。埋土は暗灰色土である。遺物は瓦器，土錘，石器砕片等が出土しており，土錘 1 点を図示した。遺構は中世以降の所産と考えられる。

(2)　ピット状遺構群（Fig. 24・表 3）

本次調査においては，東西約 4 m，南北約 2 mの間隔で規則的な配列をなすピット状遺構25基を検出した。出土遺物を図示した 7 基はFig. 24に示し，計測値等については表 3 にまとめた。表 3 によれば，長径は52～75cm，短径は42～69cm，深さは42.5～89.5cmの範囲内にある。深さは検出面高の制約を受けるためにややまとまりを欠くが，平面規模には一定の規格性のあることが理解できる。遺構から柱等の木質が出土したものはないが，柱痕状に二段の掘り込みをもつものが少数みられることから，柱状のものを埋置していたものと推察される。

これらのピット状遺構の埋没時期には，中世まで遡れるもの（ 3 基），近世以降のもの（19基），

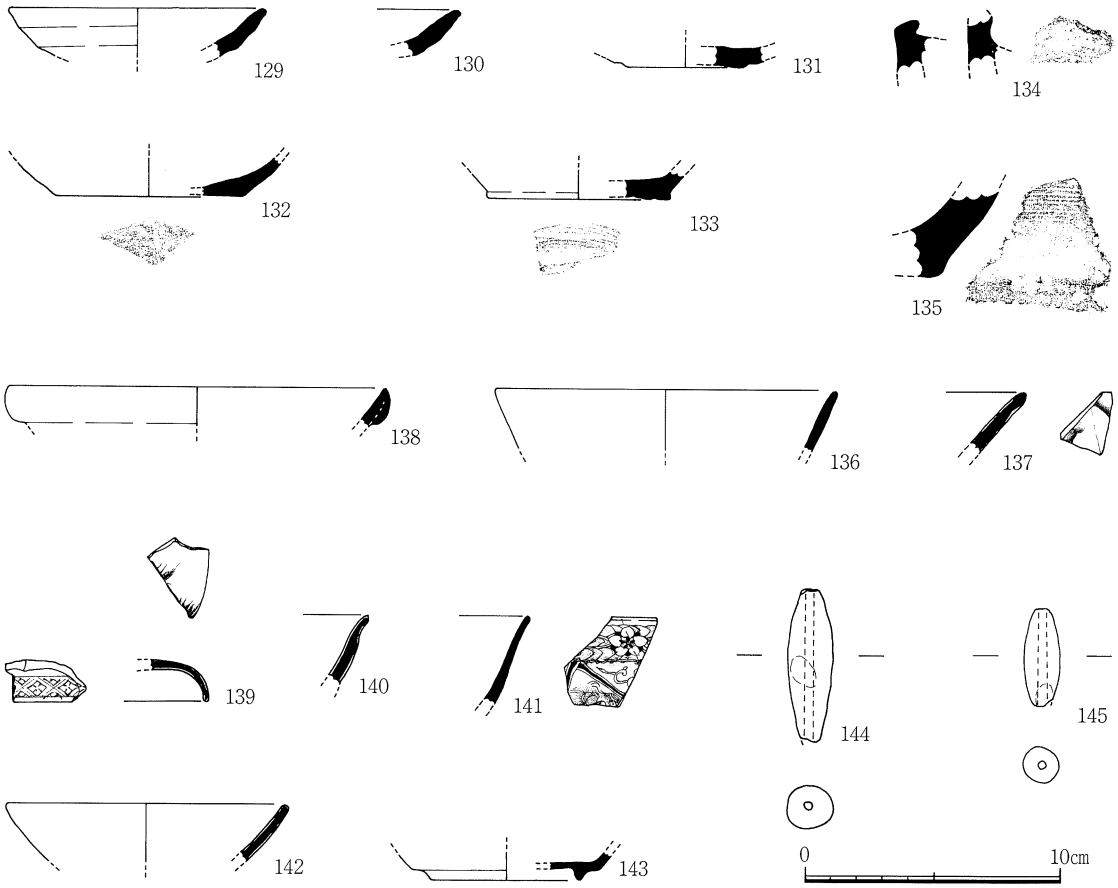


Fig. 25　第２次調査出土遺物１（土器・陶磁器・土製品）

出土遺物がなく年代不明のもの（３基）の３者が存在する。総じて出土遺物の量が少ないこと，また近世以降の年代を示すものが大勢を占めることから，総体としてのピット状遺構群は近世以降の所産と考えられる。ただし，明らかに近現代とみられる金属片の出土したＢ３－Ｐ１のような例もあり，近世以降のどの時期かは確定しかねるが，極端に新しい年代が与えられる可能性のあることも想定しておく必要がある。

なお，この種のピット状遺構群は，後述の第３次調査においても検出しており，本次調査区から北方にも展開することが確認されている。

３．遺物

(1)　土器・陶磁器・土製品（Fig. 25）

土師質土器，瓦質土器，青磁，白磁，磁器，土錘，合計17点を図示した。

129～134は土師質土器である。129～131はＢ４―Ｐ９出土である。134は火鉢か。135は瓦質土器？である。136・137は青磁・碗で，136は龍泉窯系Ⅰ類―１？，137は龍泉窯系Ⅰ類―５に分類される。[1] 138は白磁・碗で，口縁部は玉縁状をなし，白磁Ⅳ類に分類される。[2] 139～143は磁器である。139は蓋である。141は印刷手法による絵付けで，版きずがみられる。144・145は土錘で

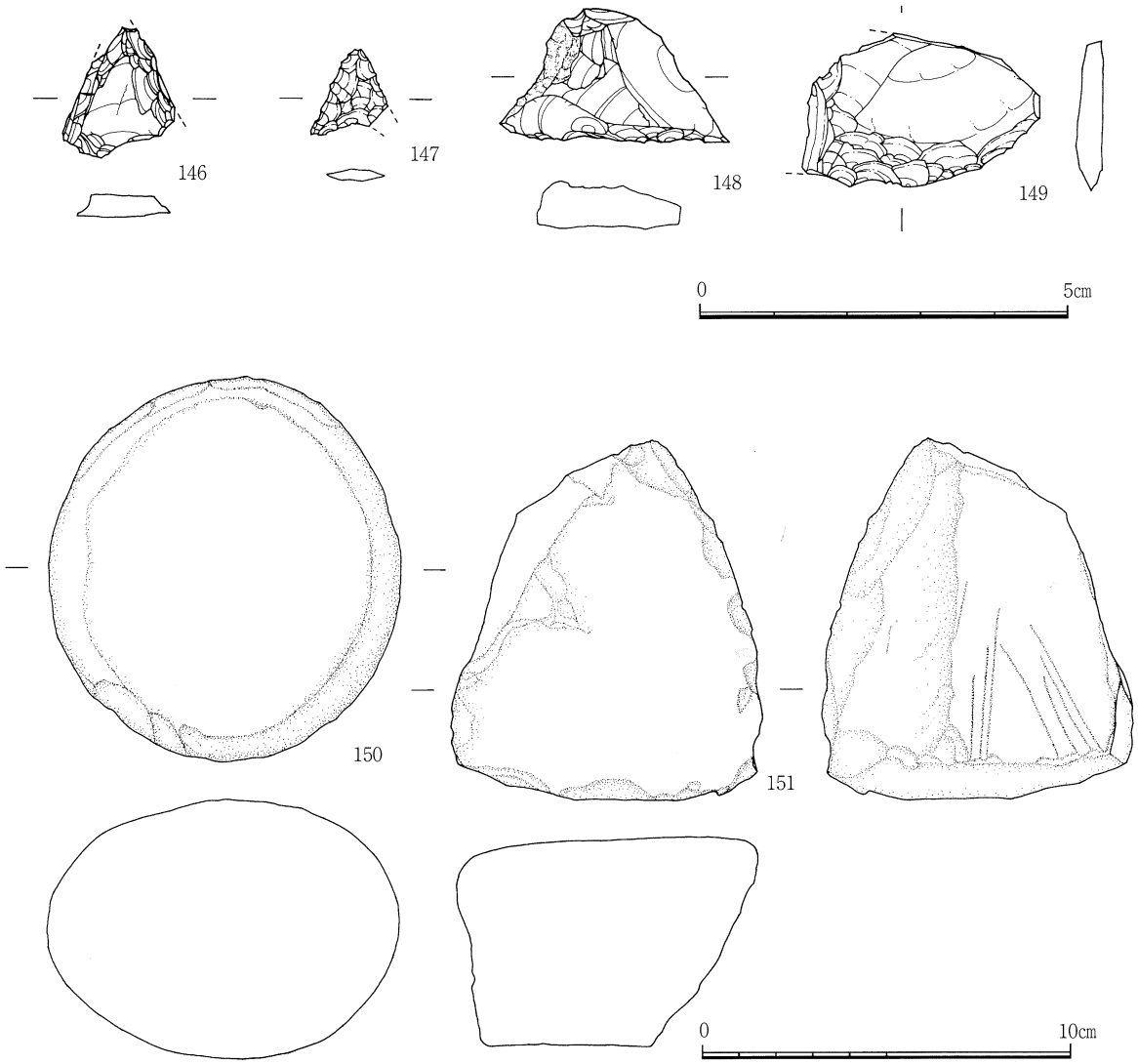


Fig. 26　第２次調査出土遺物２（石器）

ある。

(2)　石器・石製品（Fig. 26）

石鏃，２次加工ある剥片，叩石，砥石，合計６点を図示した。

146・147は石鏃で，Ｂ４―Ｐ３出土。146はチャート製，147はサヌカイト製である。148・149は２次加工ある剥片である。148はチャート製，149は凝灰質頁岩（酸性凝灰岩）製である。150は花崗岩製の叩石である。151は砂岩製の砥石である。

註

(1)　横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』４集　九州歴史資料館　1978年（『大宰府陶磁器研究―森田勉氏遺稿集追悼論文集―』森田勉氏遺稿集追悼集刊行会　1995年　所収）

(2)　同註(1)

第Ⅴ章　第３次調査

(1)　調査の概要

女川遺跡の範囲内で実施される町道建設に伴って，その影響を受ける埋蔵文化財の記録保存を目的として本次調査を実施した。調査期間は平成８年３月４日～３月16日，発掘調査面積は207m²であった。

(2)　調査の方法（Fig. 27）

調査対象地が細長く，Ｌ字状に折れ曲がる形状であることと，調査中も生活道として通行を確保する目的から，全体を３つに分割して順次調査を実施した。分割した各調査区は調査の実施順

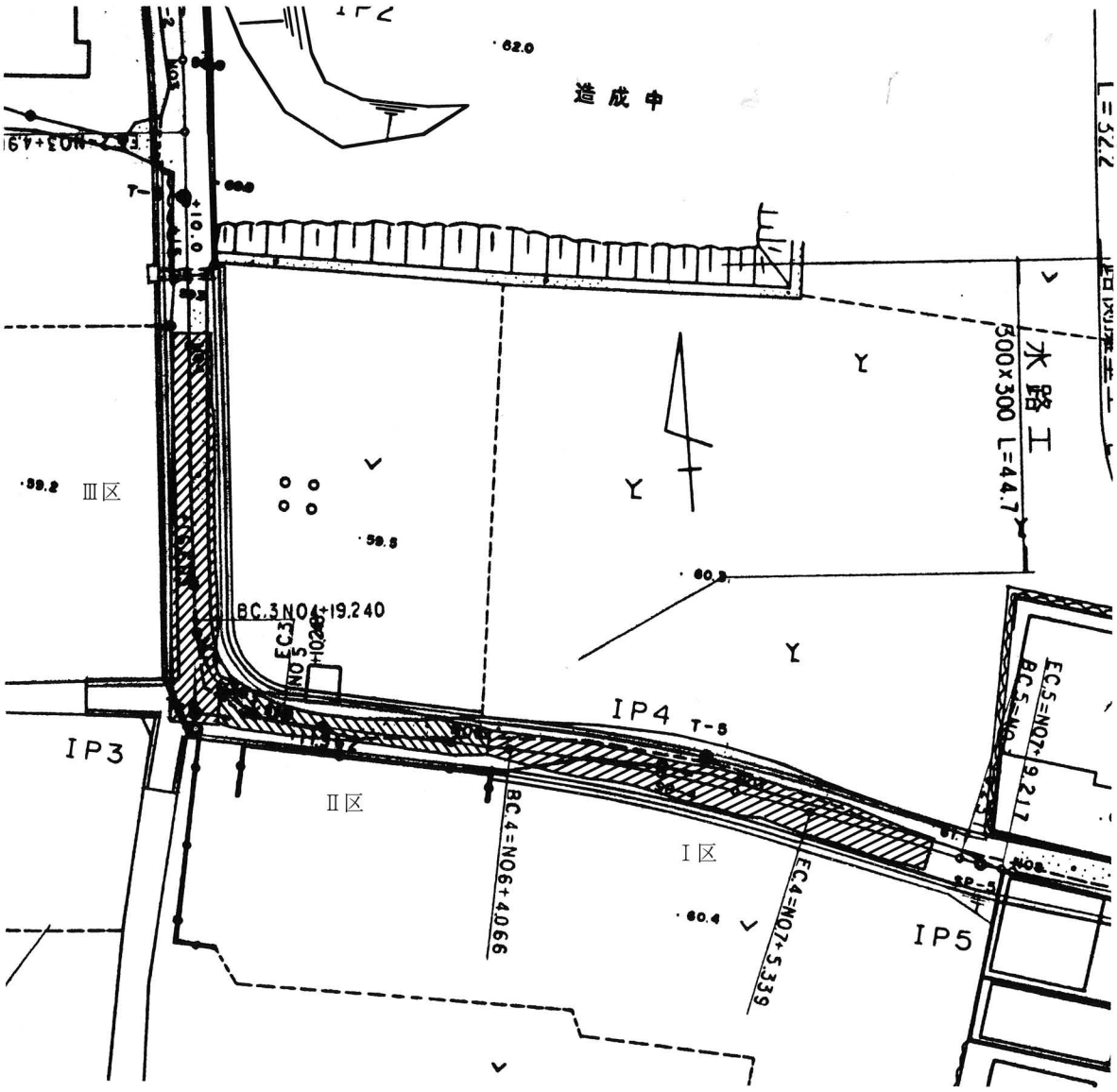


Fig. 27　第３次調査調査区配置図（Ｓ：1/500）

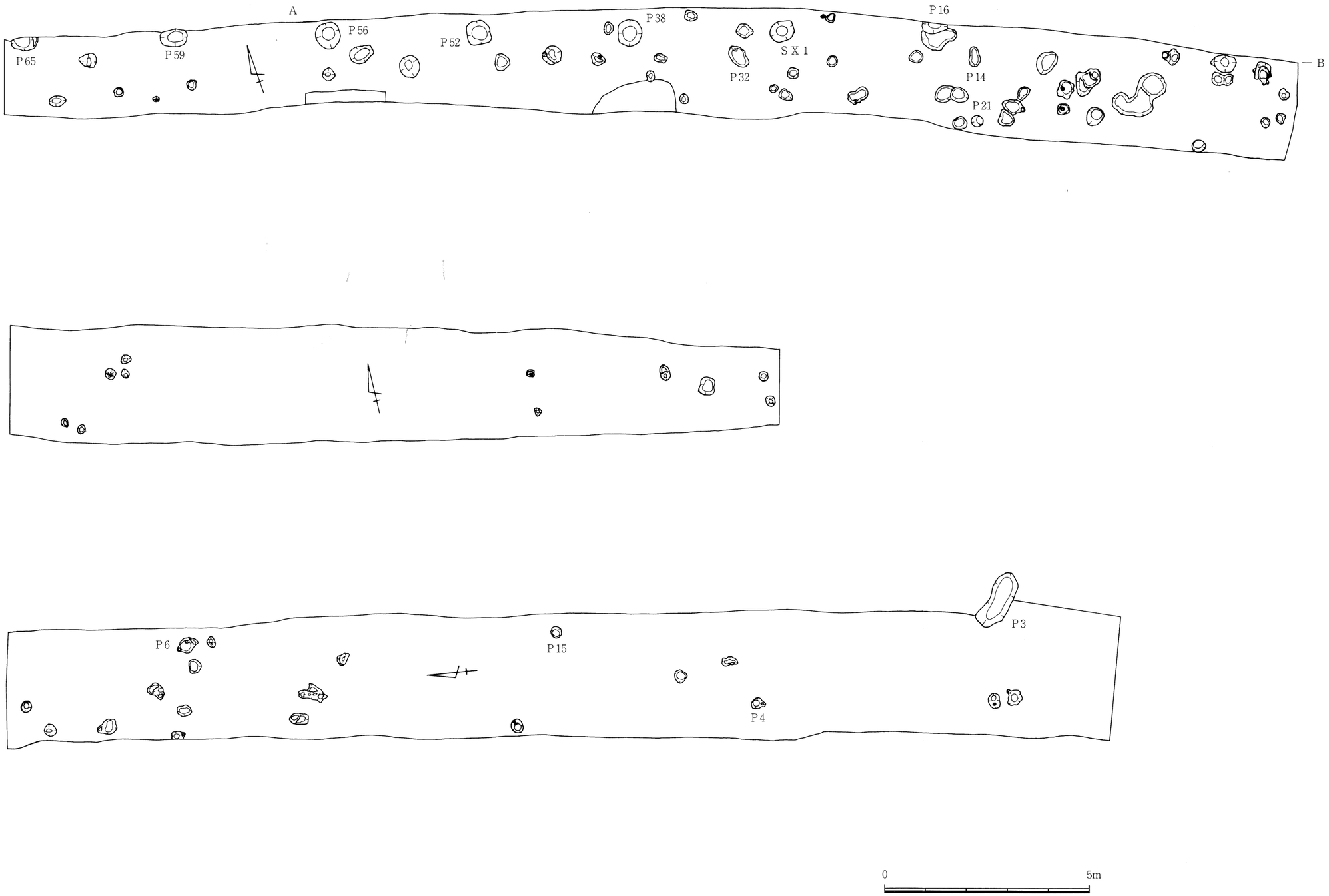
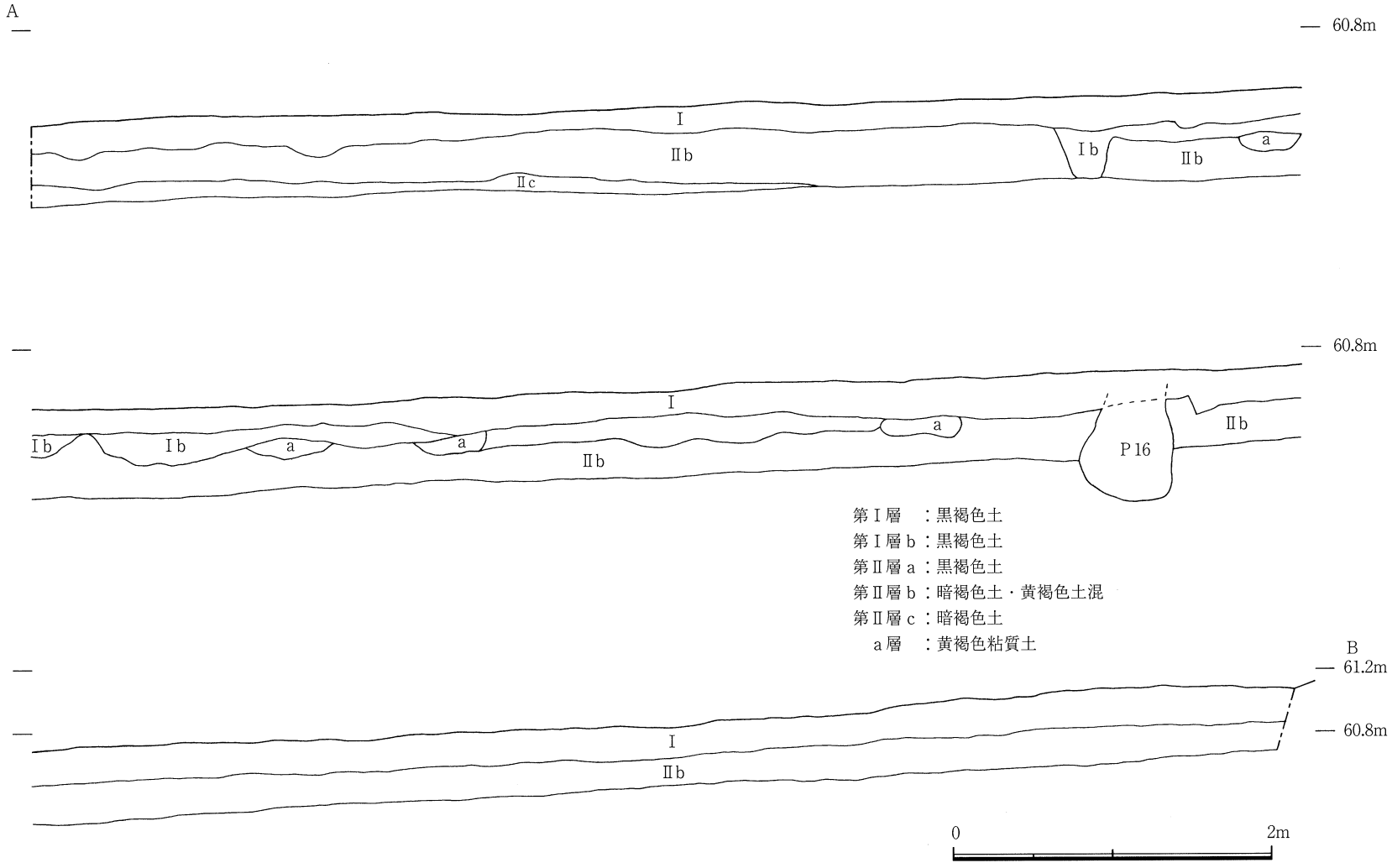


Fig.28　第３次調査遺構全体図（Ｓ：1/100）



A・BはFig. 28に対応

Fig. 29　第３次調査Ⅰ区北壁土層断面図（S：1/40）

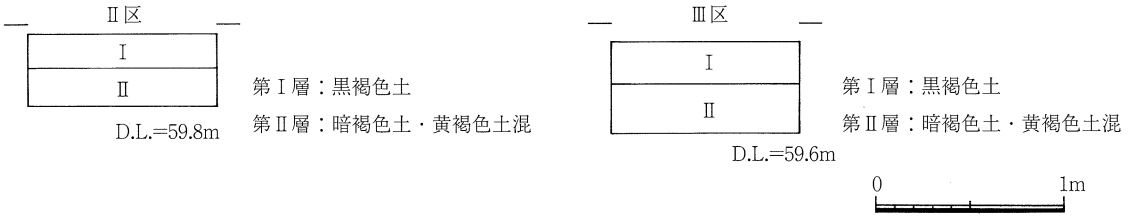


Fig. 30　第３次調査Ⅱ・Ⅲ区土層断面模式図（Ｓ：1/40）

に，東からⅠ区，Ⅱ区，Ⅲ区とそれぞれ呼称することとした。

表土層，無遺物層の掘削は，主として重機（バックホー）を使用しておこない，遺物の含まれる層の掘り下げ，及び遺構の検出・掘り下げは人力によっておこなった。遺物を含むと考えられた層の土壌（遺構埋土を含む）は５㎜のフルイによって選別し，微細な遺物の採集に努めた。遺構の検出状態・完掘状態の写真撮影を随時おこなった。完掘後は，遺構平面図・堆積土層断面図等を作成した。

(3)　調査の成果

１．層序

(1)　Ⅰ区（Fig. 29）

Ⅰ区において確認された層序は，第Ⅰ層：黒褐色土，第Ⅰ層ｂ：黒褐色土，第Ⅱ層ａ：黒褐色土，第Ⅱ層ｂ：暗褐色土・黄褐色土混，第Ⅱ層ｃ：暗褐色土，ａ層：黄褐色粘質土である。

第Ⅰ層は表土層を指し，その下部を第Ⅰ層ｂとした。第Ⅰ層ｂ以下，第Ⅱ層と冠した層はすべて近世以降の撹乱層である。

(2)　Ⅱ区（Fig. 30）

Ⅱ区において確認された層序は，第Ⅰ層：黒褐色土，第Ⅱ層：暗褐色土・黄褐色土混である。

第Ⅰ層は表土層で，第Ⅱ層は表土層と分離される撹乱層である。Ⅱ区では，第Ⅱ層下面に刻まれた筋状の撹乱坑の末端が，調査区北壁に沿って検出された。(Fig. 31) 第１次調査ＴＰ８検出の撹乱坑は，これと同種のものと考えられる。

(3)　Ⅲ区（Fig. 30）

Ⅲ区において確認された層序は，第Ⅰ層：黒褐色土，第Ⅱ層：暗褐色土・黄褐色土混である。

第Ⅰ層は表土層で，第Ⅱ層は表土層と分離される撹乱層である。

２．遺構（Fig. 32～34）

Ⅰ区～Ⅲ区全体で，石列状遺構１条，土坑状遺構１基，ピット状遺構50基等を検出し，石列状遺構，土坑状遺構，ピット状遺構９基を図示した。また第２次調査区のピット状遺構群の延長とみられるピット状遺構７基の計測値等については，表４にまとめた。

(1) 石列状遺構（Fig. 32）

Ⅱ区中央部，第Ⅰ～Ⅱ層中で検出した。径10～60cm程度の円礫，角礫約100個で構成される。石列の方向は東半部がほぼ東西で，西半部はわずかに北に振る。上下２段程度の石の重なりはみられるが，石と石の間隙が多く，積んだような状況は顕著でない。石列の基底部は第Ⅱ層中に求められるが明瞭ではなく，むしろ遺構上面の平面観を企図したものとみられる。なお，石列の最上部は消失した可能性がある。石列の下層からは，石鏃，剥片，加工礫，叩石，磨石，引き臼等の縄文時代～近世の石器が出土しており，石列構築以前にこれらの集積が開始されている。遺跡内の土地利用に伴い，用途を喪失した石器・石製品が忌避される存在となり，特定の地点に集められ，これが石列へと転化したものであろうか。石列の間からは近世以降の瓦片が出土しており，形成時期は近世を遡らない。遺構は「東ヤシキ」「南ヤシキ」の字境付近にあり，境界表示等を目的としたものと考えられる。

(2) 土坑状遺構

Ⅲ区Ｐ３（Fig. 33）

平面形は不整楕円形で，長径147cm，短径56cm，検出面からの深さは29.6cmである。埋土は暗褐色土である。遺物は弥生土器，土師質土器等が出土している。遺構は中世以降の所産と考えられる。

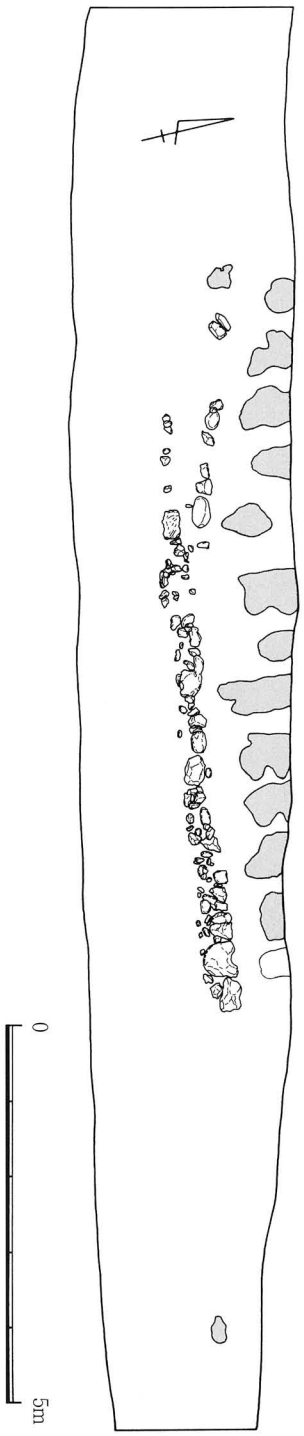
(3) ピット状遺構

① Ⅰ区Ｐ14（Fig. 33）

平面形は楕円形で，長径43cm，短径34cm，検出面からの深さは30.3cmである。埋土は黒褐色土である。遺物は土師質土器，瓦器，石器剥片，砕片等が出土しており，瓦器１点を図示した。遺構は中世以降の所産と考えられる。

② Ⅰ区Ｐ21（Fig. 33）

平面形は円形で，長径29cm，短径26cm，検出面からの深さは58.2cmである。埋土は暗灰色土である。遺物は土師質土器が出土しており，土師質土器１点を図示した。



網かけ部分が撹乱坑

Fig. 31　第３次調査Ⅱ区撹乱状況図・石列平面図（Ｓ：1/100）

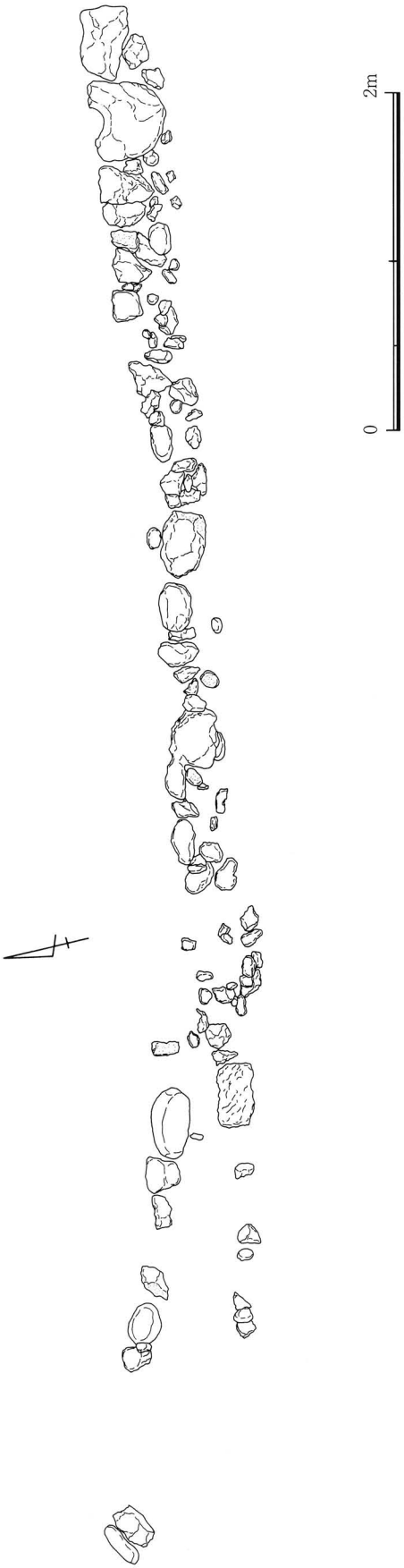


Fig. 32　第３次調査Ⅱ区石列平面図（S：1/40）

遺構は中世の所産と考えられる。

③　Ⅰ区Ｐ32（Fig. 33）

平面形は楕円形で，長径63cm，短径38cm，検出面からの深さは11.1cmである。埋土は黒褐色土である。遺物は土師質土器，石器剥片，砕片等が出土しており，剥片１点を図示した。遺構は中世以降の所産と考えられる。

④　Ⅲ区Ｐ４（Fig. 34）

平面形は不整円形で，長径34cm，短径26cm，検出面からの深さは41.6cmである。埋土は黒褐色土である。遺物は縄文土器，弥生土器，瓦片，石鏃，砕片等が出土しており，石鏃１点を図示した。遺構は近世以降の所産と考えられる。

⑤　Ⅲ区Ｐ６（Fig. 34）

平面形は不整形で，長径54cm，短径36cm，検出面からの深さは25.5cmである。埋土は黒褐色土である。遺物は弥生土器，土師質土器，鉛玉？等が出土しており，鉛玉？１点を図示した。遺構は近世以降の所産と考えられる。

⑥　Ⅲ区Ｐ15（Fig. 34）

平面形は楕円形で，長径28cm，短径26cm，検出面からの深さは26.8cmである。埋土は黒褐色土である。遺物は縄文土器，弥生土器，土師質土器，石器砕片等が出土しており，縄文土器１点を図示した。遺構は中世以降の所産と考えられる。

(4)ピット状遺構群（Fig. 33・表４）

第２次調査区のピット状遺構群の延長とみられるピット状遺構７基を検出した。中でもⅠ区Ｐ16は，Ⅰ区北壁の土層堆積状況（Fig. 29）から，第Ⅰ層中もしくは第Ⅰ層下面から掘り込まれていることが判明した。

３．遺物

(1)　土器・陶磁器・土製品（Fig. 35）

縄文土器，土師器，土師質土器，須恵器，瓦器，

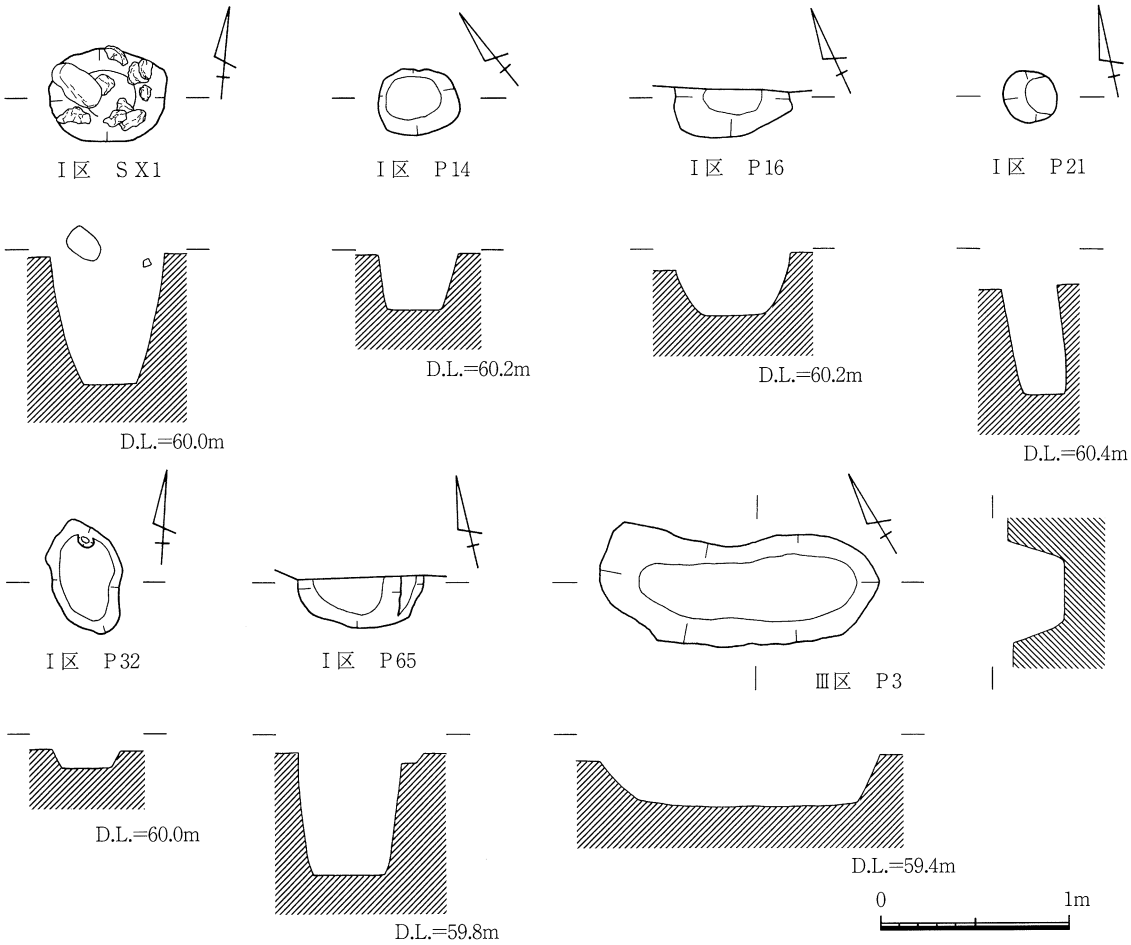


Fig. 33　第３次調査検出遺構１（Ｓ：1/40）

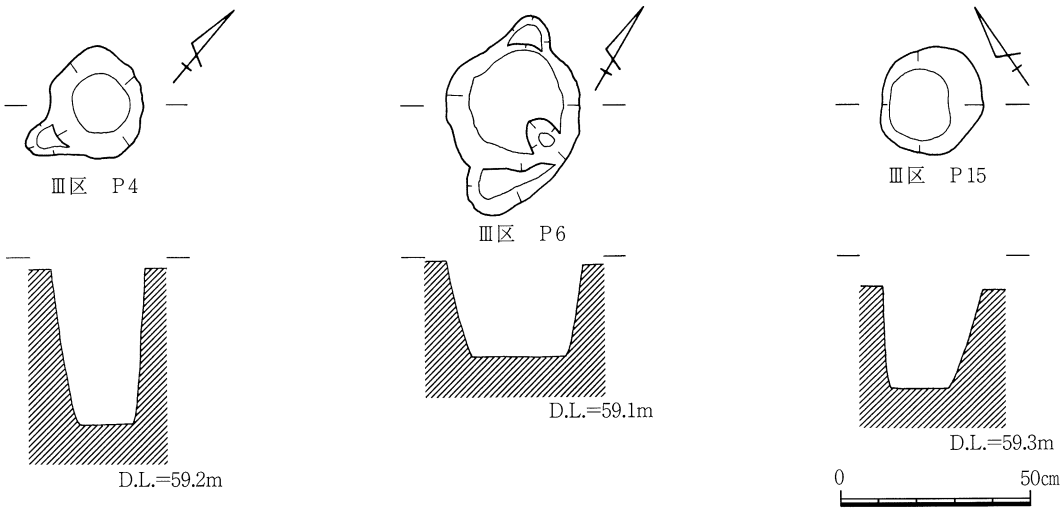


Fig. 34　第３次調査検出遺構２（Ｓ：1/20）

備前焼，青磁，陶器，磁器，土錘，合計35点を図示した。

152～157は縄文土器である。152は彦崎ＫⅡ式土器か。154・155は平城式土器である。158は土師器・高坏である。159～167は土師質土器である。163は外面にススタールが付着しており，灯

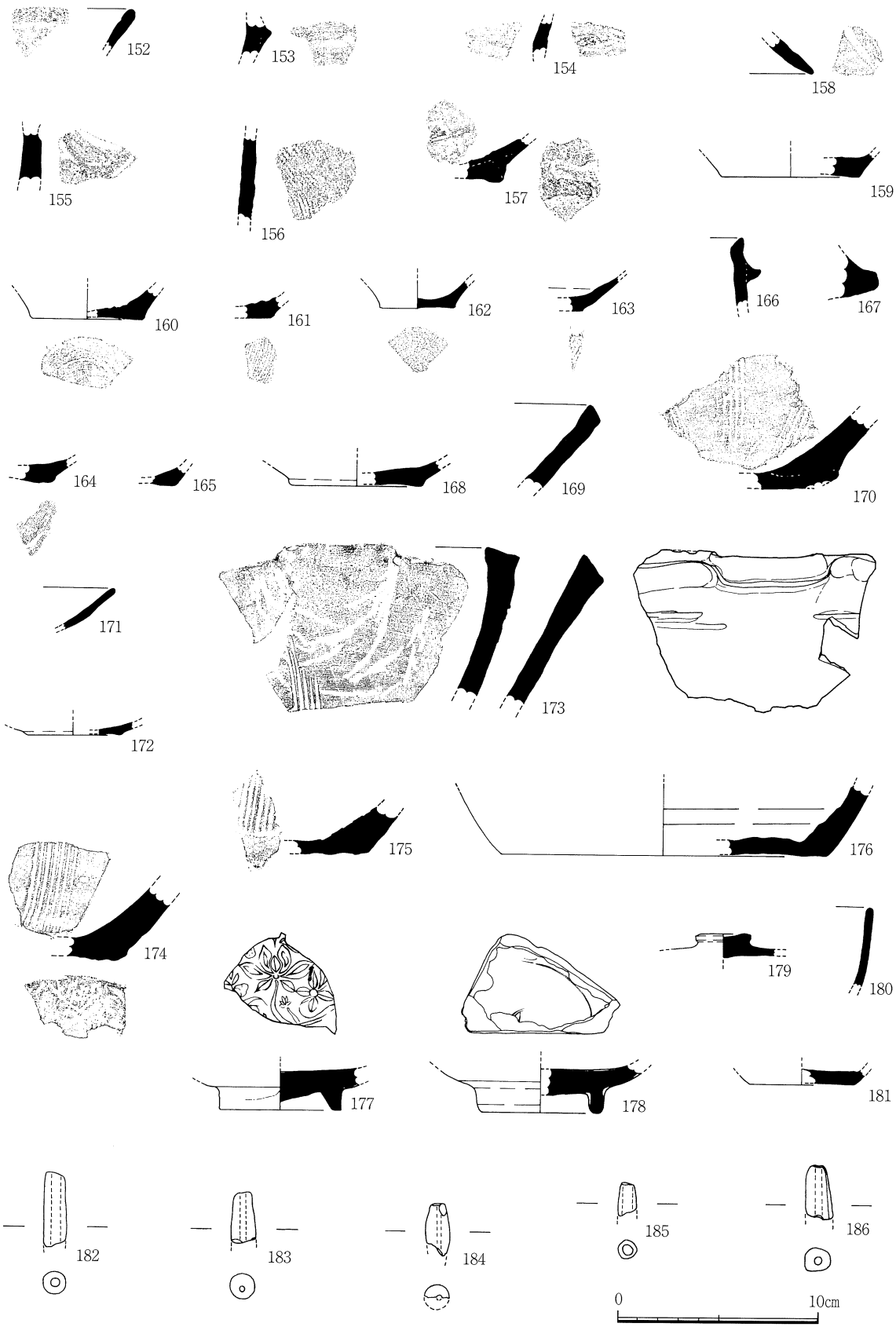


Fig. 35　第 3 次調査出土遺物 1 （土器・陶磁器・土製品）

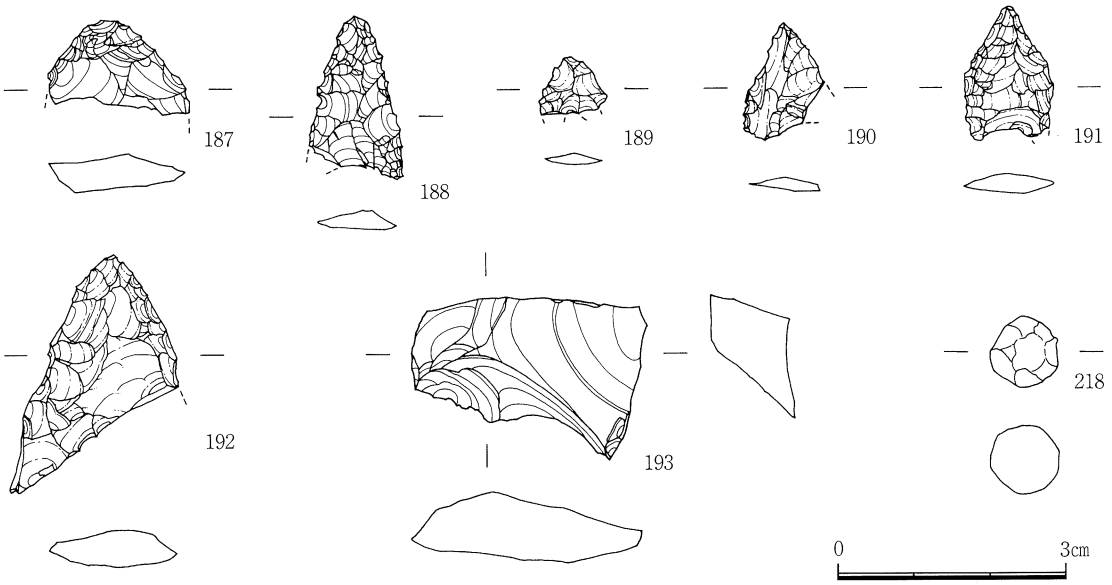


Fig. 36　第３次調査出土遺物２（石器・金属製品）

遺構名	平面形	長径×短径(m)	深さ(m)	出土遺物	年代
Ⅰ区ＳＸ１	楕円形	0.61 × 0.49	0.689	土師質土器，瓦器	中世～
Ⅰ区Ｐ16	楕円形？	0.63 × 不明	0.328	土師質土器，磁器	近世～
Ⅰ区Ｐ38	円形	0.65 × 0.61	0.432	縄文土器，土師質土器，瓦器，砕片	中世～
Ⅰ区Ｐ52	隅丸方形	0.59 × 0.58	0.429	土師質土器，瓦器，磁器，剥片	近世～
Ⅰ区Ｐ56	不整円形	0.64 × 0.60	0.399	土師質土器，陶器，磁器，瓦	近世～
Ⅰ区Ｐ59	楕円形？	0.64 × 不明	0.547	縄文土器，土師質土器，瓦器，砕片	中世～
Ⅰ区Ｐ65	楕円形？	0.65 × 不明	0.637	土師質土器，瓦器，磁器，瓦，砕片	近世～

表４　第３次調査ピット状遺構群計測表

明皿か。166・167は鍋である。168は須恵器である。169は東播系須恵器・こね鉢である。170は須恵器？・擂鉢で，焼成不良の非還元色を呈する。171・172は和泉型の瓦器・椀で，13世紀前半～中葉のものとみられる。[1]173～176は備前焼である。173～175は擂鉢で，173は片口部分である。177は青磁で，見込部に細い線描きで蓮花文を施文する。179・180は陶器である。178・181は磁器で，ともに青磁釉を施釉する。182～186は土錘である。182・184・186は瓦質の焼成である。

(2)　石器・石製品（Fig. 36～42）

石鏃，剥片，石錘？，加工礫，叩石，磨石，砥石，台石，石皿，引き臼，不明石製品，合計31点を図示した。

187～192は石鏃である。187・188はチャート製，189～192はサヌカイト製である。192は未製品か。193・194は剥片である。193はチャート製で，残核の可能性がある。194は砂岩製で，横刃形石器状の形態をなす。

195は石錘？である。196～199は性格不明の石器で，加工礫と仮称した。196・198・199は結晶

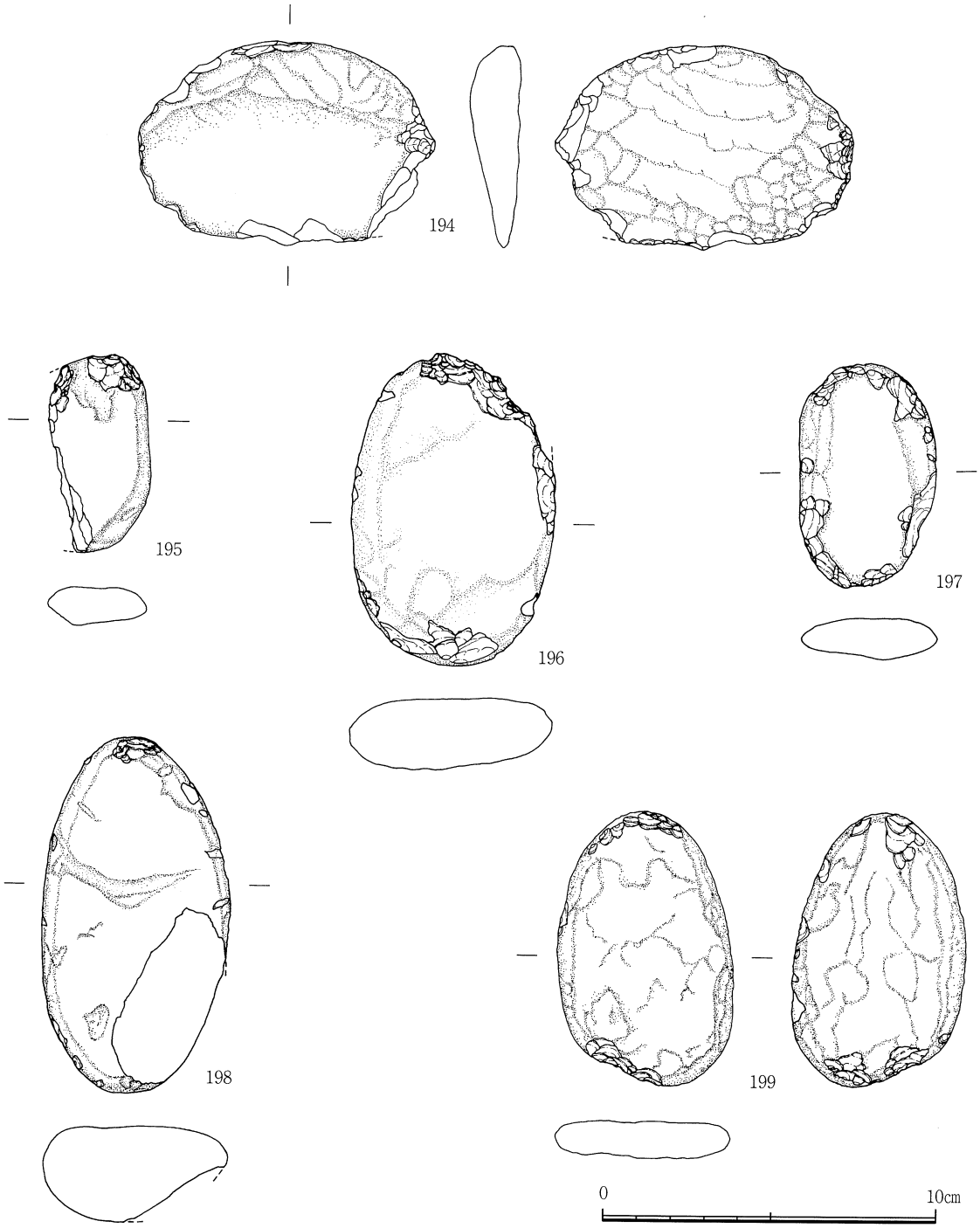


Fig. 37　第 3 次調査出土遺物 3 （石器）

片岩製，197は泥岩製である。199は石錘の可能性がある。

200～208は叩石である。200～207は結晶片岩製，208は砂岩製で，形状・材質に規格性が窺われる。209・210は磨石である。209は砂岩製，210は花崗岩製である。211は砂岩製の砥石で，4面を使用している。212・214・215は台石である。212・215は砂岩製，214は花崗岩製である。213は砂岩製の石皿である。216は砂岩製の引き臼で，使用面に4条以上単位の放射状摺目を敲打で形成す

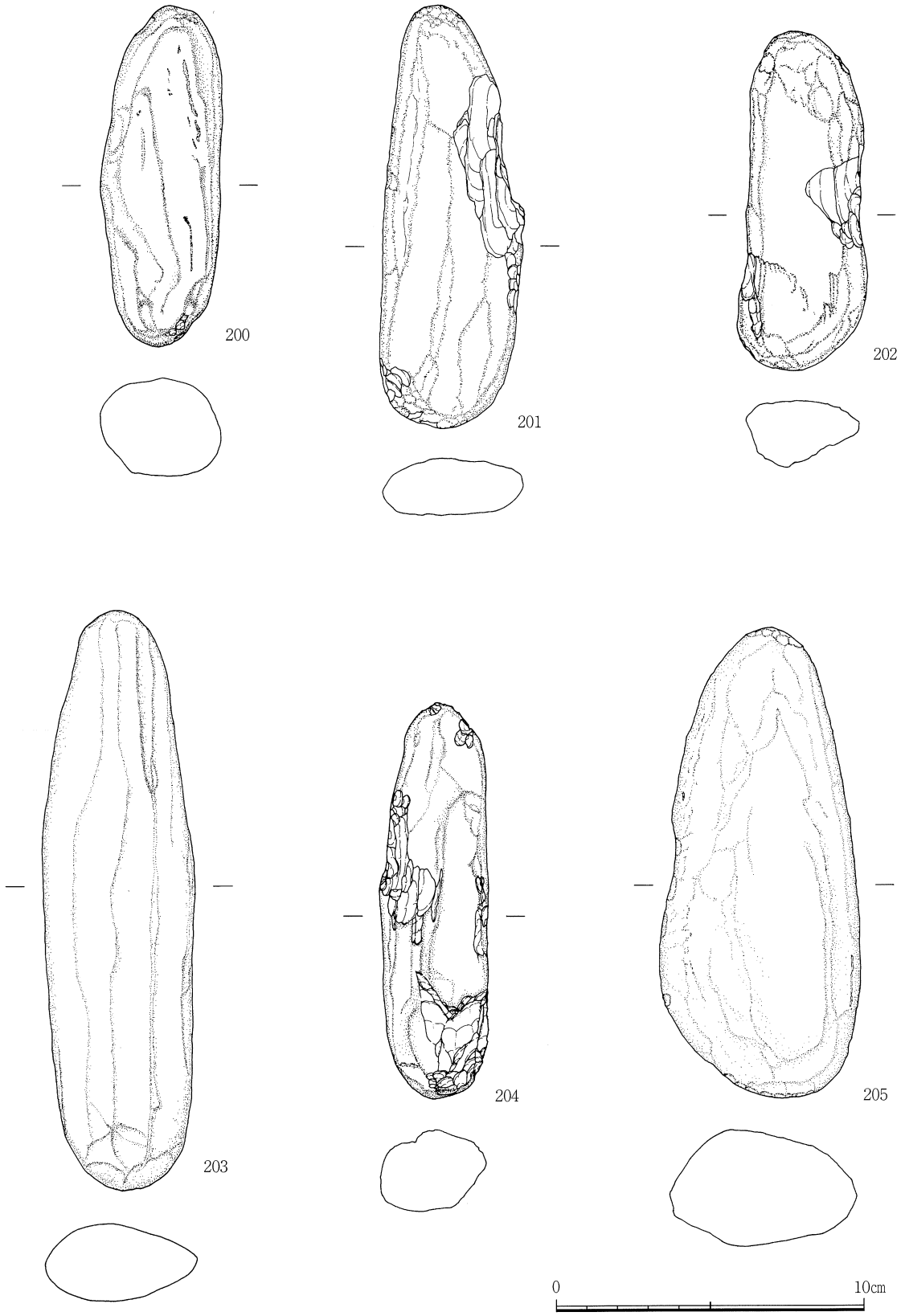


Fig. 38　第 3 次調査出土遺物 4 （石器）

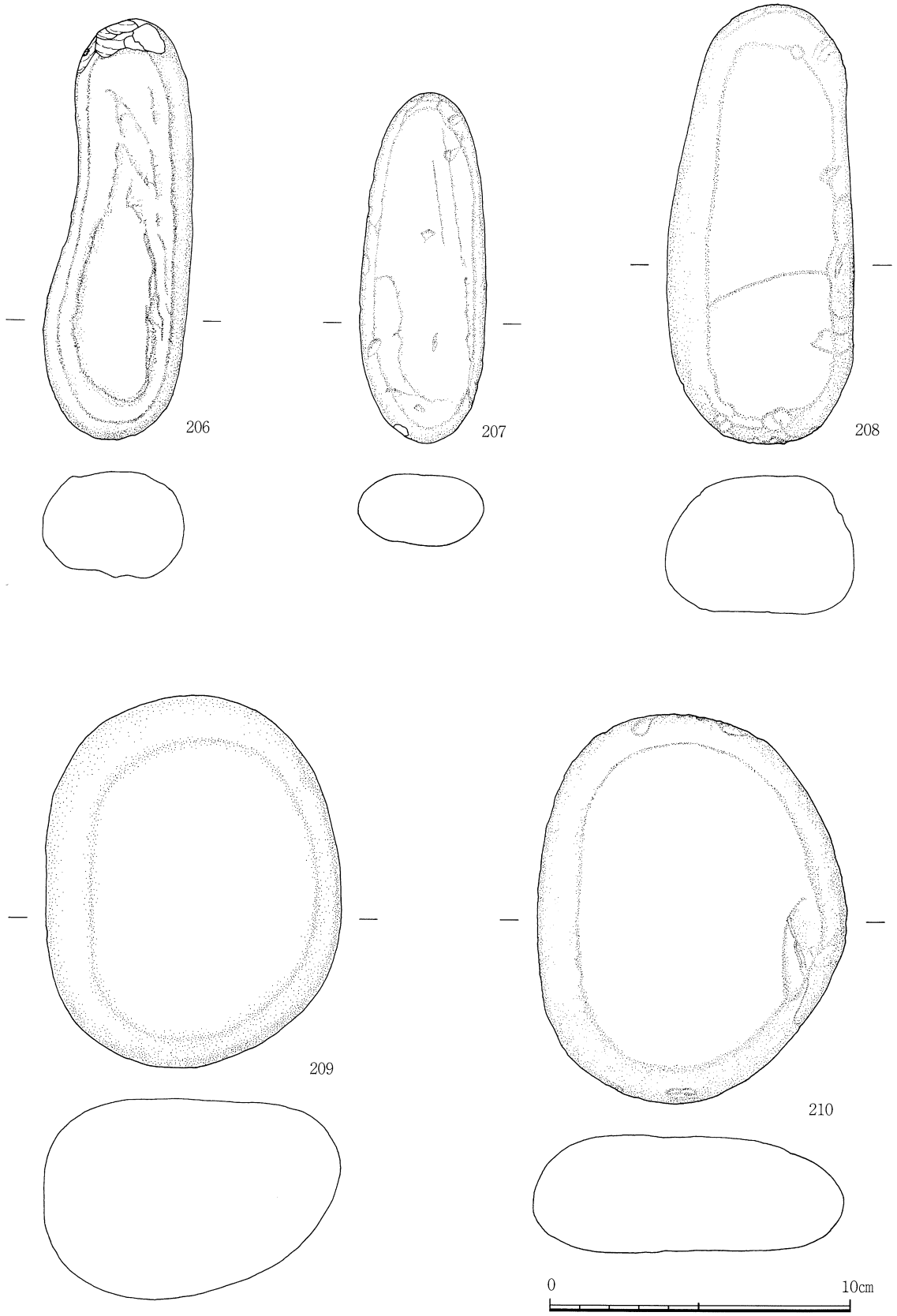


Fig. 39　第 3 次調査出土遺物 5 （石器）

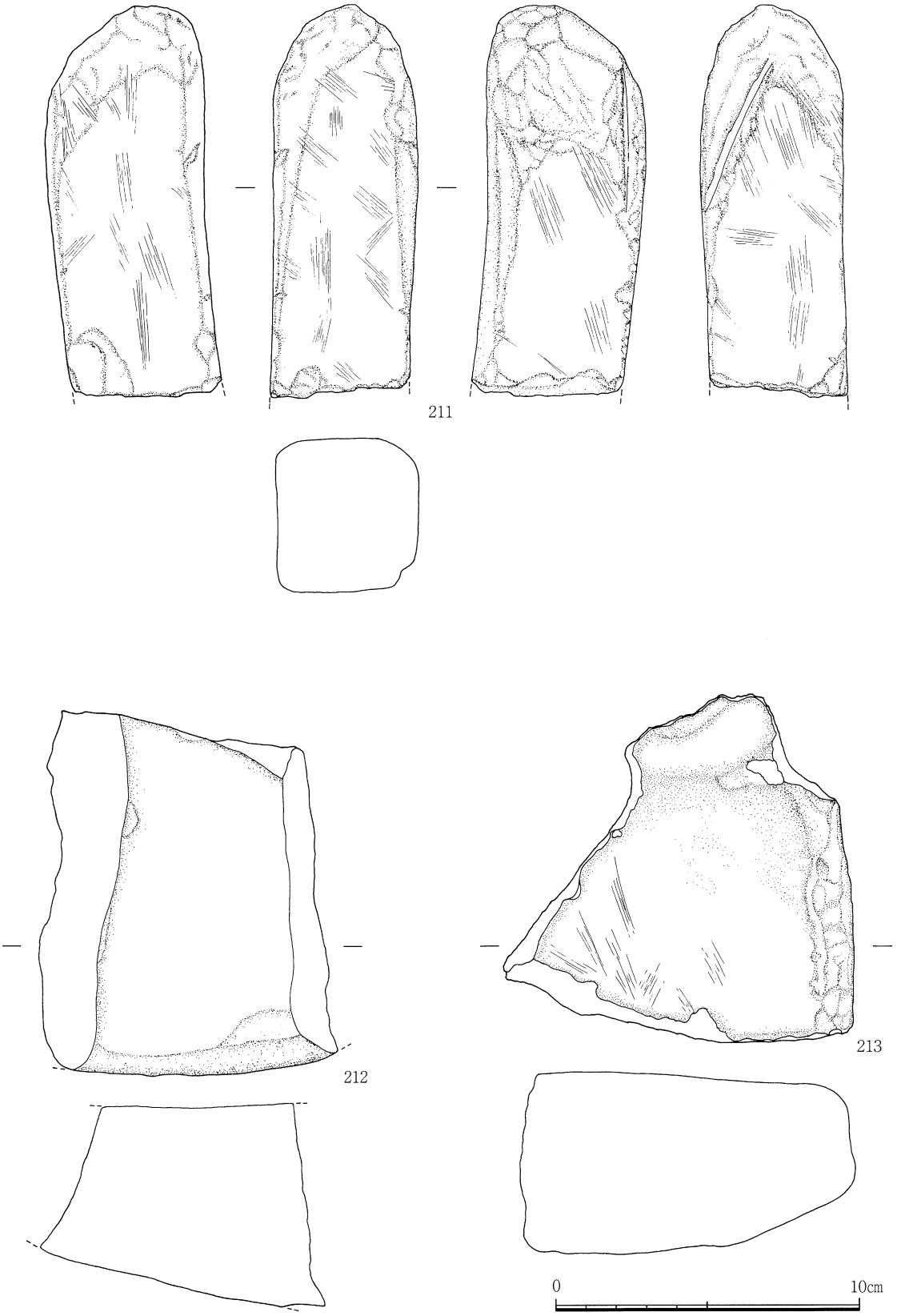


Fig. 40　第 3 次調査出土遺物 6 （石器）

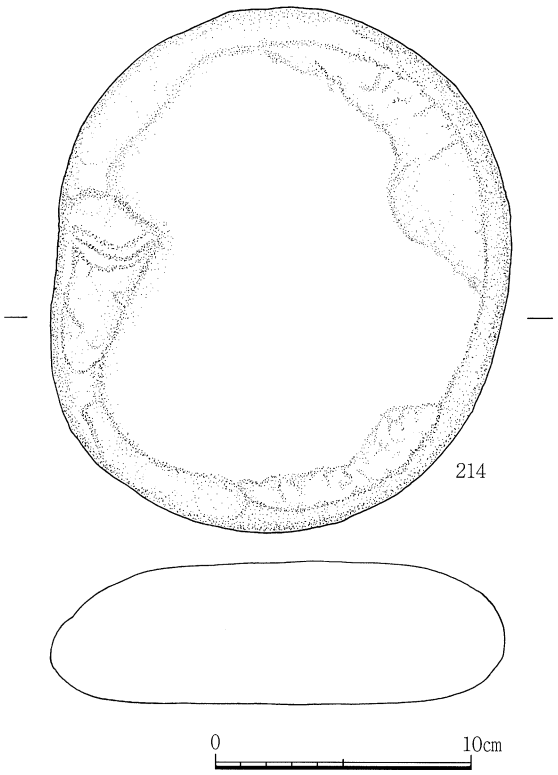


Fig. 41　第３次調査出土遺物７（石器）

る。217は円柱状石製品の半截品で，砂岩製である。

(3)　金属製品（Fig. 36）

218は鉛玉？である。

註

(1)　尾上実・森島康雄・近江俊秀「Ⅲ土器・陶磁器　６．瓦器椀」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社　1995年

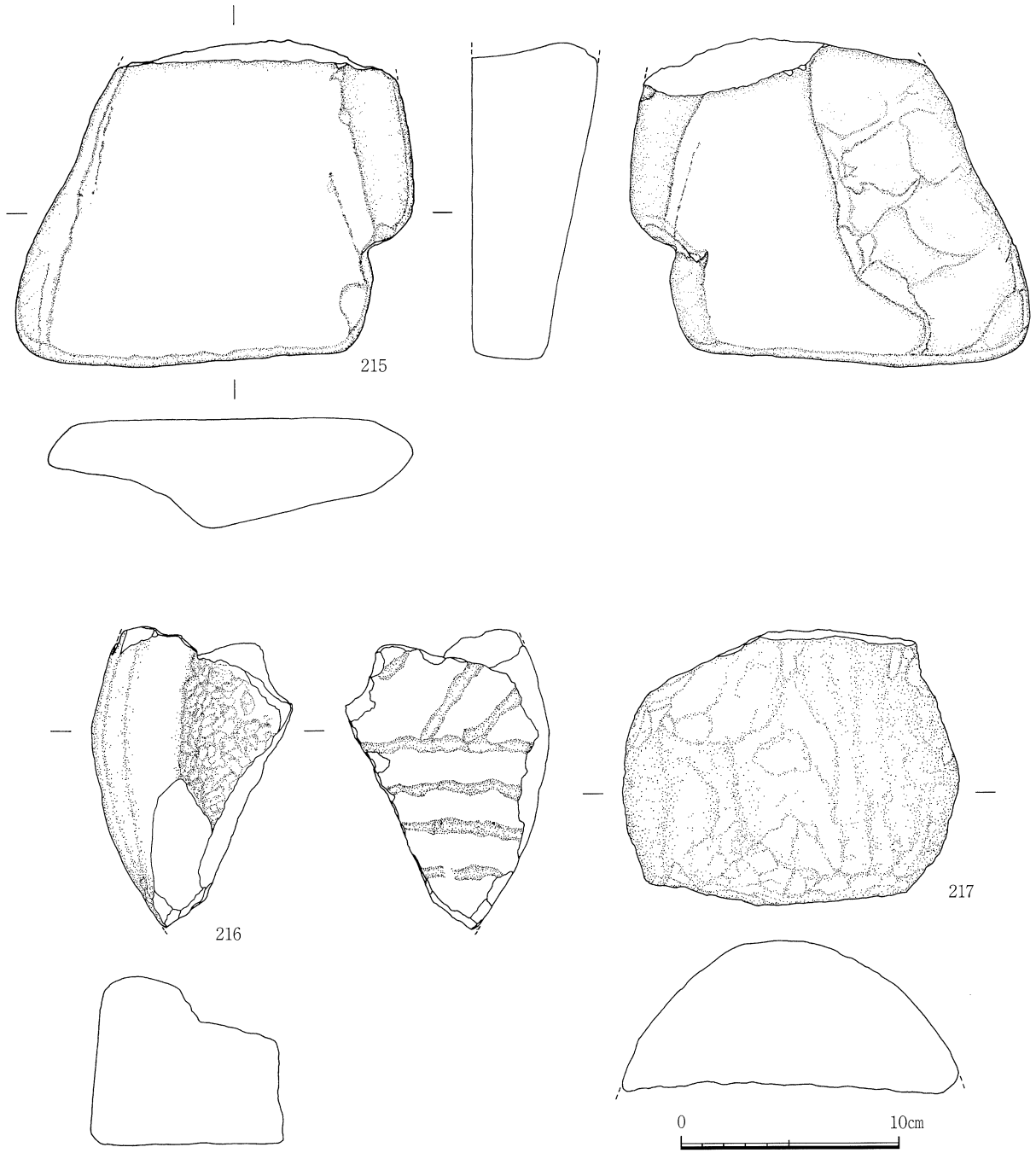


Fig. 42　第 3 次調査出土遺物 8 （石器・石製品）

第Ⅵ章　総括

(1)　第１次調査について

11箇所の試掘坑を調査し，20基余りの遺構と各時代の遺物を確認した。

遺構の中で出土遺物によって年代が特定できたのは，弥生時代前期末のＴＰ10－ＳＫ１，中世を遡らないとみられるＴＰ３－Ｐ１，ＴＰ４－Ｐ１（？），ＴＰ７－Ｐ１，ＴＰ７－Ｐ２，ＴＰ７－Ｐ３，ＴＰ７－Ｐ４，ＴＰ11－Ｐ１，ＴＰ11－Ｐ２の９基である。ＴＰ10－ＳＫ１は，その出土遺物から石器製作に関わる遺構と考えられる。中世を遡らないとしたものには，近世のものも含まれる可能性が高い。一方，遺物は出土していないが，ＴＰ１－Ｐ１，ＴＰ１－Ｐ２，ＴＰ２－Ｐ１，ＴＰ２－Ｐ２，ＴＰ９－Ｐ２の５基は，中世及びそれ以前の形成によるものと考えられる。ＴＰ５～ＴＰ11の区域では，各時代の旧地表面は近接していることが想像され，その結果，遺物包含層が純粋な形では遺されなかったものとみられる。

遺物は，縄文土器，弥生土器，土師質土器，瓦器，備前焼，青磁，白磁，陶磁器，土錘，ガラス製品，各種石器等が出土した。そしてその殆どはＴＰ10からの出土であった。ＴＰ10の遺物出土量は他を圧倒しており，それはそこが遺跡の中枢部に近く，また遺存状態が良好であることを示している。また，石器剥片・砕片類は，少量ながらもすべての試掘坑から出土しており，縄文・弥生時代の遺跡が調査対象地全域に遺存する可能性を示唆している。遺物から看取される遺跡の存続期間は，縄文中期，縄文後期，弥生前期，弥生後期，中世，及び近世以降である。縄文中期，弥生後期はともに遺物が少なく可能性を指摘するに留まる。縄文後期は平城式をはじめとする土器と，これに伴うとみられる石器類が出土している。弥生前期では，前期末頃の土器，凝灰質頁岩（酸性凝灰岩）・赤色チャートを素材とする多量の剥片石器類，そして半円筒状のガラス製品が出土している。凝灰質頁岩（酸性凝灰岩）は越知町横倉山産とみられ[1]，原産地が特定できる事例として興味深い。半円筒状ガラス製品は，外観では完形品とも破損品とも判定できず，また既存の器種名の範疇にもない，きわめて特異な形態をもつもので，国内には類例がない[2]。県内では最古のガラス製品と考えられ，今後当地域への搬入経路が問題となろう。また中世では瓦器，輸入陶磁器等が出土しており，13世紀前半以降の遺跡の存在が明らかとなった。

以上の成果から，本次の調査対象地には，全域にわたって縄文～近世の各時代の遺構・遺物が包蔵されていることが判明した。中でも縄文～弥生時代の遺跡に関しては，ＴＰ10周辺が主な分布域であり，一方中～近世の遺跡は，ほぼ全域にわたって展開していることが判明した。

(2)　第２次調査について

本次調査は，第１次調査に基づいた初の面的な発掘調査であった。第１次調査で検出していたピット状遺構のいくつかは，近世以降の所産とみられるピット状遺構群を構成するものと判明した。調査区全域に展開するピット状遺構群の性格は特定できていないが，後の第３次調査でもその一端が確認されていることから，遺跡における占有域は大きく，その位置付けは女川遺跡を理

解する上においても重要な意義をもつものと考えられる。中世の遺構は東端部で確認されており，ここから調査区外東方へ広がりをもつようである。本次の調査区は主に近世以降の遺構分布域に相当しており，今後遺構の分布から遺跡の全体像を把握していく上においては，不可欠な事実を追加することができた。

(3) 第３次調査について

本次調査は，第１次調査の「点」の成果を「線」へと昇華させたところに大きな意義を有する。その成果は，調査区周辺の未調査区域の様相に関するある程度の推測を可能にした。

Ⅰ区では，東から西への地形の傾斜が認められ，標高の高い東半部側が遺構分布密度は高くなっている。それらは建物を構成する可能性があり，南北両側へ広がるものと推察される。Ⅱ区は石列状遺構の存在感を除けば，遺構の少ない区域である。第２次調査のピット状遺構群の真北にありながら，それはⅡ区には広がらず，一方Ⅰ区には延びていることで，遺構群のアウトラインの一部が見えてきた。Ⅰ区検出のピット状遺構群の東西列はⅠ区Ｐ65を西限としており，その先にはⅡ区石列状遺構がある。ピット状遺構群は，字境との関連が窺われる石列状遺構を意識している可能性があり，そのことはピット状遺構群の性格に迫る際の重要な証左となる。Ⅲ区も中近世の遺構分布域であるが，検出密度はかなり散漫で，建物跡を構成するかどうかも不明である。Ⅲ区以西は，第１次調査ＴＰ11にみられるように，検出面までの深度も浅くなり，撹乱痕跡の多くなることが予想される。

以上の成果から，中近世の遺構はⅠ区東半部付近を中心として広範囲に存在することが判明し，また縄文・弥生時代の遺物は広範囲に認められるが，遺構及び遺物の集中域については，本次調査区が「カギ形」に取り囲んだ内側（すなわち北～東）方面にその所在を絞り込むことができた。

註

(1) 石材，ならびに産出地については，安井敏夫氏（越知町企画課横倉山自然交流センター準備室）に御教示いただいた。

(2) 藤田等氏に御教示いただいた。
藤田等『弥生時代ガラスの研究　―考古学的方法―』名著出版　1994年

表５　土器・陶磁器観察表１

挿図番号	出土地点・層位	器種／器形 ／部位	法量（cm，g）	文様・調整　外面／内面 その他の部位	色調　外面 内面	胎土	備考
Fig.10－１	第１次調査 ＴＰ10・Ⅱ層	縄文土器 ／口縁部片	残高　1.80	縄文ＲＬ（硬い原体），ナデ／ナデ	にぶい黄橙　10YR　6／3 灰黄褐　〃　5／2	長石，石英，角閃石，雲母	縄文中期・船元式？
Fig.10－２	第１次調査 ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	縄文土器／深鉢 ／口縁部片	残高　2.80	沈線1，竹管刺突1，縄文RL?／沈線1，ナデ 上面：刻目文	黒褐　10YR　3／2 灰黄褐　〃　4／2	石英，長石，雲母，角閃石	縄文後期・平城式
Fig.10－３	第１次調査 ＴＰ５―ＳＫ１	縄文土器／深鉢 ／口縁部片	残高　3.00	沈線１，縄文ＲＬ，ミガキ／ミガキ	にぶい黄褐　10YR　5／4 〃　〃　〃	長石，チャート，雲母，石英	縄文後期・平城式
Fig.10－４	第１次調査 ＴＰ10・Ⅱ層	縄文土器／深鉢 ／口縁部片	残高　2.80	刺突１？，ナデ／ナデ？，沈線状段１	明赤褐　5YR　5／6 にぶい黄褐　10YR　5／4	チャート，長石，石英	縄文後期・平城式
Fig.10－５	第１次調査 ＴＰ10・Ⅱ層	縄文土器／深鉢 ／口縁部片	残高　1.80	沈線２，縄文ＲＬ／ナデ	褐　7.5YR　4／4 にぶい黄褐　10YR　4／3	長石，石英，チャート	縄文後期・平城式
Fig.10－６	第１次調査 ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	縄文土器／深鉢 ／口縁部片	残高　2.70	ナデ	灰褐　7.5YR　4／2 にぶい褐　〃　5／4	長石，石英	縄文後期
Fig.10－７	第１次調査 ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	縄文土器／深鉢 ／口縁部片	残高　2.10	ナデ	灰黄褐　10YR　5／2 にぶい褐　7.5YR　5／3	長石	縄文後期
Fig.10－８	第１次調査 ＴＰ10―ＳＫ１	縄文土器 ／口縁部片	残高　2.70	撚糸文Ｌ？／ナデ（稜鋭い）	にぶい赤褐　5YR　5／4 にぶい黄褐　10YR　4／3	長石，チャート，雲母	縄文後期
Fig.10－９	第１次調査 ＴＰ10―ＳＫ１	縄文土器？ ／口縁部片	残高　2.30	ナデ（粗い）	にぶい赤褐　5ＹＲ　4／4 にぶい褐　7.5ＹＲ　5／4	長石，石英	縄文後期？
Fig.10－10	第１次調査 ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	縄文土器／深鉢 ／口縁部片	残高　1.90	ナデ（ミガキ的）／ナデ（粗い）	にぶい赤褐　5ＹＲ　5／4 灰黄褐　10YR　4／2	長石，雲母，石英，チャート	縄文後期
Fig.10－11	第１次調査 ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	縄文土器？ ／口縁部片	残高　1.70	隆帯，ナデ／ナデ	橙　7.5YR　6／6 〃　〃　〃	長石	縄文後期？
Fig.10－12	第１次調査 ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	縄文土器 ／口縁部片	残高　1.70	刺突１，ナデ？／ナデ	にぶい褐　7.5YR　5／4 〃　〃　〃	長石，チャート	縄文後期？
Fig.10－13	第１次調査 ＴＰ10―ＳＫ１	縄文土器 ／口縁部片？	残高　2.10	ナデ，ヘラナデ 上面：円形押捺文？	明赤褐　2.5ＹＲ　5／6 〃　〃　〃	チャート	縄文後期？
Fig.10－14	第１次調査 ＴＰ10―ＳＫ１	縄文土器／深鉢 ／口縁部片	残高　3.50	沈線２，縄文ＲＬ，ナデ／ナデ（丁寧）	黒褐　7.5YR　3／2 〃　〃　3／1	長石，石英，雲母	縄文後期，平城式
Fig.10－15	第１次調査 ＴＰ10―ＳＫ１	縄文土器／深鉢 ／口縁部片	残高　1.60	沈線１，表面剥落／ナデ？（表面剥落）	にぶい黄褐　10ＹＲ　5／4 〃　〃　〃	長石，石英，雲母	縄文後期，平城式
Fig.10－16	第１次調査 ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	縄文土器／浅鉢 ／口縁部片	残高　6.20	ミガキ～ナデ（丁寧）	にぶい黄褐　10ＹＲ　4／3 赤褐　5ＹＲ　4／6	長石，雲母，石英	縄文後期？
Fig.10－17	第１次調査 ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	縄文土器／深鉢 ／胴部片	残高　2.50	沈線３，縄文ＲＬ／ナデ	にぶい褐　7.5YR　6／3 〃　〃　5／3	長石	縄文後期
Fig.10－18	第１次調査 ＴＰ10―ＳＫ１	縄文土器 ／胴部片	残高　3.60	沈線３（重弧状），縄文ＲＬ／ナデ	黒褐　10ＹＲ　3／3 〃　〃　3／2	長石，石英	縄文後期
Fig.10－19	第１次調査 ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	縄文土器 ／胴部片	残高　1.30	沈線２，縄文ＲＬ／ナデ	にぶい黄褐　10ＹＲ　5／3 にぶい黄橙　〃　6／6	長石,石英,角閃石	縄文後期，宿毛式？
Fig.10－20	第１次調査 ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	縄文土器 ／胴部片	残高　1.20	沈線２，縄文ＲＬ／剥落，器厚不明	黒褐　2.5Y　3／2 にぶい褐　7.5YR　5／4	長石	縄文後期
Fig.10－21	第１次調査 ＴＰ10―ＳＫ１	縄文土器／深鉢 ／胴部片	残高　2.60	沈線２，縄文ＲＬ／ナデ	にぶい黄橙　10ＹＲ　6／4 〃　〃　7／4	長石，円砂粒	縄文後期
Fig.10－22	第１次調査 ＴＰ10・Ⅱ層	縄文土器／深鉢 ／胴部片	残高　2.70	沈線文(円形入組み)，縄文?／ナデ(粗い)	明赤褐　5ＹＲ　5／6 にぶい黄褐　10ＹＲ　4／3	長石，石英，雲母	縄文後期・平城式
Fig.10－23	第１次調査 ＴＰ10・Ⅱ層	縄文土器 ／胴部片	残高　2.20	沈線３，縄文？／ナデ？	にぶい赤褐　5ＹＲ　4／4 明赤褐　〃　5／6	長石，石英，雲母，角閃石	縄文後期・平城式？
Fig.10－24	第１次調査 ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	縄文土器／深鉢 ／胴部片	残高　3.30	縄文ＲＬ，ナデ／ナデ，条線１	にぶい黄　2.5Y　6／3 暗灰黄　〃　5／2	円砂粒，長石，チャート	縄文後期
Fig.10－25	第１次調査 ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	縄文土器 ／胴部片	残高　1.60	縄文ＲＬ，ナデ／ナデ	灰褐　5ＹＲ　4／2 にぶい赤褐　〃　4／4	長石，雲母	縄文後期
Fig.10－26	第１次調査 ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	縄文土器 ／胴部片	残高　2.70	沈線２，刺突文１，ミガキ？／ナデ	明褐　7.5ＹＲ　5／6 にぶい黄褐　10ＹＲ　5／3	長石，雲母，石英，角閃石	縄文後期
Fig.10－27	第１次調査 ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	縄文土器 ／胴部片	残高　1.20	沈線１，ナデ／ナデ	明褐　7.5ＹＲ　5／6 橙　〃　6／6	長石	縄文後期
Fig.10－28	第１次調査 ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	縄文土器 ／胴部片	残高　1.70	沈線３，ナデ／剥落，器厚不明	にぶい黄橙　10ＹＲ　7／3 褐灰　7.5ＹＲ　5／1	長石，円砂粒	縄文後期
Fig.10－29	第１次調査 ＴＰ10・Ⅱ層	縄文土器 ／胴部片	残高　2.30	ナデ（丁寧）／沈線３，ナデ（丁寧）	にぶい黄橙　10ＹＲ　7／3 〃　〃　7／4	長石，石英，雲母	縄文後期
Fig.10－30	第１次調査 ＴＰ10―ＳＫ１	縄文土器／深鉢 ／胴部片	残高　2.20	ヘラナデ？，沈線？／ナデ，ヘラナデ	にぶい黄橙　10ＹＲ　6／4 灰黄褐　〃　5／2	チャート？	縄文後期？ 弥生土器？
Fig.10－31	第１次調査 ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	縄文土器／深鉢 ／胴部片	残高　3.90	沈線１？，ナデ／ナデ	にぶい黄褐　10ＹＲ　5／4 にぶい赤褐　5ＹＲ　4／4	長石，石英	縄文後期
Fig.10－32	第１次調査 ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	縄文土器／深鉢 ／胴部片	残高　4.40	ナデ（粗い）／ナデ（丁寧）	にぶい褐　7.5ＹＲ　5／4 赤褐　5ＹＲ　4／6	長石，石英，雲母	縄文後期
Fig.10－33	第１次調査 ＴＰ10・Ⅱ層	縄文土器 ／胴部片	残高　4.30	ナデ（粗い）／ナデ	にぶい褐　7.5ＹＲ　5／3 にぶい黄橙　10ＹＲ　5／3	チャート	縄文後期？
Fig.10－34	第１次調査 ＴＰ10―ＳＫ１	縄文土器／深鉢 ／胴部片	残高　3.90	ナデ（粗い）／ナデ	暗灰黄　2.5Y　5／2 にぶい黄橙　10ＹＲ　6／3	長石，赤色砂粒	縄文後期？
Fig.11－35	第１次調査 ＴＰ10―ＳＫ１	弥生土器 ／口縁部片	残高　2.10	斜位隆帯（削出し？）／ナデ	灰黄褐　10ＹＲ　5／2 にぶい黄橙　〃　6／3	白色砂粒	弥生前期
Fig.11－36	第１次調査 ＴＰ10―ＳＫ１	弥生土器 ／口縁部片	残高　2.80	沈線１？，ナデ／ナデ	にぶい黄橙　10ＹＲ　6／4 〃　〃　〃	長石，円砂粒，チャート	弥生前期
Fig.11－37	第１次調査 ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	弥生土器／壷 ／口縁部片	残高　3.90	段１，調整不明／ナデ	明黄褐　10ＹＲ　6／6 にぶい黄褐　〃　5／4		弥生前期
Fig.11－38	第１次調査 ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	弥生土器 ／口縁部片	残高　1.20	ナデ，沈線状掻き取り 上面：刻目，内方に拡張	黄灰　2.5Y　4／1 〃　〃　5／1	雲母	弥生前期？
Fig.11－39	第１次調査 ＴＰ10―ＳＫ１	弥生土器 ／胴部片	残高　4.70	沈線１？，ナデ？（剥落）／ナデ	明黄褐　10ＹＲ　6／6 にぶい黄橙　〃　7／3	長石	弥生前期
Fig.11－40	第１次調査 ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	弥生土器 ／胴部片	残高　2.90	沈線１？，ナデ／ナデ	にぶい橙　7.5ＹＲ　6／4 灰黄褐　10ＹＲ　4／2	円砂粒	弥生前期
Fig.11－41	第１次調査 ＴＰ10―ＳＫ１	弥生土器？ ／胴部片	残高　3.30	沈線２？＋条線？，ナデ／ナデ（粗い）	にぶい黄橙　10ＹＲ　5／3 灰黄褐　〃　4／2	長石	弥生時代？
Fig.11－42	第１次調査 ＴＰ10―ＳＫ１	弥生土器 ／底部片	残高　1.10 底径　5.80	ナデ	にぶい黄褐　10ＹＲ　5／4 褐灰　〃　4／1	長石，円砂粒	弥生前期
Fig.11－43	第１次調査 ＴＰ5付近・表採	土師質土器／坏 ／底部片	残高　1.00 底径　7.80	回転ナデ	にぶい褐　7.5ＹＲ　5／3 にぶい橙　〃　6／4		回転糸切り，ロクロ右 近世？
Fig.11－44	第１次調査 ＴＰ３・Ⅲ層	土師質土器／坏 ／底部片	残高　1.50 底径　8.40	回転ナデ	橙　7.5ＹＲ　6／6 〃　〃　〃		回転糸切り，ロクロ右 近世？
Fig.11－45	第１次調査 ＴＰ８・Ⅰ層	土師質土器／鍋？ ／胴部片	残高　2.20	ナデ／ナデ？（磨滅）	にぶい褐　7.5ＹＲ　5／4 明褐　〃　5／6	長石，石英，角閃石 耐火粘土？	外面下半黒変 近世

表6　土器・陶磁器観察表2

挿図番号	出土地点・層位	器種／器形 ／部位	法量（cm，g）	文様・調整　外面／内面 その他の部位	色調　外面 内面	胎土	備考
Fig.11－46	第１次調査 ＴＰ５・Ⅰ.Ⅱ層	土師質土器 ／火鉢／胴部片	残高　4.40	孔１，ナデ／ナデ	褐灰　10ＹＲ　4／1 黄灰　2.5Ｙ　5／1	長石，石英 耐火粘土？	外面スス付着 近世
Fig.11－47	第１次調査 ＴＰ７付近・表採	瓦器／椀 ／口縁部片	残高　1.90	ナデ／ナデ，平行線状暗文	灰　Ｎ　5／ 〃　Ｎ　4／		和泉型
Fig.11－48	第１次調査 ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	瓦器／椀 ／口縁部片	残高　1.80	ナデ	淡黄　2.5Ｙ　8／3 〃　〃　〃		和泉型
Fig.11－49	第１次調査 表採	備前焼／擂鉢 ／口縁部片	残高　5.90	回転ナデ／回転ナデ，擂目７条／２cm単位	黒褐　7.5ＹＲ　3／1 〃　〃　〃		ロクロ右 中世
Fig.11－50	第１次調査 ＴＰ７付近・表採	備前焼？／壺？ ／底部片	残高　3.50 底径　10.20	回転ナデ，ケズリ／ナデ	黄灰　2.5Ｙ　6／1 灰　5Ｙ　6／1		ロクロ右 須恵器？
Fig.11－51	第１次調査 ＴＰ２・Ⅰ層	青磁／碗 ／口縁部片	残高　2.80	無文／陰刻界線２，陰刻草花文？	灰オリーブ　7.5ＹＲ　6／2 〃　〃　〃		内外面施釉 龍泉窯系Ⅰ類－2・4
Fig.11－52	第１次調査 ＴＰ８・Ⅰ層	青磁／碗 ／口縁部片	残高　2.10	鎬蓮弁文／無文	灰オリーブ　5Ｙ　5／2 〃　〃　〃		内外面施釉 龍泉窯系Ⅰ類－5
Fig.11－53	第１次調査 ＴＰ７付近・表採	青磁／碗 ／胴部片	残高　2.90	鎬蓮弁文／無文	オリーブ灰　10Ｙ　6／2 〃　〃　〃		内外面施釉 龍泉窯系Ⅰ類－5
Fig.11－54	第１次調査 表採	白磁／碗 ／口縁部片	残高　2.70	無文	灰白　7.5Ｙ　7／1 〃　〃　〃		内外面施釉 白磁、類
Fig.11－55	第１次調査 ＴＰ３・Ⅰ層	陶器／椀 ／口縁部片	残高　3.00	無文	浅黄　2.5Ｙ　7／3 〃　〃　〃		口縁端部外面一部無釉 灰釉，細かい貫入
Fig.11－56	第１次調査 ＴＰ４・Ⅲ層	陶器／皿 ／口縁部片	残高　1.70	無文	灰オリーブ　5Ｙ　6／2 〃　〃　4／2		灰釉，細かい貫入 外面広く無釉
Fig.11－57	第１次調査 ＴＰ７・Ⅰ.Ⅱ層	磁器／皿	口径　10.60 残高　2.00	無文／見込に施文 高台内：透明釉	明緑灰　7.5ＧＹ　7／1 〃　〃　〃		内外面青磁釉 高台外面一部無釉
Fig.11－58	第１次調査 表採	磁器／菊花形皿 ／底部片	残高　1.60	無文	明緑灰　10Ｇ　7／1 〃　〃　〃		内外面青磁釉　型打成形 高台内蛇の目釉ハギ 高台中央凹み＋施釉
Fig.11－59	第１次調査 ＴＰ７付近・表採	磁器／紅皿	口径　4.40 器高　1.50 底径　1.20	放射状条線／無文	灰白　Ｎ　8／ 〃　〃　〃		型押し成形 外面無釉 肥前
Fig.11－60	第１次調査 ＴＰ６・Ⅰ.Ⅱ層	磁器／紅皿	口径　4.80 残高　1.30	放射状条線／無文	灰白　5Ｙ　8／1 〃　〃　〃		型押し成形,内外面無釉? 肥前
Fig.11－61	第１次調査 ＴＰ７・Ⅰ.Ⅱ層	磁器／猪口	口径　4.80 残高　2.40	無文	灰白　7.5Ｙ　8／1 〃　〃　〃		内外面透明釉,細かい貫入
Fig.25－129	第２次調査 Ｂ４－Ｐ９	土師質土器／坏 ／口縁部片	口径　10.00 残高　2.00	回転ナデ	橙　5ＹＲ　6／6 〃　〃　〃		ロクロ右 中世
Fig.25－130	第２次調査 Ｂ４－Ｐ９	土師質土器／皿？ ／口縁部片	残高　1.80	回転ナデ	にぶい橙　7.5ＹＲ　6／4 橙　〃　6／6		ロクロ右 中世
Fig.25－131	第２次調査 Ｂ４－Ｐ９	土師質土器 ／底部片	残高　0.90 底径　4.70	回転ナデ	にぶい橙　7／4 〃　〃		回転糸切り，ロクロ右 中世
Fig.25－132	第２次調査 Ｂ４－Ｐ８	土師質土器／坏 ／底部片	残高　1.50 底径　7.40	回転ナデ？（磨滅）／回転ナデ	橙　5ＹＲ　6／6 〃　〃　〃		回転糸切り，ロクロ右 中世～？
Fig.25－133	第２次調査 Ⅰ.Ⅱ層	土師質土器／坏 ／底部片	残高　1.10 底径　7.20	回転ナデ／回転ナデ，ナデ 底面：沈線状圧痕２	にぶい黄橙　10ＹＲ　7／3 〃　〃　7／4		回転糸切り 中世
Fig.25－134	第２次調査 Ｄ２－Ｋ４	土師質土器 ／火鉢？／胴部片	残高　2.10	鍔付き？，孔１，ナデ／ナデ	にぶい黄橙　10ＹＲ　5／3 黒　5ＹＲ　2／1	長石，石英，雲母 耐火粘土？	内外面黒変 近世
Fig.25－135	第２次調査 Ｂ４－Ｐ６	瓦質土器？ ／底部片	残高　3.50	ハケ状条線４条/0.7㎝単位，ナデ ／ナデ？（磨滅）	灰　5Ｙ　4／1 オリーブ黒　〃　3／1		近世？
Fig.25－136	第２次調査 Ⅰ.Ⅱ層	青磁／碗 ／口縁部片	口径　13.40 残高　2.40	無文	灰白　7.5Ｙ　7／2 〃　〃　〃		内外面施釉 龍泉窯系Ⅰ類－1？
Fig.25－137	第２次調査 Ｂ３－Ｐ２	青磁／碗 ／口縁部片	残高　2.40	鎬蓮弁文／無文	オリーブ灰　2.5ＧＹ　6／1 〃　〃　〃		内外面施釉 龍泉窯系Ⅰ類－5
Fig.25－138	第２次調査 表採	白磁／碗 ／口縁部片	口径　14.70 残高　1.60	無文	灰白　2.5ＧＹ　8／1 〃　〃　〃		内外面施釉 白磁Ⅳ類
Fig.25－139	第２次調査 Ｃ３－Ｐ１	磁器／蓋 ／口縁部片	残高　1.70	草花文？／四方襷文	灰白　Ｎ　8／ 〃　〃　〃		染付
Fig.25－140	第２次調査 表採	磁器／碗 ／口縁部片	残高　2.80	無文	灰白　10Ｙ　7／1 〃　〃　〃		内外面施釉，青磁釉？ 貫入あり
Fig.25－141	第２次調査 Ｃ４－Ｐ３	磁器／碗 ／口縁部片	残高　3.50	桜，唐草，区画，獅子？，版キズあり／無文	灰白　10Ｙ　8／1 〃　〃　〃		染付，内外面施釉
Fig.25－142	第２次調査 Ｃ４－Ｐ３	磁器／皿 ／口縁部片	口径　11.00 残高　2.30	無文	灰白　Ｎ　8／1 〃　〃　〃		内外面施釉
Fig.25－143	第２次調査 Ｃ３－Ｐ１	磁器／皿 ／底部片	残高　1.10 底径　5.80	無文	灰白　Ｎ　8／ 〃　〃　〃		内外面施釉
Fig.35－152	第３次調査 Ⅲ区―Ｐ15	縄文土器 ／口縁部片	残高　2.05	ナデ／沈線１，ナデ	にぶい黄橙　10ＹＲ　7／2 〃　〃　〃	長石，石英，雲母	縄文後期・彦崎ＫⅡ式？
Fig.35－153	第３次調査 Ⅲ区・Ⅰ層	縄文土器？ ／胴部片	残高　1.70	突帯貼付，ナデ／ナデ	にぶい橙　2.5ＹＲ　6／4 明赤褐　〃　5／6	石英，長石	縄文後期？
Fig.35－154	第３次調査 Ⅰ区・Ⅱ層	縄文土器 ／胴部片	残高　1.55	縄文ＲＬ，ナデ／ナデ（丁寧）	明赤褐　2.5ＹＲ　5／6 〃　〃　〃	長石，石英	磨消縄文 縄文後期・平城式
Fig.35－155	第３次調査 Ⅰ区・Ⅰ.Ⅱ層	縄文土器／深鉢 ／胴部片	残高　2.40	沈線３，縄文ＲＬ，ミガキ ／ミガキ～ナデ（丁寧）	明赤褐　5ＹＲ　5／6 〃　〃　〃	長石，石英，雲母， 角閃石	磨消縄文 縄文後期・平城式
Fig.35－156	第３次調査 Ⅰ区―ＳＸ１	縄文土器 ／胴部片	残高　4.10	縄文ＲＬ，ミガキ／ナデ	にぶい黄橙　10ＹＲ　6／3 灰黄褐　〃　5／2	長石	縄文後期
Fig.35－157	第３次調査 Ⅰ区―ＳＸ１	縄文土器？ ／底部片	残高　2.20	ナデ（粗い），指頭押圧／ナデ（粗い）	にぶい褐　7.5Ｙ　5／4 にぶい黄褐　10ＹＲ　5／3	長石	縄文後期？
Fig.35－158	第３次調査 Ⅰ区・Ⅱ層	土師器／高坏 ／裾部片	残高　1.70	ミガキ？，沈線状破損／ナデ	にぶい黄橙　10ＹＲ　7／3 〃　〃　〃		古墳時代
Fig.35－159	第３次調査 Ⅰ区・Ⅰ.Ⅱ層	土師質土器 ／底部片	残高　1.20 底径　7.00	磨滅，不明／回転ナデ	浅黄橙　10ＹＲ　8／4 〃　〃　8／3		中世
Fig.35－160	第３次調査 Ⅰ区―Ｐ21	土師質土器／坏 ／底部片	残高　1.50 底径　5.50	回転ナデ／回転ナデ（ヘラ使用？）	橙　7.5ＹＲ　7／6 浅黄橙　〃　8／6		回転糸切り，ロクロ右 中世
Fig.35－161	第３次調査 Ⅰ区・Ⅱ層	土師質土器 ／底部片	残高　1.10	回転ナデ／回転ナデ（ヘラ使用？）	にぶい褐　7.5ＹＲ　6／3 〃　〃　〃		回転糸切り，ロクロ左 中世？
Fig.35－162	第３次調査 Ⅰ区・Ⅱ層	土師質土器／坏 ／底部片	残高　1.40 底径　3.80	回転ナデ	橙　7.5ＹＲ　7／6 にぶい橙　〃　7／4		回転糸切り，ロクロ右 近世？
Fig.35－163	第３次調査 Ⅱ区・Ⅱ層	土師質土器／坏 ／底部片	残高　1.70	回転ナデ	にぶい橙　7.5ＹＲ　7／3 〃　〃　7／4		回転糸切り，ロクロ右 外面：スス・タール付着, 灯明皿？　近世

表７　土器・陶磁器観察表３

挿図番号	出土地点・層位	器種／器形 ／部位	法量（cm，g）	文様・調整　外面／内面 その他の部位	色調　外面 内面	胎土	備考
Fig.35－164	第３次調査 Ⅱ区・Ⅱ層	土師質土器 ／底部片	残高　1.20	回転ナデ／磨滅，不明	浅黄橙　10ＹＲ　8／3 にぶい黄橙　〃　7／4		回転糸切り，ロクロ右 中世
Fig.35－165	第３次調査 Ⅱ区・Ⅱ層	土師質土器 ／底部片	残高　0.90	磨滅，不明	浅黄橙　10ＹＲ　8／4 〃　〃　〃		ロクロ成形 中世
Fig.35－166	第３次調査 Ⅱ区・Ⅱ層	土師質土器／鍋 ／口縁部片	残高　3.40	鍔，ナデ／ナデ	灰褐　5ＹＲ　4／2 にぶい赤橙　10Ｙ　6／4	長石，石英	中世
Fig.35－167	第３次調査 Ⅰ区―Ｐ16	土師質土器／鍋 ／鍔部片	残高　2.20	ナデ／―	にぶい橙　7.5ＹＲ　6／4		中世
Fig.35－168	第３次調査　Ⅱ区 ―石列周囲・Ⅱ層	須恵器 ／底部片	残高　1.30 底径　6.50	回転ナデ，ナデ／ナデ 底面：ナデ	灰　10Ｙ　6／1 〃　〃　5／1		中世
Fig.35－169	第３次調査Ⅱ区 ―石列周囲・Ⅰ.Ⅱ層	須恵器／こね鉢 ／口縁部片	残高　4.20	回転ナデ	灰　7.5Ｙ　6／1 〃　〃　〃	長石？	ロクロ右 中世，東播系
Fig.35－170	第３次調査　Ⅱ区 ―石列周囲・Ⅱ層	須恵器？／擂鉢 ／底部片	残高　3.70	ナデ／ナデ，擂目５条/1.5cm単位	にぶい黄橙　10Ｙ　6／4 〃　〃　7／3		焼成不良で非還元色 中世？
Fig.35－171	第３次調査 Ⅰ区―Ｐ14	瓦器／椀 ／口縁部片	残高　2.10	ナデ	にぶい橙　5ＹＲ　7／4 浅黄橙　10ＹＲ　8／3		和泉型
Fig.35－172	第３次調査 Ⅰ区・Ⅱ層	瓦器／椀 ／底部片	残高　0.60 底径　4.70	―／磨滅，不明 底面：断面三角形高台貼付	にぶい黄橙　10ＹＲ　6／3 〃　〃　〃		和泉型
Fig.35－173	第３次調査 Ⅰ区・Ⅰ.Ⅱ層	備前焼／擂鉢 ／口縁部片	残高　7.50	回転ナデ，ヘラナデ３条，ナデ ／回転ナデ，擂目５条/1.4cm単位	暗褐　10ＹＲ　3／3 〃　〃　〃	白色砂粒	片口部，ロクロ右 中世
Fig.35－174	第３次調査 Ⅰ区・Ⅰ.Ⅱ層	備前焼／擂鉢 ／底部片	残高　3.60	回転ナデ，ナデ ／回転ナデ，擂目７条/2.1cm単位	灰褐　7.5ＹＲ　4／2 黄灰　2.5Ｙ　6／1		ロクロ成形 中世
Fig.35－175	第３次調査 Ⅱ区・Ⅱ層	備前焼／擂鉢 ／底部片	残高　2.50	ナデ／ナデ，擂目７条/2.1cm単位	にぶい赤褐　5ＹＲ　5／3 灰黄褐　10ＹＲ　5／2	白色砂粒	中世
Fig.35－176	第３次調査 Ⅱ区・石列下層	備前焼／壺？ ／底部片	残高　3.60 底径　16.20	自然釉，光沢／回転ナデ，自然釉数カ所 底面：カヤ？燃え残り付着，緋襷状に発色	極暗赤褐　5ＹＲ　2／4 にぶい橙　〃　6／4		中世～近世？
Fig.35－177	第３次調査 Ⅰ区・Ⅰ.Ⅱ層	青磁／碗？ ／底部片	残高　2.10 底径　5.90	―／蓮花文（ヘラ描き，細い）	明オリーブ灰　5ＧＹ　7／1 〃　〃　〃		内外面施釉，貫入多い 高台内部・畳付部は無釉 中世？
Fig.35－178	第３次調査　Ⅱ区 ―石列周囲・Ⅱ層	磁器／碗 ／底部片	残高　2.40 底径　6.00	無文／？文（ヘラ描き），界線１	緑灰　7.5ＧＹ　6／1 〃　〃　〃		内外面青磁釉 高台内蛇の目釉ハギ
Fig.35－179	第３次調査 Ⅱ区・Ⅱ層	陶器／蓋 ／つまみ部片	残高　1.20 つまみ径 2.80	無文／回転ナデ	暗褐　7.5ＹＲ　3／4 灰黄　2.5Ｙ　7／2		外面鉄釉，内面無釉
Fig.35－180	第３次調査 Ⅱ区・Ⅱ層	陶器／椀 ／口縁部片	残高　4.00	無文	オリーブ黄　5Ｙ　6／3 〃　〃　〃		内外面灰釉，貫入細かい 外面一部砂粒付着
Fig.35－181	第３次調査 Ⅰ層	磁器 ／底部片	残高　0.80 底径　5.30	無文／無文，見込周縁沈線状凹み	灰白　7.5Ｙ　7／1 〃　〃　〃		内外面青磁釉，底面施釉

表８　土錘観察表

挿図番号	出土地点・層位	法量（cm，g）					文様・調整 外面／内面	色　調	備　考
		全長	全幅	全厚	孔径	重量			
Fig.11－62	第１次調査　ＴＰ７・Ⅰ.Ⅱ層	4.90	1.30	1.30	0.40	6.60	ナデ／―	灰黄　2.5Ｙ　7／2	
Fig.11－63	第１次調査　ＴＰ３・Ⅲ層	1.60	1.50	1.30	0.50	1.90	ナデ／―	にぶい黄　2.5Ｙ　6／3	
Fig.11－64	第１次調査　ＴＰ２・Ⅰ層	1.20	1.20	0.90	0.30	1.50	ナデ／―	暗灰黄　2.5Ｙ　5／2	
Fig.25－144	第２次調査　Ｃ３－Ｐ３	6.00	1.80	1.70	0.40	14.40	ナデ／―	灰　5Ｙ　4／1	外面に黒斑？
Fig.25－145	第２次調査　Ｃ３－Ｋ２	3.90	1.50	1.45	3.50	6.40	ナデ／縦位繊維圧痕	灰黄　2.5Ｙ　6／2	
Fig.35－182	第３次調査　Ⅰ区―Ｐ14	3.80	1.20	1.10	0.50	5.00	ナデ（ミガキ的） ／縦位繊維圧痕	黒褐　10ＹＲ　3／2	瓦質
Fig.35－183	第３次調査　Ⅰ区・Ⅱ層	2.60	1.20	1.20	0.30	3.20	ナデ？（磨滅） ／縦位繊維圧痕	にぶい黄　2.5Ｙ　6／3	
Fig.35－184	第３次調査　Ⅰ区―Ｐ65	2.60	1.20	0.70	0.20	2.10	ナデ（ミガキ的） ／縦位繊維圧痕	暗灰　Ｎ　3／	瓦質
Fig.35－185	第３次調査　Ⅰ区・Ⅱ層	1.70	1.00	0.90	0.50	1.00	ナデ／―	にぶい黄橙 10ＹＲ　6／3	外面黒色付着物，光沢 内面付着物，光沢
Fig.35－186	第３次調査　Ⅱ区・Ⅱ層	2.70	1.40	1.20	0.40	3.80	ナデ，使用に伴う剥離？ ／縦位繊維圧痕	灰　5Ｙ　6／1	瓦質

表９　石器・石製品・ガラス製品・金属製品観察表１

挿図番号	出土地点・層位	器種	法量（cm，g）				調　整　等	石材・材質	備　　考
			全長	全幅	全厚	重量			
Fig.12－65	第１次調査　ＴＰ７・Ⅰ.Ⅱ層	石鏃	1.70	1.30	0.25	0.40	凹基　表裏：素材面広い 未製品　左側縁欠損で製作断念? 尖端部は未調整→基部調整先行	チャート	縄文時代
Fig.12－66	第１次調査　ＴＰ10―ＳＫ１	石鏃	1.75	1.15	0.15	0.30	凹基　表裏：素材面広い	チャート	縄文時代
Fig.12－67	第１次調査　ＴＰ４・Ⅲ層	石鏃	1.65	0.85	0.30	0.30	凹基　素材面なし	チャート	縄文時代
Fig.12－68	第１次調査　ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	石鏃	0.95	1.20	0.25	0.20	凹基	チャート	縄文時代
Fig.12－69	第１次調査　ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	石鏃	1.80	1.15	0.25	0.50	凹基	チャート	縄文時代
Fig.12－70	第１次調査　ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	石鏃	1.40	0.80	0.20	0.20	凹基　左逆刺部のみ残存 素材面なし	珪質頁岩？	縄文時代
Fig.12－71	第１次調査　ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	石鏃	1.20	1.10	0.25	0.30	尖端→基部の順に側縁調整	チャート	縄文時代
Fig.12－72	第１次調査　ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	石鏃	1.50	1.30	0.30	0.50	素材面なし	チャート	縄文時代
Fig.12－73	第１次調査　ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	石鏃	1.65	1.10	0.30	0.50	完存	チャート	縄文時代
Fig.12－74	第１次調査　ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	石鏃	1.55	1.20	0.25	0.30	完存　凹基　素材面なし？	サヌカイト	縄文時代
Fig.12－75	第１次調査　ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	石鏃	1.75	1.15	0.20	0.30	凹基　素材面なし	サヌカイト	縄文時代
Fig.12－76	第１次調査　ＴＰ４・Ⅲ層	石鏃	1.50	1.10	0.30	0.60	凹基	サヌカイト	縄文時代
Fig.12－77	第１次調査　ＴＰ２・Ⅰ層	石鏃	1.80	1.10	0.35	0.60	凹基　素材面なし　尖端鈍い?	サヌカイト	縄文時代
Fig.12－78	第１次調査　ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	石鏃	0.75	0.90	0.20	0.10	尖端部のみ残存	サヌカイト	縄文時代
Fig.12－79	第１次調査　ＴＰ10―ＳＫ１	石鏃	1.10	1.00	0.20	0.20		サヌカイト?	縄文時代
Fig.12－80	第１次調査　ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	石鏃	0.85	1.10	0.20	0.10	尖端部のみ残存	サヌカイト	縄文時代
Fig.12－81	第１次調査　ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	石鏃	1.40	1.20	0.20	0.30		サヌカイト	縄文時代
Fig.12－82	第１次調査　ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	石鏃？	1.00	1.25	0.25	0.30		サヌカイト	縄文時代？
Fig.12－83	第１次調査　ＴＰ10・Ⅱ層	石鏃	2.40	1.45	0.30	1.00		サヌカイト	縄文時代？
Fig.12－84	第１次調査　ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	石鏃？	1.00	0.85	0.15	0.10	完存？　凹基	凝灰質頁岩	弥生時代
Fig.12－85	第１次調査　ＴＰ10・Ⅱ層	石鏃	3.00	1.45	0.50	1.70	ほぼ完存　縦長剥片素材 基部調整簡略　調整片面に偏る	凝灰質頁岩	弥生時代
Fig.12－86	第１次調査　ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	石鏃	2.25	1.90	0.50	2.30	平基	凝灰質頁岩	弥生時代
Fig.12－87	第１次調査　ＴＰ10―ＳＫ１	石鏃	1.95	1.60	0.35	1.10	扁平素材，周縁調整	凝灰質頁岩	弥生時代
Fig.12－88	第１次調査　ＴＰ６・Ⅰ.Ⅱ層	石鏃	2.00	1.70	0.20	0.90	扁平素材，周縁調整	凝灰質頁岩	弥生時代
Fig.12－89	第１次調査　ＴＰ10―ＳＫ１	石鏃	2.50	1.75	0.30	1.00		凝灰質頁岩	弥生時代
Fig.12－90	第１次調査　ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	石鏃	2.80	2.25	0.35	2.00	完存　平基　未使用？ 扁平素材，周縁調整	凝灰質頁岩	弥生時代
Fig.12－91	第１次調査　ＴＰ10―ＳＫ１	石鏃	1.95	2.30	0.40	1.80	凹基	凝灰質頁岩	弥生時代
Fig.12－92	第１次調査　ＴＰ10―ＳＫ１	石鏃	2.80	2.30	0.60	3.90	凹基	凝灰質頁岩	弥生時代
Fig.13－93	第１次調査　ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	石錐	1.55	0.70	0.30	0.30	縦長剥片素材　背面の稜を利用	チャート	弥生時代
Fig.13－94	第１次調査　ＴＰ10―ＳＫ１	尖頭器？	4.20	2.30	0.65	7.50	縦長剥片素材	凝灰質頁岩	弥生時代
Fig.13－95	第１次調査　ＴＰ10・Ⅱ層	尖頭器？	2.80	2.75	0.40	5.30	扁平素材，周縁調整	凝灰質頁岩	弥生時代
Fig.13－96	第１次調査　ＴＰ10―ＳＫ１	スクレーパ	2.25	3.20	0.70	2.70	石庖丁？	サヌカイト	弥生時代
Fig.13－97	第１次調査　ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	スクレーパ	3.25	3.90	0.55	9.80	左側面：礫皮面あり 横長剥片素材	凝灰質頁岩	弥生時代
Fig.13－98	第１次調査　ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	スクレーパ	3.25	3.75	0.55	7.60	横長剥片素材	凝灰質頁岩	弥生時代
Fig.13－99	第１次調査　ＴＰ10・Ⅱ層	スクレーパ	4.65	2.90	0.65	8.50	扁平素材，周縁調整　尖頭器？	凝灰質頁岩	弥生時代
Fig.14－100	第１次調査　ＴＰ11・Ⅰ.Ⅱ層	ＲＦ	1.45	1.60	0.25	0.70	周縁調整　石鏃未製品？	チャート	縄文時代？
Fig.14－101	第１次調査　ＴＰ10―ＳＫ１	ＲＦ	3.00	1.00	0.50	1.80	右側縁に調整　スクレーパ？	チャート	弥生時代
Fig.14－102	第１次調査　ＴＰ８・Ⅰ層	ＲＦ	2.20	0.85	0.25	0.70	左側縁：片面調整？ 扁平素材，周縁調整 石鏃未製品？	サヌカイト	縄文時代？
Fig.14－103	第１次調査　ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	ＲＦ	2.15	1.15	0.35	0.80	完存　右側縁：礫皮面	サヌカイト	縄文時代
Fig.14－104	第１次調査　ＴＰ10―ＳＫ１	ＲＦ	1.80	1.80	0.20	0.70	石鏃？	凝灰質頁岩	弥生時代
Fig.14－105	第１次調査　ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	ＲＦ	0.90	1.20	0.25	0.40	石鏃？	凝灰質頁岩	弥生時代
Fig.14－106	第１次調査　ＴＰ10―ＳＫ１	ＲＦ	2.50	1.00	0.20	0.60	扁平素材，周縁調整 尖端部形成前に破損した石鏃未製品？	凝灰質頁岩	弥生時代
Fig.14－107	第１次調査　ＴＰ10―ＳＫ１	ＲＦ	2.30	1.40	0.30	1.30	左側縁：片面調整？　石鏃？	凝灰質頁岩	弥生時代
Fig.14－108	第１次調査　ＴＰ10―ＳＫ１	ＲＦ	2.10	1.05	0.25	0.60	扁平素材，周縁調整 折損部以上未調整→石鏃未製品?	凝灰質頁岩	弥生時代
Fig.14－109	第１次調査　ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	ＲＦ？	2.60	2.70	1.00	8.90	石核？	凝灰質頁岩	縄文時代
Fig.14－110	第１次調査　ＴＰ４・Ⅲ層	剥片	3.55	1.60	0.90	6.30	下端に調整　未製品？ 節理多い	チャート	縄文時代
Fig.14－111	第１次調査　ＴＰ11・Ⅱ層	剥片?石核?	6.85	4.75	1.55	45.10	左側縁：打面調整？ 剥離面・礫皮面の風化進行 残核？	チャート	縄文時代？
Fig.15－112	第１次調査　ＴＰ10―ＳＫ１	石核	5.40	3.80	1.45	27.40	右側面：節理面 片面：礫皮面（円礫）　残核？	チャート	弥生時代
Fig.15－113	第１次調査　ＴＰ10―ＳＫ１	石核	3.60	4.25	2.40	33.20	主に上面が打面 右側面：礫皮面あり　残核？	凝灰質頁岩	弥生時代
Fig.15－114	第１次調査　ＴＰ10―ＳＫ１	石核	9.15	4.90	1.90	120.20	片面：礫皮面（円礫） 原核からの１次削片？ 腹面下端：石核利用時の剥離	凝灰質頁岩	弥生時代
Fig.16－115	第１次調査　表採	石錘	7.20	3.10	1.60	43.70	長軸両端打欠	泥岩	縄文時代？
Fig.16－116	第１次調査　ＴＰ10―ＳＫ１	石錘	6.40	4.60	2.15	90.80	完存　長軸両端打欠	砂岩	弥生時代？
Fig.16－117	第１次調査　ＴＰ10―ＳＫ１	石錘	8.60	6.60	1.60	157.60	ほぼ完存　長軸両端打欠	砂岩	弥生時代？
Fig.16－118	第１次調査　ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	石錘？	8.90	4.55	2.30	103.50	一端部打欠	結晶片岩	年代？
Fig.17－119	第１次調査　ＴＰ11・Ⅰ.Ⅱ層	叩石？	9.20	3.25	1.50	69.90	一端部に使用痕	結晶片岩	年代？
Fig.17－120	第１次調査　表採	磨石	10.90	9.90	4.35	665.00	完存　周縁部に使用痕 赤変，被熱？	花崗岩	年代？
Fig.17－121	第１次調査　ＴＰ２・Ⅰ層	叩石	13.60	7.00	3.00	491.00	完存　周縁部に使用痕 表裏面やや平滑	砂岩	年代？

表10　石器・石製品・ガラス製品・金属製品観察表２

挿図番号	出土地点・層位	器種	法量（cm，g）				調　整　等	石材・材質	備　　考
			全長	全幅	全厚	重量			
Fig.17－122	第１次調査　表採	叩石	11.20	8.20	4.35	550.00	完存　周縁部に使用痕 表裏面やや磨滅？	砂岩	年代？
Fig.18－123	第１次調査　ＴＰ10－ＳＫ１	叩石	12.80	11.50	4.60	935.00	表面：敲打により凹み	砂岩	弥生時代？
Fig.18－124	第１次調査　ＴＰ10・Ⅱ層	台石	16.90	13.90	7.10	2250.00		砂岩	弥生時代
Fig.19－125	第１次調査　ＴＰ３・Ⅲ層	不明石製品	2.20	1.00	0.70	2.80	円柱状　縦位の溝1条　擦切痕？	滑石？	年代？
Fig.19－126	第１次調査　ＴＰ10－ＳＫ１	半円筒状 ガラス製品	1.40	1.60	0.90	2.50	身部厚0.45cm　完存？ 半截した管玉状 縦位に径１㎜の小孔 小孔部下端側から破損 上端面・下端面は非平行 内面：縦位の擦痕	カリガラス	弥生時代
Fig.19－127	第１次調査　ＴＰ５・Ⅰ.Ⅱ層	銭貨	2.20	2.00	0.30	1.60	完存　上端部不整，バリ跡？ 表面：無銘，２か所に鉄塊付着 裏面：無銘　全面銹化，赤変		鉄銭 近世？
Fig.19－128	第１次調査　ＴＰ10・Ⅰ.Ⅱ層	鉛玉？	0.90	0.95	0.90	3.60	表面剥落	鉛？	年代？
Fig.26－146	第２次調査　Ｂ４－Ｐ３	石鏃	1.75	1.55	0.30	0.80	周縁調整・片面調整	チャート	弥生時代？
Fig.26－147	第２次調査　Ｂ４－Ｐ３	石鏃	1.15	1.05	0.15	0.10	凹基	サヌカイト	縄文時代
Fig.26－148	第２次調査　Ｂ４－Ｐ３	ＲＦ	2.85	3.10	6.00	3.40	左側面：礫皮面あり 節理面多い	チャート	縄文時代
Fig.26－149	第２次調査　Ｂ３－Ｐ２	ＲＦ	3.15	2.45	0.40	3.40	未製品？	凝灰質頁岩	弥生時代
Fig.26－150	第２次調査　Ｄ２－Ｐ３	叩石	10.40	9.60	7.00	960.00	全面敲打痕	花崗岩	年代？
Fig.26－151	第２次調査　西側畑・表採	砥石	9.75	8.45	5.70	590.00	表面：滑面 裏面：平滑面，条線（使用痕） 粗～中砥	砂岩	年代？
Fig.36－187	第３次調査　Ⅱ区・Ⅱ層	石鏃？	1.20	1.80	0.50	1.00	腹面：素材面広い	チャート	縄文時代？
Fig.36－188	第３次調査　Ⅱ区・Ⅱ層	石鏃	2.15	1.25	0.25	0.60	凹基　腹面：素材面広い	チャート	縄文時代
Fig.36－189	第３次調査　Ⅰ区・Ⅱ層	石鏃？	0.90	0.80	0.15	0.10	凹基　主に片面調整 腹面：殆ど素材面	サヌカイト	縄文時代
Fig.36－190	第３次調査　Ⅲ区－Ｐ４	石鏃	1.40	1.10	0.20	0.20	凹基　腹面：素材面広い	サヌカイト	弥生時代？
Fig.36－191	第３次調査　Ⅰ区・Ⅱ層	石鏃	1.75	1.20	0.25	0.50	凹基　主に片面調整 腹面：周縁調整	サヌカイト	縄文時代？
Fig.36－192	第３次調査　Ⅱ区・石列下層	石鏃	3.15	2.20	0.50	2.60	未製品？	サヌカイト	縄文時代？
Fig.36－193	第３次調査　Ⅰ区－Ｐ32	剥片	2.15	3.15	0.95	5.30	残核？	チャート	縄文時代？
Fig.37－194	第３次調査　Ⅱ区・石列下層	剥片	6.20	8.90	1.55	100.70	表面：礫皮面　下縁：使用痕？ 横刃形石器？	砂岩	年代？
Fig.37－195	第３次調査　Ⅱ区・石列下層	石錘？	6.00	3.10	1.15	33.20	一端部打欠	泥岩	年代？
Fig.37－196	第３次調査　Ⅱ区・石列下層	加工礫	9.40	6.20	2.15	190.00	性格不明	結晶片岩	年代？
Fig.37－197	第３次調査　Ⅱ区・石列下層	加工礫	6.80	4.15	1.30	57.30	周縁部：剥離多い　性格不明 石錘？	泥岩	年代？
Fig.37－198	第３次調査　Ⅱ区・石列下層	加工礫	10.70	5.60	2.90	250.00	長軸両端：使用痕	結晶片岩	年代？
Fig.37－199	第３次調査　Ⅱ区・Ⅱ層	加工礫	8.30	5.30	1.15	81.90	完存　長軸両端：調整剥離 石錘？	結晶片岩	年代？
Fig.38－200	第３次調査　Ⅱ区・Ⅱ層	叩石	11.20	4.05	3.20	250.90	完存　長軸両端：使用痕	結晶片岩	年代？
Fig.38－201	第３次調査　Ⅱ区・Ⅱ層	叩石	13.90	4.80	1.90	194.00	下端：使用痕	結晶片岩	年代？
Fig.38－202	第３次調査　Ⅱ区・石列下層	叩石	11.10	4.30	2.20	141.10	完存　右側縁：調整剥離？ 下端：使用痕？	結晶片岩	年代？
Fig.38－203	第３次調査　Ⅱ区・Ⅱ層	叩石	19.10	5.00	2.55	405.00	完存　下端：使用痕？	結晶片岩	年代？
Fig.38－204	第３次調査　Ⅱ区・Ⅱ層	叩石	13.00	3.60	2.70	169.80	下端：使用痕	結晶片岩	年代？
Fig.38－205	第３次調査　Ⅱ区・石列下層	叩石	15.45	6.50	3.85	556.10	完存　長軸両端部に使用痕？	結晶片岩	年代？
Fig.39－206	第３次調査　Ⅱ区・Ⅱ層	叩石	14.00	4.90	3.60	422.00	下端：使用痕　上端：調整剥離？	結晶片岩	年代？
Fig.39－207	第３次調査　Ⅱ区・石列下層	叩石	11.65	4.15	2.40	196.50	完存　下端：使用痕？	結晶片岩	年代？
Fig.39－208	第３次調査　Ⅱ区・石列下層	叩石	14.70	6.20	4.60	660.00	完存　下端：使用痕	砂岩	年代？
Fig.39－209	第３次調査　Ⅱ区・石列下層	磨石	12.40	9.80	6.65	1030.00	完存　表面：平滑　裏面：不整	砂岩	年代？
Fig.39－210	第３次調査　Ⅱ区・石列下層	磨石	13.00	10.30	3.95	840.00	表裏面：滑面，やや凹 周縁部に使用痕	花崗岩	年代？
Fig.40－211	第３次調査　Ⅱ区・Ⅱ層	砥石	12.90	4.80	5.10	580.00	角柱状　４面使用　粗～中砥	砂岩	年代？
Fig.40－212	第３次調査　Ⅱ区・石列下層	台石	11.95	9.75	6.90	1130.00	表面：平滑，やや凹 裏面：礫皮面	砂岩	年代？
Fig.40－213	第３次調査　Ⅱ区・石列下層	石皿	11.50	11.55	6.00	980.00	表面：上下２か所に凹部，下端側に擦痕 右側面：敲打により整形	砂岩	年代？
Fig.41－214	第３次調査　Ⅱ区・石列下層	台石	20.60	17.90	5.60	3200.00	完存　表裏面：平坦	花崗岩	年代？
Fig.42－215	第３次調査　Ⅱ区・石列下層	台石	15.00	18.30	5.75	2060.00	表裏面：滑面	砂岩	年代？
Fig.42－216	第３次調査　Ⅱ区・石列下層	引き臼	13.75	9.20	7.75	1100.00	背面：敲打による凹部整形，周縁部研磨 使用面：放射状摺目（４条以上単位），敲打で形成，歪つ 側面：敲打＋研磨	砂岩	上臼 年代？
Fig.42－217	第３次調査　Ⅱ区・石列下層	不明石製品	12.70	15.30	7.05	1500.00	円柱状製品の半截品 表面：敲打で整形	砂岩	年代？
Fig.36－218	第３次調査　Ⅲ区－Ｐ６	鉛玉？	0.95	0.90	0.90	3.40	表面：剥落	鉛？	年代？

付編　女川遺跡出土半円筒（勾玉）ガラスの分析

奈良国立文化財研究所　肥塚隆保

１．はじめに

出土する古代のガラスの種類は、アルカリ珪酸塩ガラスと鉛珪酸塩ガラス、そして鉛アルカリ珪酸塩ガラスに分類される。アルカリ珪酸塩ガラスはカリガラスと２種類のソーダ石灰ガラスに、鉛珪酸塩ガラスは鉛バリウムガラスと鉛ガラスに分類される。これらのガラスはいずれも弥生時代に出現していることが従来の研究で明らかにされている。なかでも、カリガラスと鉛バリウムガラスは紀元前２世紀頃には日本に伝えられていた。

今回の女川遺跡の発掘調査では半円筒状の勾玉が発見された。この遺物は青緑色を帯びた青色の半透明ガラスで、その形状は従来には見られないものであった。ここではこのガラス遺物の構造調査と材質調査を実施したので、その結果を報告する。

２．測定試料と方法

分析対象とした試料は、青緑色を帯びた青色半透明～透明を呈するガラスで、円筒を半分に切断したような形状を呈し、大きさはほぼ1.4㎝（長さ）、幅はほぼ1.6㎝でありその一端に直径がおおよそ1.5㎜程度の小さな孔が貫通している。重量はほぼ2.5ｇである。

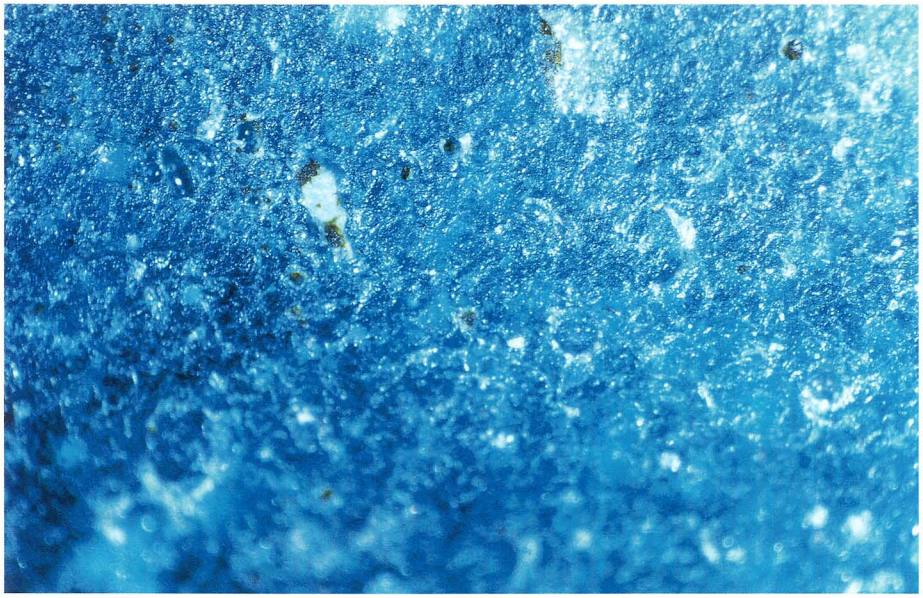
調査はまず孔の状態を調べるため実体顕微鏡による表面および断面の観察とＸ線ラジオグラフィー（Ｘ線画像強調処理も同時に実施）による調査をおこなった。Ｘ線透過撮影にあたっては、試料の孔とフィルム面が水平になるような幾何学的配置下で撮影した。撮影条件はフィルムからＸ線焦点までの距離を1.5mとし、100kV，2mA，１分間の露出をおこなった。その後、アナログ画像強調処理を加えて孔の開けかたなどを観察した。

色調に関しては紫外・可視分光光度計を用いて透過吸収スペクトルの測定をおこなった。

材質の調査は、微小領域エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析（トレックス 640S）装置を使用して、表面（風化部）と表面の一部を研磨して新鮮な面を表出して測定をおこなった。定量計算はガラス標準試料を用いて、ファンダメンタルパラメーター（ＦＰ）法により行った。なお、測定は、真空条件下で励起電圧：20～45kV，電流値：4～0.5mA，コリメータ：1ｍｍφ、測定時間：2000秒とした。

３．測定結果と考察

実体顕微鏡観察の結果、ガラス表面は所謂「ツメ跡」状になっており（図-1.）、ガラスの流動性が悪い段階で整形されたとも考えられ、また、ガラス内部にも多数の気泡が認められた。断面の一端に開けられた孔は写真（図-2.）に示すようにほぼ円形を呈しているが、円の一端は直線状を呈していた。この孔が金属線を利用して整形されたのであれば、その金属線は形状からするとダ



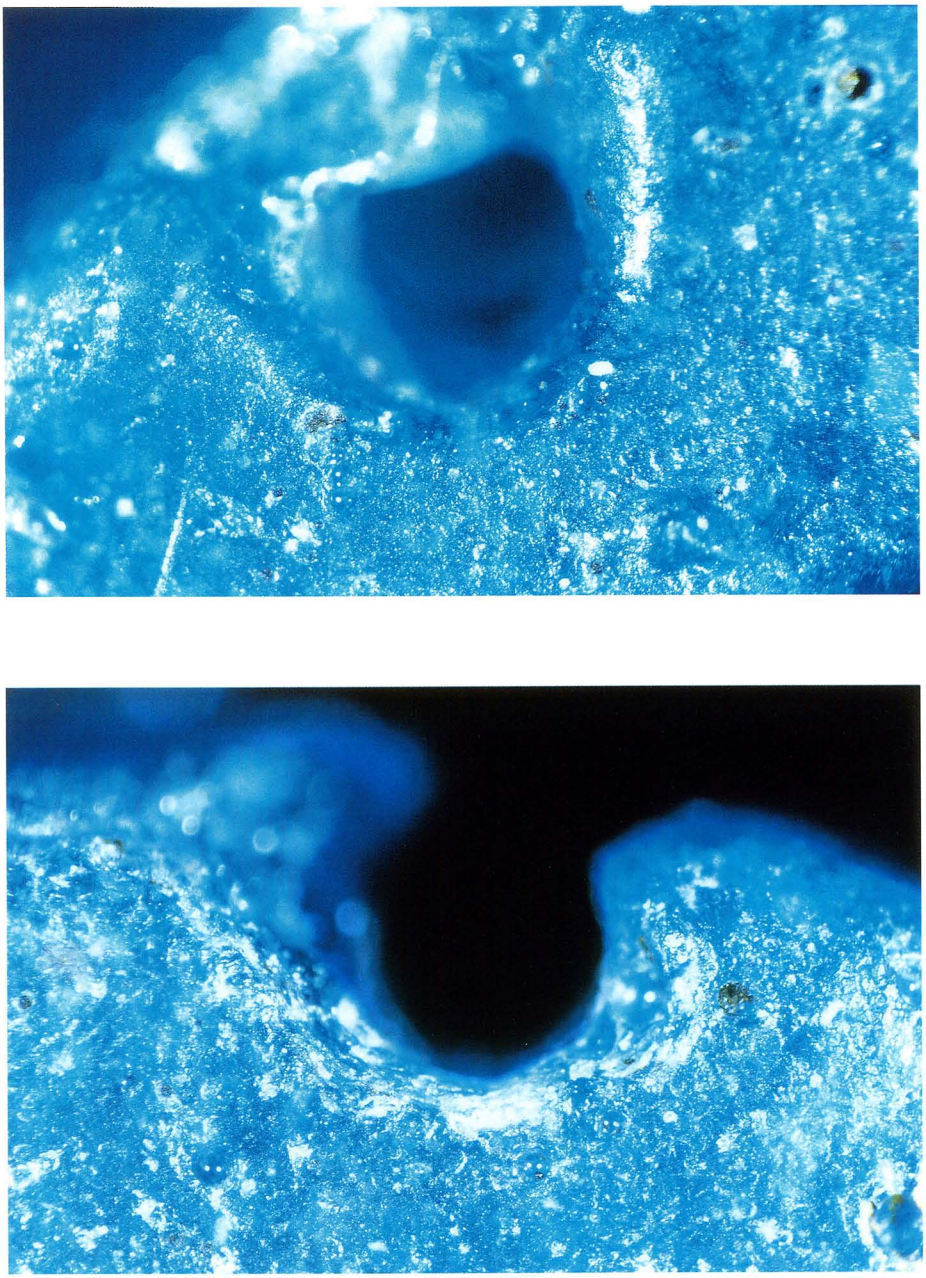
図ー1. ガラス表面の観察

イスのようなもので加工されたのではなく、型に金属を入れて叩く事によって作られた針金状のものと考えられる。

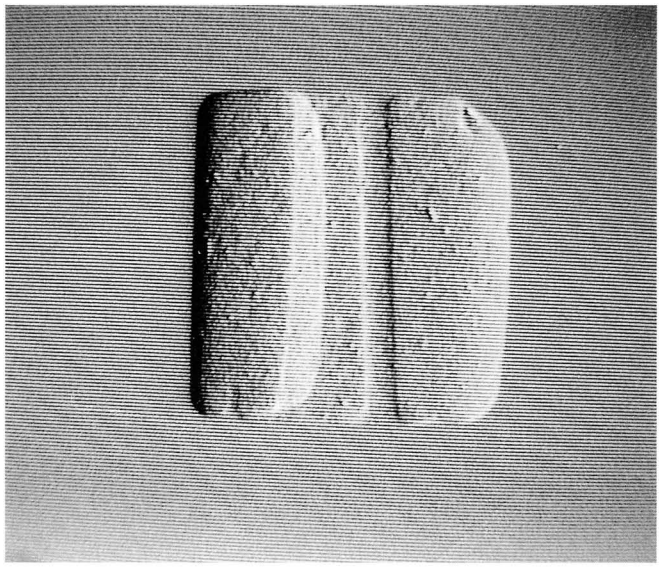
X線透過撮影の結果、断面の一端に開けられた孔はストレートに貫通しており（図-3.）、その直径はほぼ1.5mmφ前後と推定された。以上の事からこの孔は予め金属線などを鋳型に取り付けて、溶融したガラスを流し込んで作られたもので、ガラスが固化した後に錐などで孔が開けられたものでないことは明らかである。

ガラスの材質に関しては、風化表面を研磨して新鮮な部分を測定した結果、酸化カリウムと二酸化珪素を主成分とするカリガラス（K2O SiO2系）であることが同定できた。このカリガラスは酸化アルミニウムを数％含有し、酸化マグネシウムや酸化カルシウムは１％前後以下であり、従来から報告されている弥生時代の遺跡から出土するカリガラスと同じ組成を有することが明らかとなった。なお、測定値については表-1a,bに示した。

カリガラスは大きく分類するとアルカリ珪酸塩ガラスに分類されるもので、弥生時代には２種類のアルカリ珪酸塩ガラスが存在した。その一つがカリガラスで、他方はソーダ石灰ガラスである。日本では最も古いカリガラスは紀元前２世紀頃の遺跡から発見されており、この頃から日本で流通をはじめたと考えられる。いっぽうのソーダ石灰ガラスは、例外的なものを除けば３世紀後半頃から流通したと考えられるガラスである。今回出土したカリガラスは青色系であり、従来から弥生時代の遺跡で発見されるカリガラスのなかでも最も多い色調である。今回発見されたガラスの色調を精密に測定した結果、図-4に示すように708nmに極大の吸収を示しており、Cuイオンの青色の着色が原因している。また、少し緑を帯びて見えるのはFeイオンが影響しているもの



図ー2. 両断面に見られる孔の形状



図ー3. X線透過写真（画像強調処理）

と考えられる。また、従来の調査ではCuイオンの着色によるガラスにはかならずPbOやSnO_2が伴うことが明らかにされてきたが、今回の資料でも鉛、錫は検出しており、当時の日本で広く流通したカリガラスと同じ材質のガラスであることが明らかとなった。このようなカリガラスは中国では多量に出土しており、中国で作られたこれらのカリガラスは朝鮮半島を経由したり、中国から日本に直接伝えられていたのかもしれない。なお、筆者らの調査によると、カリガラスに含まれる鉛の同位体比は中国産の鉛鉱石の分布範囲に入る事を確認している。

なお、今回の資料はできるだけ資料を採集しないで調査する必要があったので、直接に物性を求める事はできなかった。しかし、珪酸塩ガラスにおいては、ガラスの組成がわかれば加成性因子を用いて近似的に屈折率、熱膨張係数などの諸物性が計算できる。ここではアッペンによる加成成因子を用いて物性値の計算をおこなった。以下はガラスの組成を構成酸化物のモル％を求めて、以下の式により計算をおこなった。

$$P=p1f1+p2f2+\cdots\cdots+pifi$$

Pは着目する性質でガラスの構成成分を（MxOy）1,（MxOy）2・・・・（MxOy）iとし、それらの含有率をf1,f2,・・・・fiとする。p1,p2,・・・piは構成成分（MxOy）1,（MxOy）2・・・・（MxOy）iの性質Pについての寄与率で加成性因子である。ただし、SiO_2、PbOなどについてはある範囲をもって与えられる。次式はの加成SiO_2成因子と含有量SiO_2の関係（アッペン）を示したものである。

SiO_2>67の条件下

$VSiO_2$=26.1+0.035（SiO_2−67）　：モル容積　VI（cm^3/mol）

$nSiO_2$=1.475−0.0005（SiO_2−67）　：屈折率　$n\ i$

αSiO_2=38−1.0（SiO_2−67）　：平均線膨張係数　$\alpha\ i$（10^{-7}/℃）

$ESiO_2$=6.6+0.02（SiO_2−67）　：縦断性率　Ei（10^3kg/mm^2）

SiO^2<67の場合は一定とみなす

$VSiO_2$=26.1,　$nSiO_2$=1.475,　αSiO_2=38.0,　$ESiO_2$=6.5

今回の計算結果については、表−2にまとめたので参考として示しておく。これはあくまでも組成から求めた理論計算値であり、実際の密度などは介在する気泡などにより変動する。

4．まとめ

今回測定した半円筒状を呈する青色～青緑色の勾玉はカリガラスでできていることが明らかにできた。カリガラスは中国では漢代の遺跡から多量に発見されており、また、日本では弥生時代の遺跡から最も多量に出土するガラスでもある。カリガラス自身は日本で製造されたとは考えられず、中国で製造されたものが伝えられたと考えられる。

今回出土した遺物は従来から発見されているカリガラスと同じ組成であるが、その形状は従来から日本で発見されていないもので、すでに加工されたものが伝えられたのか、日本において加工されたのかを検討する必要もある。

なお、吸収スペクトルの測定にあたっては　京都工芸繊維大学名誉教授　佐藤昌憲先生の御協力をいただいた。

表-1a.　ガラスの分析結果

—	網目形成酸化物	網目修飾酸化物	中間酸化物
(mol%)	83.5	13.8	1.2

表-1b.　蛍光X線分析法によるガラスの測定

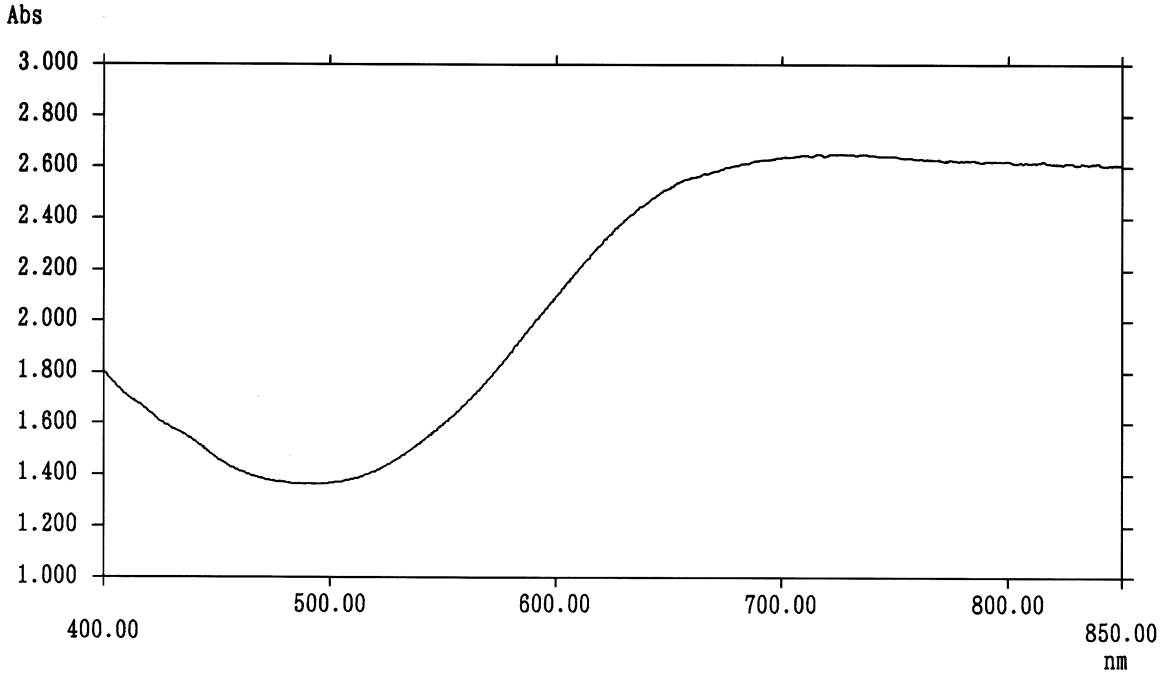
(wt%)

SiO_2	Al_2O_3	Na_2O	K_2O	MgO	CaO	TiO_2	Fe_2O_3	CuO	MnO	PbO	Rb_2O
76.7	2.0	0.4	16.3	0.5	1.0	0.03	0.5	1.2	0.2	tr	tr

tr：定量限界以下を示す。

表-2.　アッペンの加成性因子からもとめた物性

密度	屈折率	線膨張率(10^{-7}/℃)	縦断性率(10^3Kg/mm^2)
2.36	1.46	74.6	6.58



図－4．　ガラスの透過吸収スペクトル図

写真図版

女川遺跡遠景（南西より）

同上（西より）

ＴＰ１調査前状況（北より）

ＴＰ１完掘状況（南より）

ＴＰ２調査前状況（北より）

ＴＰ２完掘状況（西より）

ＴＰ３調査前状況（東より）

ＴＰ３遺構完掘状況（北より）

ＴＰ３完掘状況（北より）

ＴＰ４調査前状況（東より）

第１次調査ＴＰ１～ＴＰ４

ＴＰ４遺構完掘状況（北より）

ＴＰ５調査前状況（東より）

ＴＰ５遺構完掘状況（南より）

ＴＰ６調査前状況（北東より）

ＴＰ６完掘状況（西より）

ＴＰ７調査状況（北東より）

ＴＰ７完掘状況（北より）

ＴＰ８調査前状況（北より）

第１次調査ＴＰ４～ＴＰ８

ＴＰ８完掘状況（北より）

ＴＰ９調査前状況（南西より）

ＴＰ９完掘状況（西より）

ＴＰ10調査状況（北より）

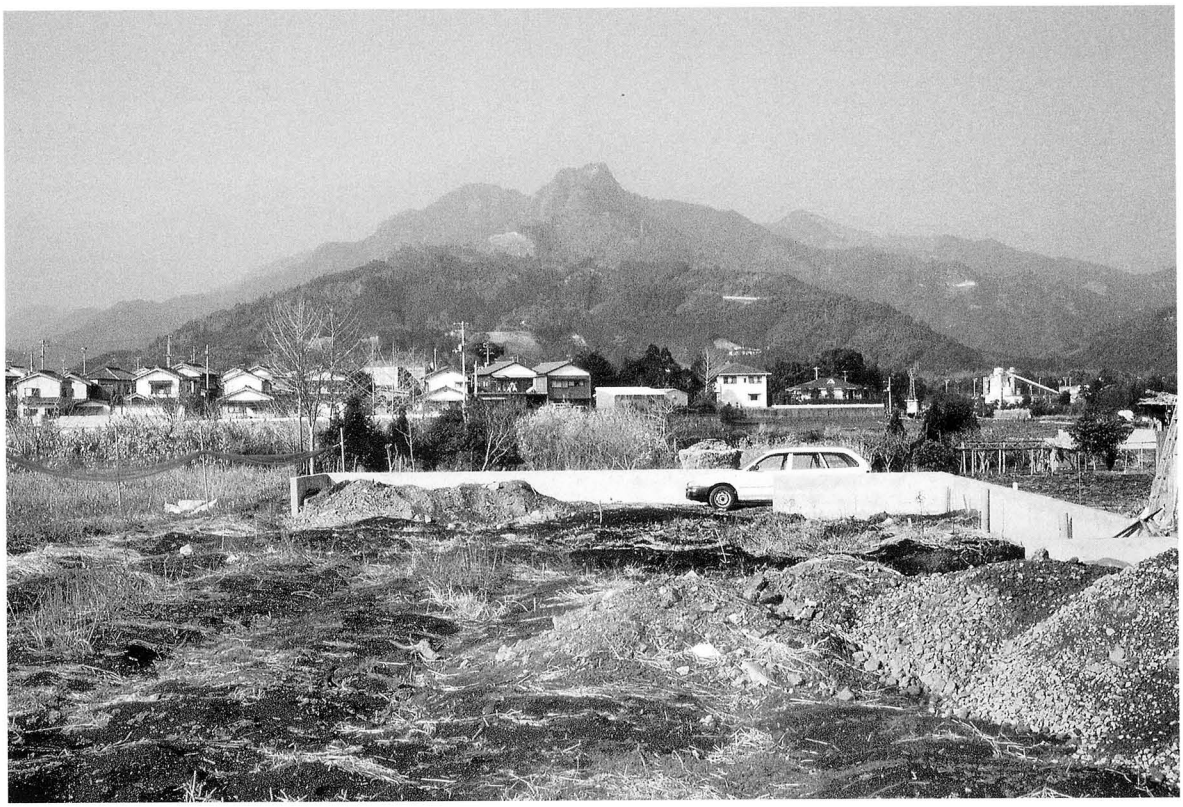
ＴＰ10遺物出土状況（東より）

ＴＰ10完掘状況（北東より）

ＴＰ11調査前状況（北より）

ＴＰ11完掘状況（西より）

第１次調査ＴＰ８～ＴＰ11



第２次調査調査前状況（東より）

同上（北西より）

第２次調査遺構検出状況（東より）

同上（東より）

第２次調査遺構完掘状況（東より）

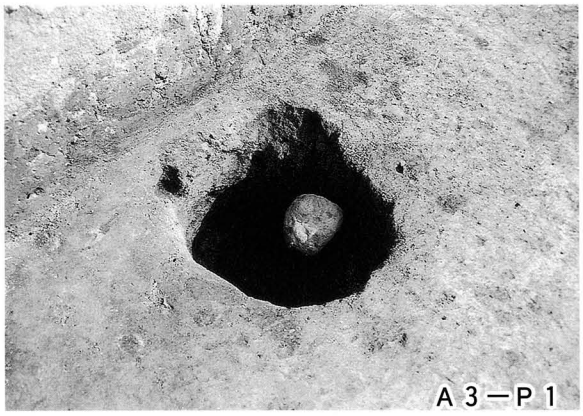
同上（東より）

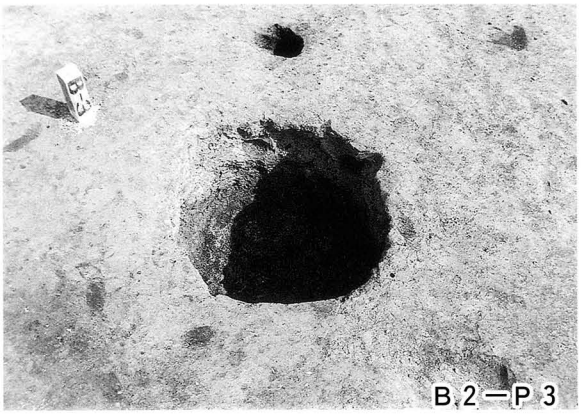
遺構検出

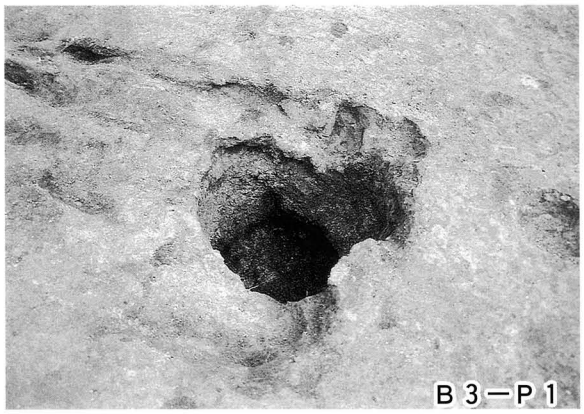
同左

遺構調査

同左

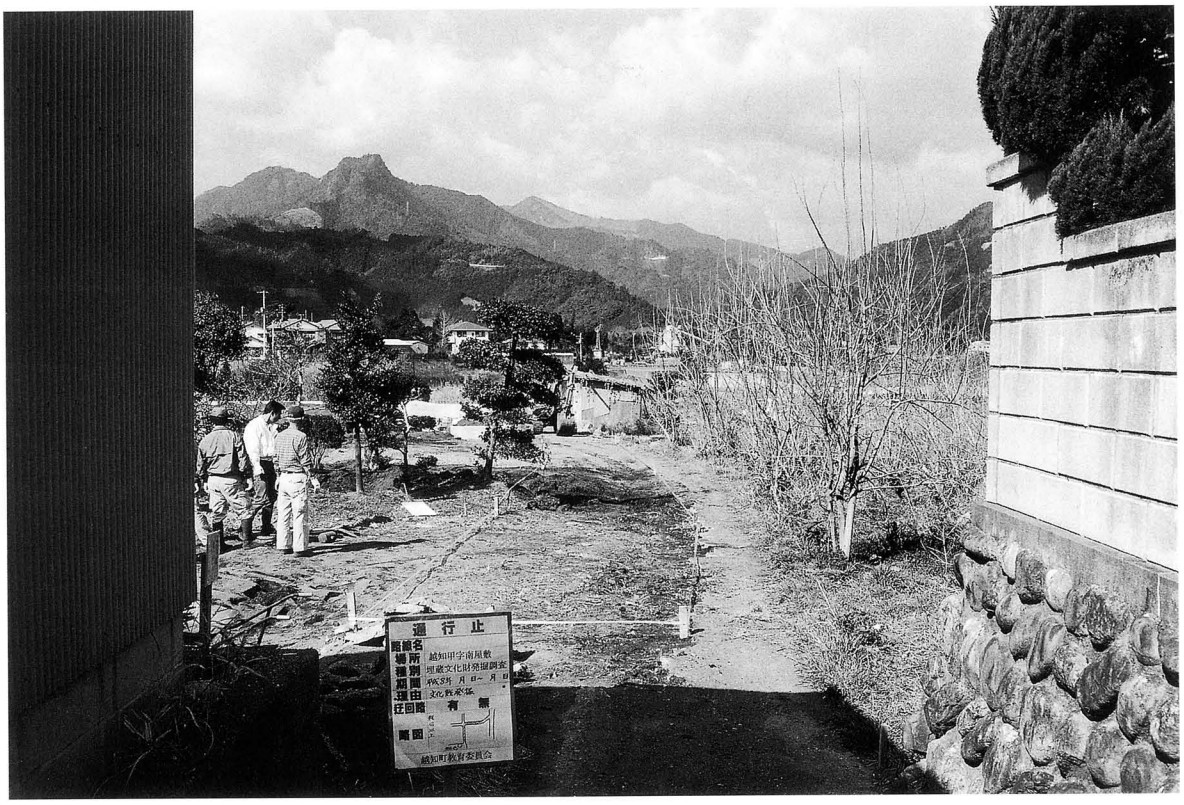

A 3 ー P 1


B 2 ー P 3


B 3 ー P 1

B 4 ー P 9

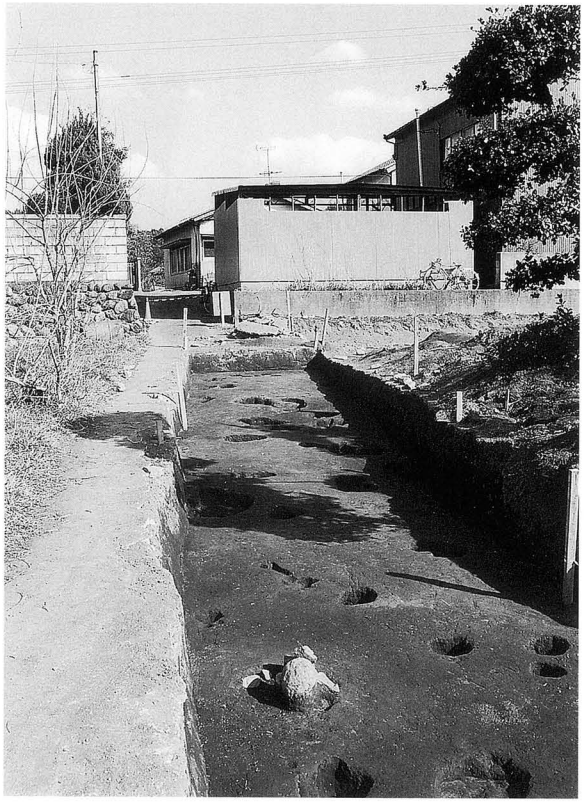
第 2 次調査調査状況，検出遺構



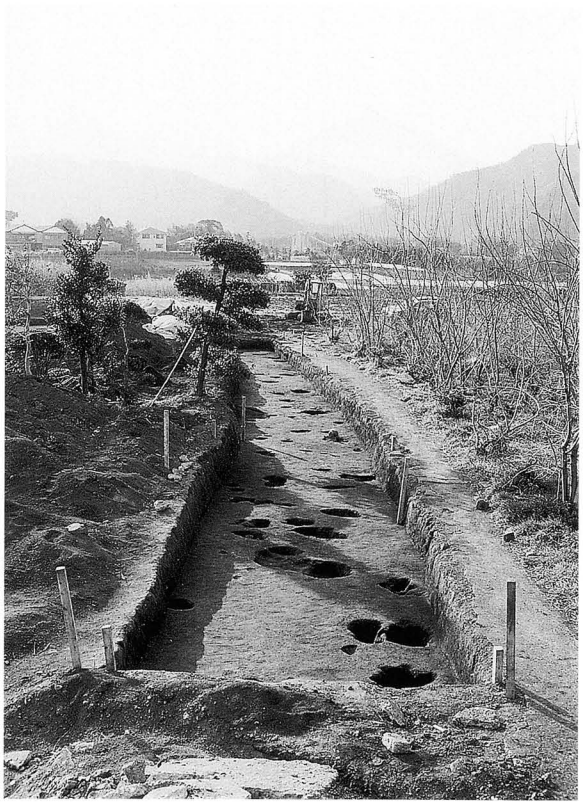
第３次調査Ⅰ区調査前状況（東より）

同上（西より）

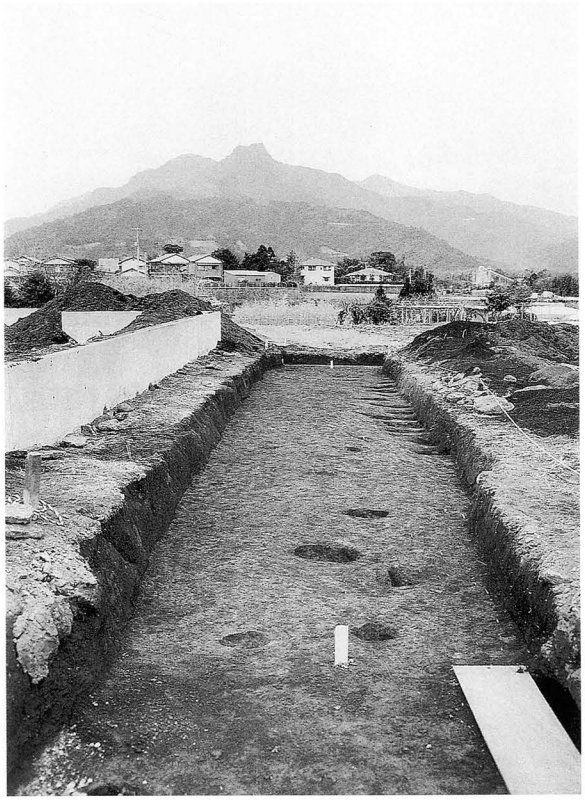
第３次調査Ⅲ区調査前状況（南より）



第３次調査Ⅰ区遺構完掘状況（西より）



同左（東より）



第３次調査Ⅱ区遺構完掘状況（東より）

同左（西より）

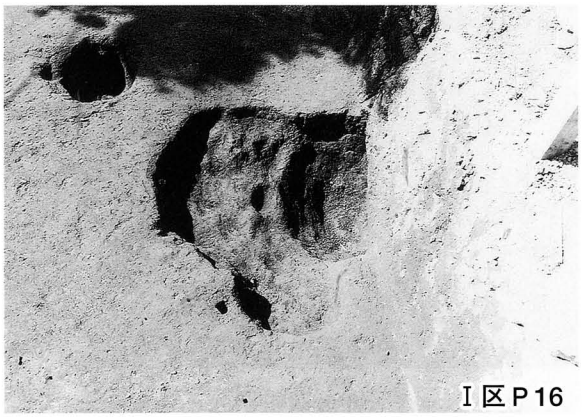
第３次調査Ⅲ区遺構完掘状況（南より）

同左（北より）

Ⅰ区遺構検出

Ⅱ区遺構検出

Ⅲ区西壁土層断面


Ⅰ区Ｐ16

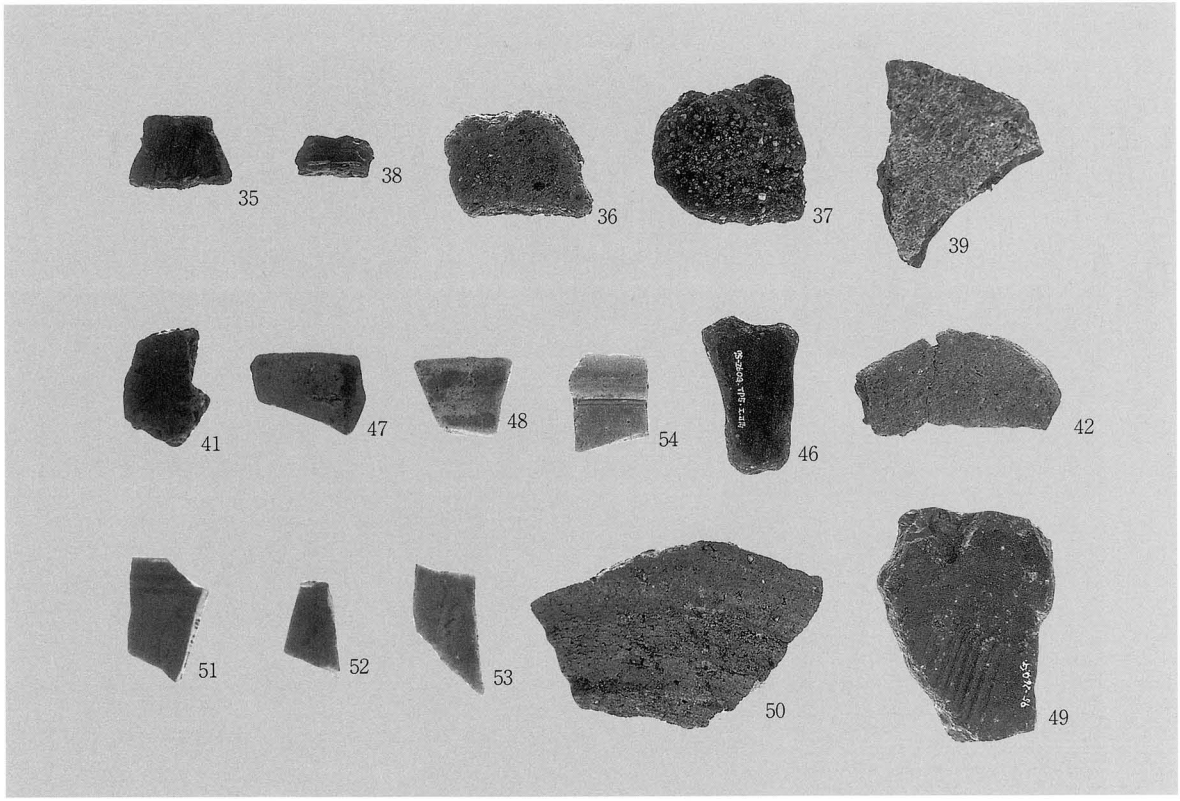
Ⅰ区ＳＸ１

Ⅱ区石列状遺構

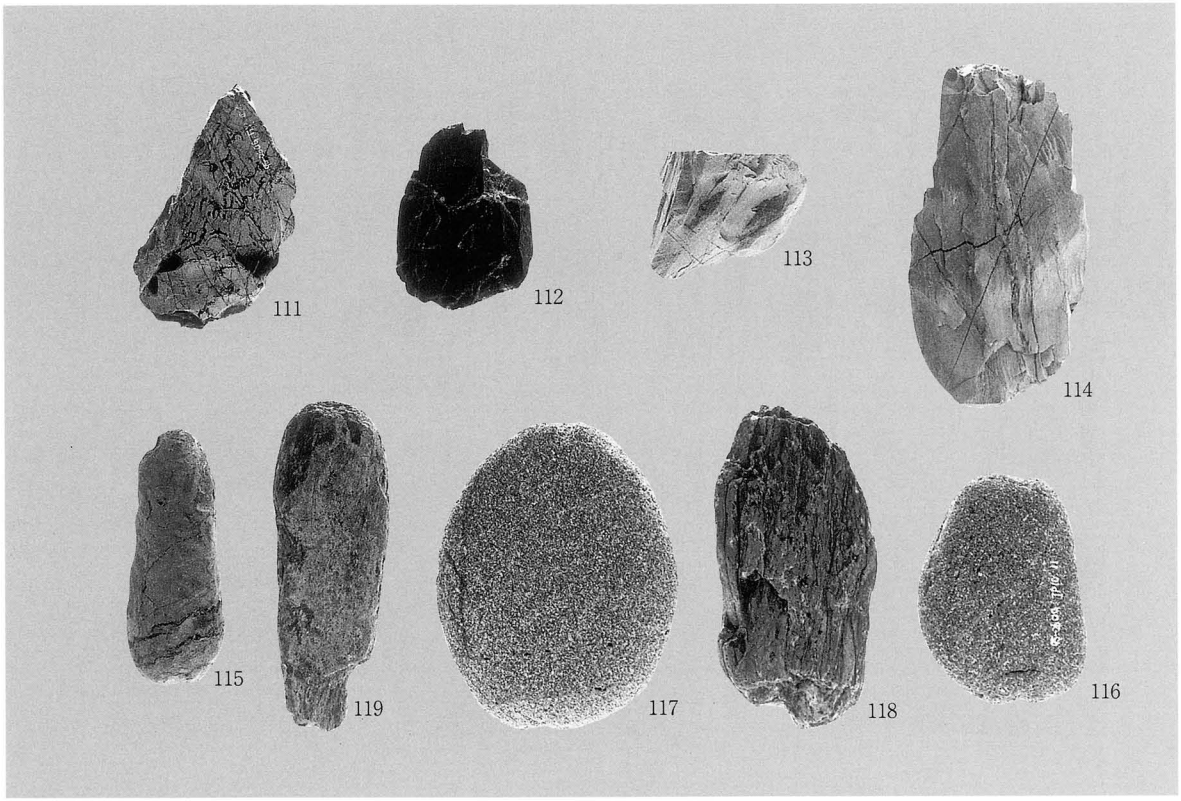
Ⅲ区Ｐ３

Ⅲ区Ｐ４

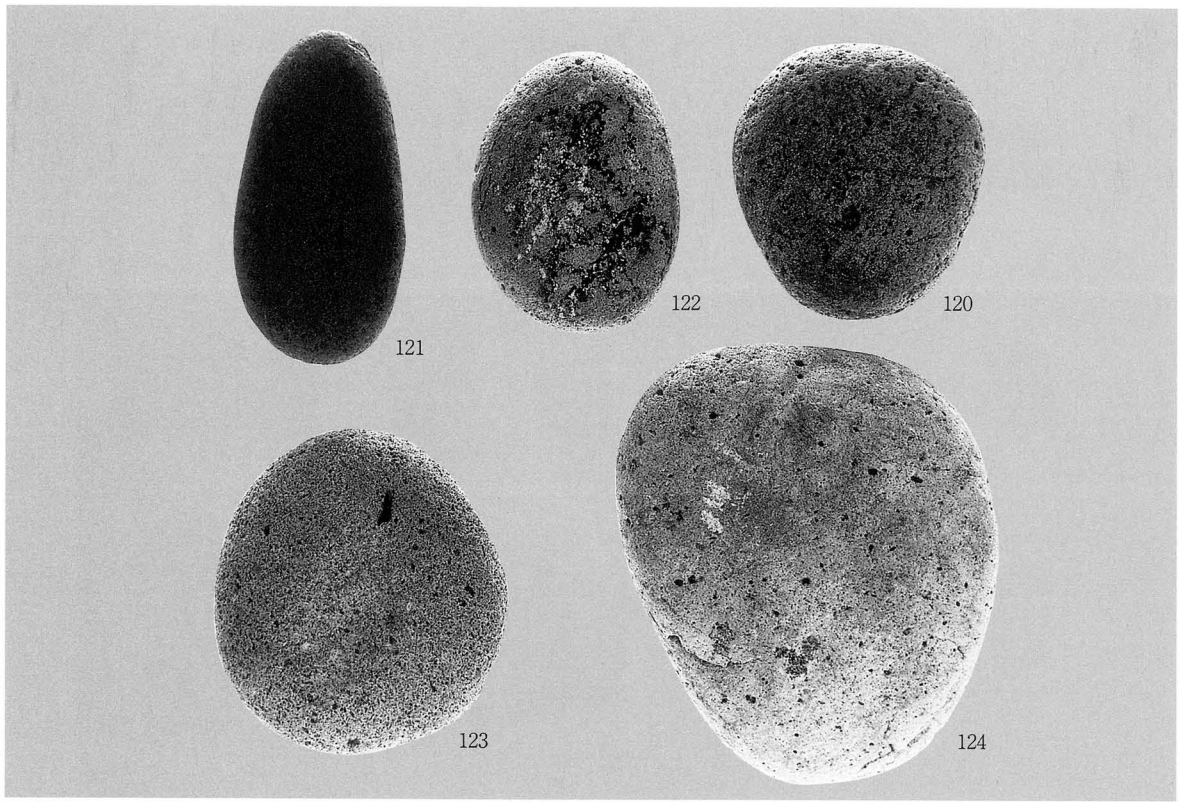
第３次調査調査状況，検出遺構



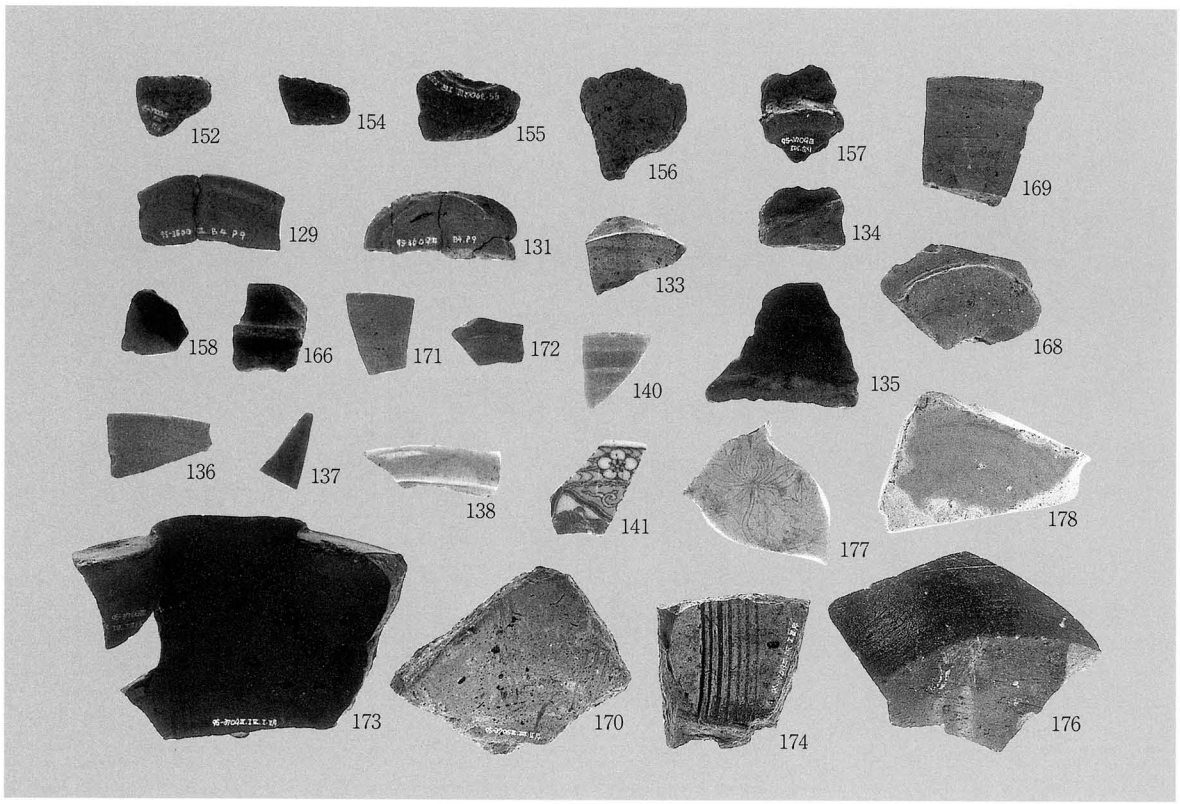
出土遺物（土器・陶磁器）



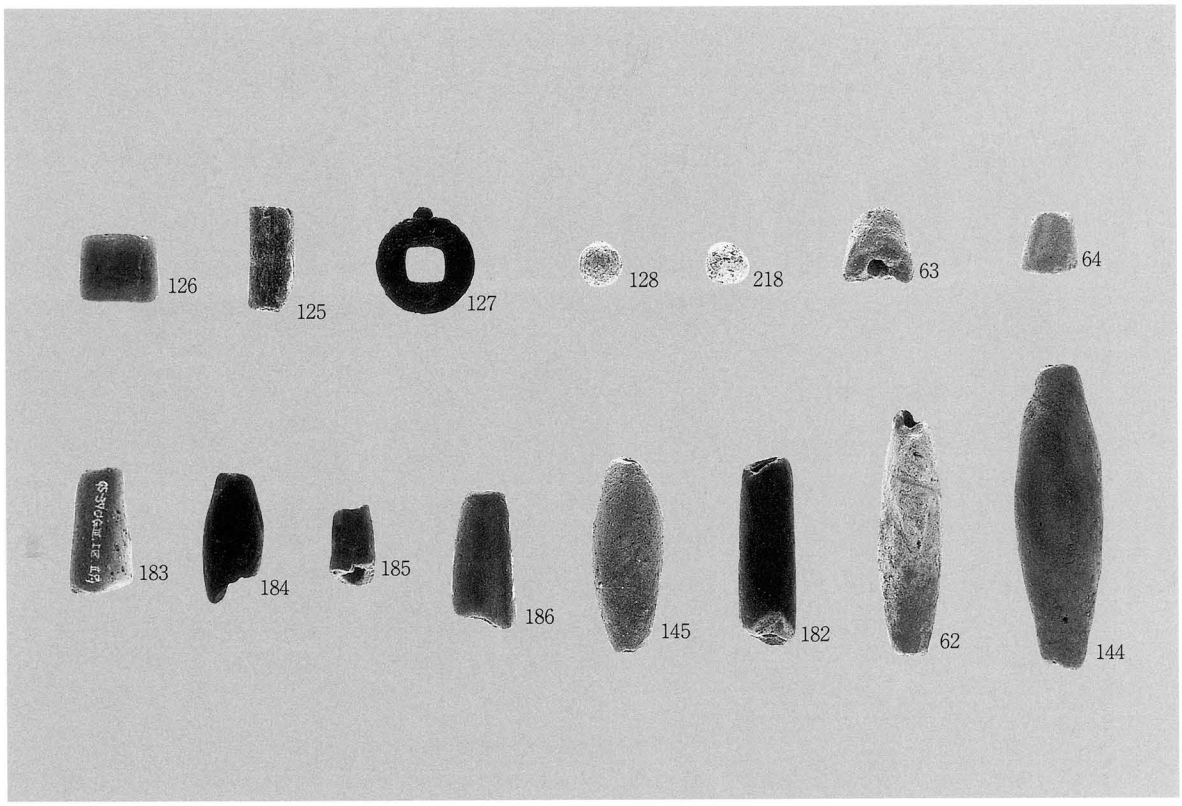
同上（石器）



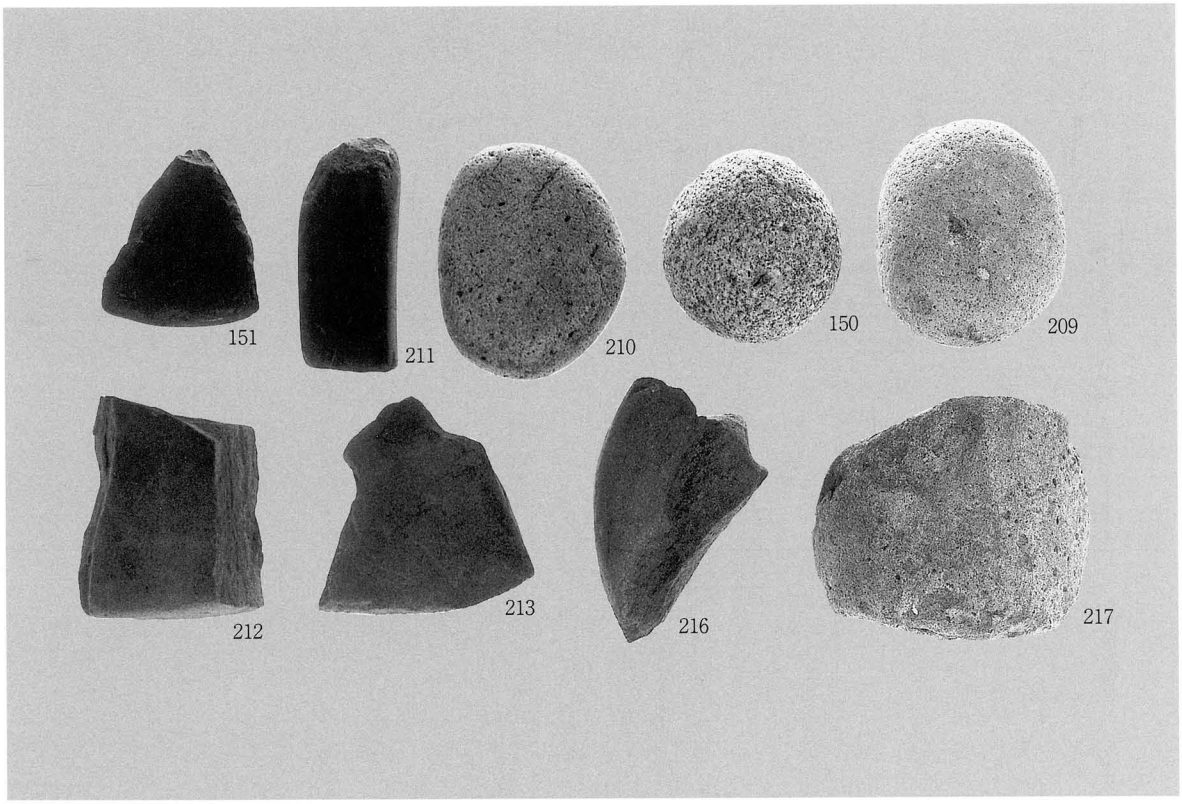
出土遺物（石器）



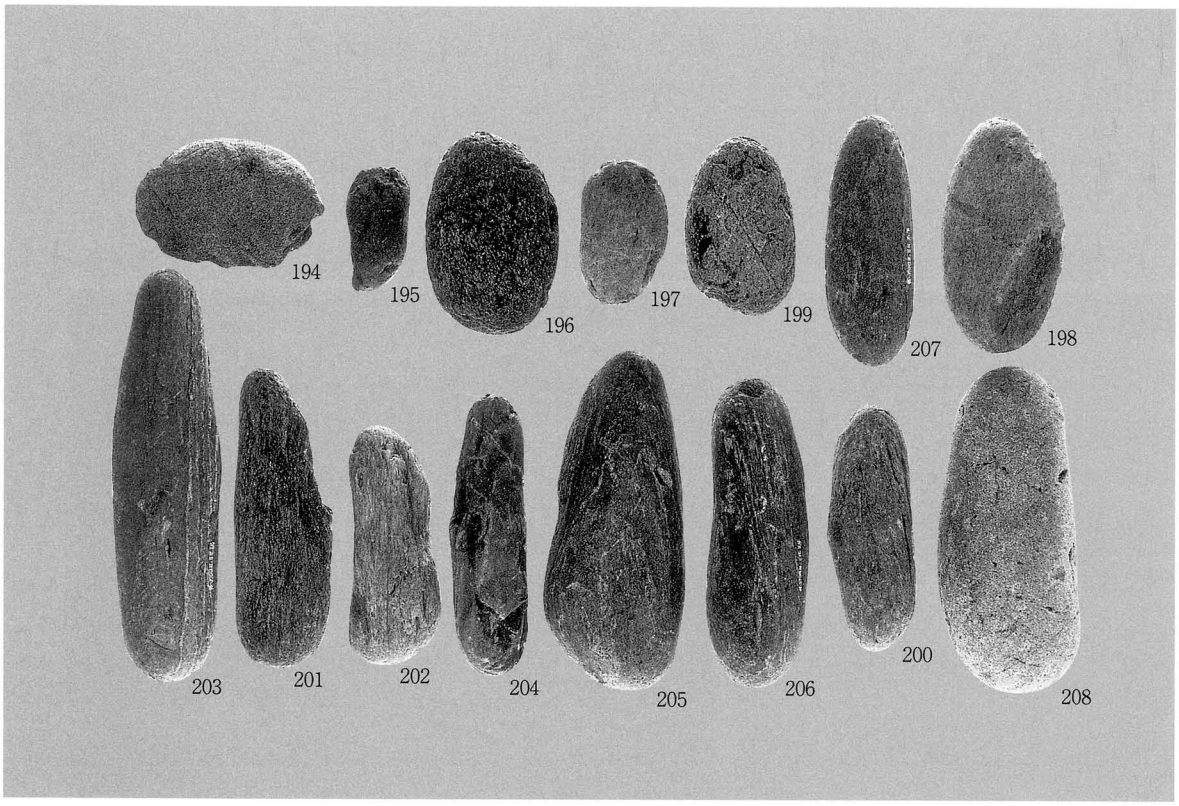
同上（土器・陶磁器）



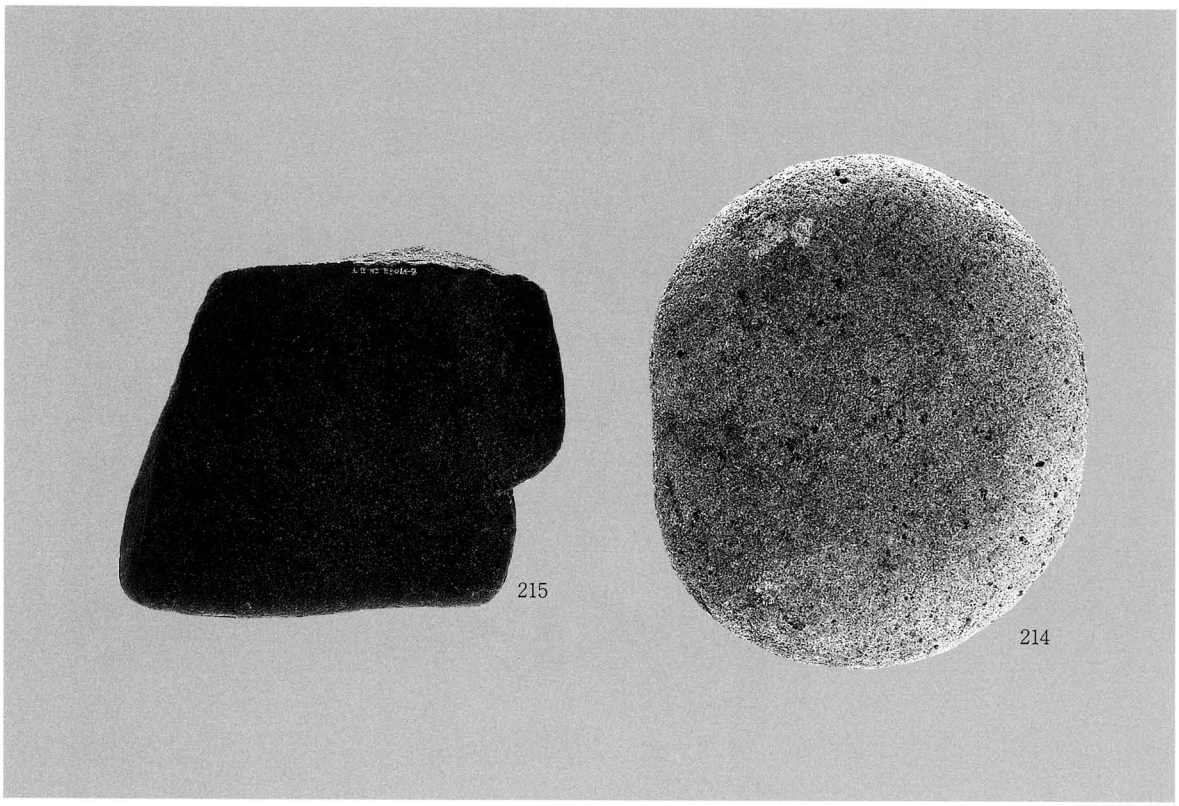
出土遺物（石製品・ガラス製品・金属製品）



同上（石器・石製品）


194
195
196
197
199
207
198
203
201
202
204
205
206
200
208

出土遺物（石器）


215
214

同　上

報告書抄録

ふりがな	おながわいせき
書名	女川遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	越知町埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第1集
編著者名	曽我貴行
編集機関	越知町教育委員会
所在地	〒781－13　高知県高岡郡越知町越知甲2562　TEL(0889－26－3400)
発行年月日	1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
女川遺跡（おながわいせき）	高知県高岡郡越知町女川北屋敷（こうちけんたかおかぐんおちちょうおながわきたやしき）ほか	39403	030022	33度31分53秒	133度15分34秒	19951205～19951221（第1次）	46	確認調査
						19960216～19960229（第2次）	175	住宅建設
						19960304～19960316（第3次）	207	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
女川遺跡	集落跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代 中世 近世	土坑状遺構　1 ピット状遺構群　1 石列状遺構　1 ピット状遺構	縄文土器，弥生土器，土師器，土師質土器，須恵器，瓦器，瓦質土器？，備前焼，青磁，白磁，陶器，磁器，土錘，石鏃，石錐，尖頭器？，スクレーパ，2次加工ある剥片，石核，石錘，叩石，磨石，砥石，台石，石皿，引き臼，半円筒状ガラス製品，銭貨，鉛玉？	半円筒状ガラス製品が出土。弥生時代前期の石器製作跡を確認。

女 川 遺 跡

１９９７年３月

発行　越知町教育委員会
高知県高岡郡越知町越知甲2562
Tel. 0889－26－3400
印刷　共和印刷株式会社